
南の海を愛する姉妹の四重奏

まるは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南の海を愛する姉妹の四重奏

【Zコード】

Z2062W

【作者名】

まるは

【あらすじ】

次期、女公爵になるため、スバルタ教育で育てられた纖細な姉と、その容姿や性質から、母にほつたらかされて育てられた元気な妹が、初めて故郷のロアアルを出て王都へ行く。

そこで一人を待っていたものは、良い男と 悪い男。

南へ

「姉さん、見て！」

馬車の硝子窓に、張り付くよつこにして外を見ていたウイニーが、感嘆の声をあげた。

振りかえる彼女の顔は、素晴らしいものを見た黒い瞳を大きく見開いて、じっと叫んだ。

「雪が終わってる！　じいから春なのー？」

その言葉は、余りに純粋過ぎて、レイシエスを笑わせる。

「やあね、ウイニー。いきなり季節は変わったりしないわ、雪のない南側へ出ただけよ」

腰を浮かせたままの彼女を席へと戻し、落ち着かせようとするものの、やはりウイニーは、そわそわして窓の外を何度も何度も見ている。

珍しくてしょうがないのだ。

少し寄り目の愛嬌のある瞳が、めまぐるしく動いている。

ウイニーは、15歳。

元気のいい　言葉を変えるなれば、跳ねやすい　輝く赤毛を何とかなだめてひつ詰めているが、本人の元気の良さはとても隠せ

るものではない。

美人と呼ぶには少し難しいが、寄り田氣味の子犬のような黒い瞳と明るい性格も相まって、愛嬌のある顔をしている。

オリーブグリーンの古風なレースをあしらつたドレスは、そんなウイニーには少しおとなしい印象だが、祖母からもらつた物なのでとても気に入つてゐるようだ。

レイシェスは、16歳。

ミルクティーのようななめらかで艶やかな淡い褐色の髪に、雪よりも白い肌、氷のような透き通る青い瞳。

気合を入れて作られた最新のドレスは、見ているだけで寒くなるような青。

母に、家の歴史の中で、一番美しい公爵として名を残すでしょうと言われた、ラットオージェン公爵家の長女にして、跡取り娘である。

そして、このまつたく真反対の姿をしている二人は 姉妹だった。

彼女らの父の領地であるロアアル（北西）地方は、雪はうんざりするほど見られるが、夏はあつといつ間に去つてしまつ。

そのため、農業が出来るのは南部の地域だけ。

代わりに、良質な針葉樹の木材と、鉄鉱石を始めとする鉱脈に恵

まれ、それらを売つて穀物などの農産物をよそから買つ」とで、ロアアールの地は成り立っていた。

そんなラットオージェン公爵家は、エージェルブ諸公国の一員である。

5人の公爵の領地と、一人の王の直轄地を合わせ、そう呼ばれている。

彼らの王は、マイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）といふ名で呼ばれている。

個人の名前はあるが、王冠を戴いたその日から、みなにそう呼ばれるのだ。

現在、8世。

すなわち8代前に、5人の領主を支配下に置き、王の名の元に彼らに公爵の地位を与え、この国を興したのである。

それまで、各領主はそれぞれ小競り合いを続け、境界線の変化を多少なりとつけていたという。

彼らの中で、ロアアール（北西）だけは、特殊な土地だった。

大きな大陸の東の端。

この国は、その大陸の一一番北側から細い回廊のようにくびれ、そこから南西へ大きな拳を描くような形で存在している。

だからこそ、『大いなる拳の王』と呼ばれているのだ。

すなわち、この国と大陸をつなぐ場所は、ロアアールしかない。
昔から、大陸の敵はこの回廊を通して、ロアアールを侵攻しようとしていたのだ。

現在では、拳側はみな平和な関係を維持できているからいいものの、彼女らの先祖は大陸と拳の両側から、圧力を受けていた。

そのため、軍は堅牢な防御を得意としている。

今もなお、大陸側の防衛にその力は受け継がれていた。

地形と気候を存分に利用し、ここ一十年、一切の侵攻を許していない。

そんな危険な領地を、レイシェスはじき継がねばならなかつた。

父は、現在病床に伏せつっている。

優秀な側近たちのおかげで、領主としての仕事は、何とか出来ているものの、とても拳の中央に位置する王都まで行くことは出来ない。

そこで、レイシェスが父の代理として向かうことになったのだ。

二年に一度、冬の終わりに行われる謁見会に参加するために。

王の威光に陰りがないことを示威するための集まりではあるが、

参加拒否は許されない。

もしも、やむを得ず公爵が出席出来ない場合は、限りなく血の近い者の代理を立てるることを許されている。

この場合、それがレイシェスといふことになるのだ。

16歳で、王を始め他の公爵たちと渡りあわねばならない。

代理の話を聞いた時、それはもうレイシェスは憂鬱になつた。

彼女は、公爵を継ぐための勉強や稽古は、子供もの頃から山ほどしてきた。

自分には、それ以外の未来などないことも分かつている。

しかし、やはつまだたつた16年しか生きていないので。

海千山千の相手を前に、うまく渡り合える度胸も自信もありはない。

それどころか、失敗してロアアールに届くほどの恥をかいてしまうのではないか そんな不安が重くのしかかる。

もし、ロアアールまで届くよつなことがあれば。

足元の視線を落としてため息をつくレイシェスは、ゆづくり憂鬱に浸ることは出来なかつた。

視線と靴の間に、ウイニーの顔が割り込んできたからだ。

「大丈夫よ、姉さん！」

妹は、おどけて笑う。

レイシエスの心配や不安を、彼女は知っている。

だから、いつも元気つけようとしてくれるのだ。

「何か失敗したら、にっこり笑って『『めんあそばせ』』と叫ぶの。姉さんの美貌で、きっと何でも許されるわ」

それに。

レイシエスが顔を上げると、ウイニーも顔の位置を戻しながらこう続けるのだ。

「他の公爵様たちが姉さんに意地悪をして、フラン（南）の公爵様だけは、絶対に姉さんの味方だから！」

ロアアルの夏の太陽よりも明るく、妹は自信たっぷりに笑ったのだった。

フランの辺

ロア・アール（北西）のラットオージェン。

ロア（北）のファークロア。

アール（西）のクレイアルス。

ニール（東）のチエツトセン

そして、フラン（南）のタータイト。

これが、諸公国の5公爵とその地域だ。

ロア・アール以外は、全てイスト（中央）の王の直轄領と接している。

そのため、レイシェスたちはロア（北）かアール（西）のどちらかの土地を通りなければ、イストに行くことは出来ない。

よほどこのことがない限り、ロアを通過するのが習わしだ。

ロアとは古い付き合いで、木材や鉱石を購入してくれるお得意様でもある。

牧畜が盛んで、良い家具職人や、鍛冶職人が揃っていることで有名な地だった。

アールは、優良で広大な農地を持つてゐるため、ロア・アールの泣

き所である食料が豊富だ。

多くの食料を買う相手なので、ロアとは逆の意味でお得意様なのが、食料といつ命に関わるものを取りしているため、時折衝突することがある。

食料を自給出来ないと云ふことは、他の公爵にロアアールの命をおさえられて云ふようなものなのだ。

逆に、土地を接していない領地を持つ相手とは、利害がぶつかることが少ないため、穏やかな付き合いが可能だ。

そんな中、フラン（南）のタータイト公爵家だけは、レイシェスたちにとっては特別な国だった。

一年中、太陽が降り注ぐといつ、ロアアールからしたら夢のよくな國。

王家の多数が、明るい赤の髪と褐色の肌を持つ、最後までイストの王の統一を苦しめた武闘派の多い國。

そう　彼らの髪は、赤いのだ。

妹のウイニーには、いや、レイシェス自身にも、間違いなくフラン（南）の血が入っていた。

父の母、すなわち祖母は、フラン（南）の公爵家から嫁いできたのである。

その髪の色は、父には遺伝しなかつたが、とびこえてウイニーに

受け継がれた。

ロアアールにいながら、フラーのことを思わずにはいられないのは、妹のこの鮮やかな赤毛のおかげだね。

彼女の衣装の多くは、祖母から譲り受けたもの。

祖母も赤毛だったため、その髪に似合つ色の衣装を揃えていたのだ。

祖母は、沢山のフラーの話を聞かせてくれた。ロアアールにはない、奇想天外な物語の数々。

そして、フラーとロアアールが、遠い距離を越えて深い縁で結ばれることとなつた昔話も。

その縁に導かれて、祖母はこんな寒い地に嫁いできたのだ。

青い空、青く透き通る海、真っ白な砂浜。

祖母の話の中で、レイシエスが死ぬままで一度は見てみたいものがそれ。

ロアアールは、冬が長くどんどんとした空が多いし、回廊の北側の海は凍つていて、南側の海はいつも灰色で荒っていた。

漁業にも貿易にも、とても向いていない。

だから、そんな鮮やかな青というものを、一度でいいから見てみたかったのだ。

そんな祖母も、レイシエスが12の時に亡くなってしまった。

ウイニーは、唯一の赤毛の理解者を失い、ひびく落ち込んでしまつたのだ。

だが、彼女には祖母から遺産が残されていた。

古いが質のいい、赤毛に似合つ色のドレスと 文箱。

祖母が、故郷であるフランと交わした手紙である。

遠く嫁いできた彼女は、時代で相手は変えていったものの、その文通は死ぬまで続いていたのだ。

最初の手紙は、祖母の弟へ。まだ、嫁いできたばかりの若かりし頃だ。

それが、次第に弟の息子になり、最後は弟の孫になった。

祖母が大事にされていだと分かるのは、手紙の相手は全てターライト公爵本人、もしくはその跡継ぎだったからだ。

祖母の弟も、弟の息子も そして昨年、弟の孫がその公爵を継いだのである。

父も公爵を継ぐ前は、手紙を交わしていたといふ。

レイシェスたちが、その習慣を受け継げなかつたのは、一重に母の圧力だつた。

母は、ロア（北）の公爵家の人物で、ロアとロアアールの友好をより深めるために嫁いできた。

元々、非常に保守的だった上に、なかなか子どもに恵まれず、心苦しい生活を送っていたようだ。

ようやく出来た子どもが、レイシエスである。

女であることを残念に思つた矢先、もう一度子どもを授かつた。

今度こそは息子を、と言つ母の祈りは結局通じず、ウイニーが生まれたのだ。

母は、そこで伏せつてしまつような、か弱い人ではなかつた。

もはや自分が子どもを産めないと分かるや、レイシエスを完璧な世継ぎに育てるため、スバルタ教育を開始したのである。

おかげで、彼女が物こころひいた頃には、多くの教師に囲まれていることとなつた。

放つておかれたのは、妹だつた。

母にとつて、二人目の娘ということだとどめを刺したウイニーは、その上、ロアにもロアアールにもほとんどない赤毛で。

一方、レイシエスは父に似た生粋のロアアールの容姿をしていて、そしてまたとても美しかつたため、母の中の格差は誰の目から見ても明らかになつた。

最低限の教師はつけられたが、事実上妹は母に無視されていたのだ。

そんなウイニーの心を、明るく育てたのが祖母だった。

その祖母が亡くなつた後、妹はドレスとフラとの文通を受け継いだのである。

誰に出しているのかと聞くと、公爵本人だというではないか。

公爵は忙しくて失礼だろうから、どなたか紹介をしてもらいたいと言つたのだが。

その次のフラからの手紙を、ウイニーは見せてくれた。

『ロアアールとの手紙は、三代に渡り公爵か公爵になるものが書く、栄誉とも言える仕事。残念ながら、まだ私には世継ぎがないため、許されるならばこのまま私と手紙を続けて頂けないだろうか』

驚いたのは、そのへりくだつた文章だ。

公爵本人が、他家の公爵の娘とは言え、これほど丁寧に手紙を書いているとは思わなかつたのである。

レイシェスは、大慌てでその文通に参加した。

ロアアールに、これほどまでに礼儀を尽くす国を、無碍にしてはならないとすぐに理解したのだ。

この付き合いは、昔話だけで終わる話ではなく、ロアアルの末に関わるかもしれない。

次期公爵になるはずの自分が、それをウイニーだけに任せたおけなかつた。

妹を、信頼していないと叫ぶ意味ではない。

自分が、責任を持つべきところだと思ったのだ。

最初の手紙は、これまで手紙を出さなかつたことへの非礼を詫びることから始まつた。

そして、それをウイニーの手紙に同封してもらひやうとしたのだ。

母は、気性も何もかも違つた祖母とは、うまくいつていなかつた。同時に、母は祖母に抱く感情を、フラン(南)に抱いているようこ思えたのだ。

放つておかれるウイニーだからこそ、母に詫びられることがなくあるいは氣づいたところで放置され 文通を続けることが出来る。

しかし、レイショスまでフランに関わっていることが分かれば、おそらく強硬に止められるだらうと思つたのだ。

母と戦つ争いをすることは、もはや彼女の中にはない。

過去何度か試みたそれは、じどりと母の絶対に折れない姿勢を見せつけられただけだった。

理屈ではない。

駄目なものは駄目なのだ。

それから、フランの公爵からの手紙は一通になつた。

ウイニー宛ての封を切ると、一つの封書が現れる。

挨拶のように、女性に対する多くの賛辞の言葉が並べられた手紙を、最初は赤面して読んだものだつた。

まだレイシエスは、そういう手紙を男性にもらつたことがなかつたのだ。

しかし、それは勿論ウイニーの手紙にも書いてあり、社交辞令であることはすぐに分かつた。

フランは、きっとこれが当たり前のだろう。

祖母への手紙でも、よく祖母をほめるよつた書き出しで始まつていたものだ。

身内であつてもそういうのだから、若い異性相手には更に情熱的なのだろう。

ロアールとはまるで違う季節の話や、大陸からの侵攻を心配する話、もしそんなことがあれば、フランから飛んで来てくれるることを

誓われたりもした。

他愛のない少女への手紙と思われるだらうが、レイシスは次期ロアールの公爵だ。

そして、手紙の相手は現フラの公爵。

そんな手紙に、どうして冗談など書けようか。

多少の誇張は入っているかもしだれないが、その点は社交辞令ではないような気がした。

事実、四代前に本当に来てくれたからだ。

昔話は、後口に譲るとじて、これらの手紙のやりとりで、ロアールの姉妹はすっかりフランを好きになってしまった。

元々、祖母の話で半分恋をしていたようなものだったのだ。

そこへ、手紙の駄目出し。

これで、フラン（南）を嫌えと言われても無理な話である。

だから。

この都への謁見会で、唯一の楽しみがあるとするなりばの公爵との対面。

これまで、一度も出会ったことはなかつた。

フラン

祖母の葬儀の頃、不幸にも公爵の正妃も亡くなっていて、他の身内の方が参列したのだ。

この馬車が、王都へ着けば、すぐにでも会える人。

だが、南への憧れを、いま思い浮かべているのはレイシェスだけではないようだ。

「フランの公爵様は、誰かと一緒に来てるかなあ」

姉の都への旅に、ギリギリで飛び乗つて来たウイニーは、かの公爵一家に興味津々のようだった。

まだ咲は無い

馬車がイスト（中央）へ一歩近づくと、外の景色はどうぞと明るいものに変わっていく。

同じ月だとこの辺り、ロアアール（北西）とは何もかも違つ景色。暦では、三月に入つたばかり。

故郷では、まだまだ雪が降る時期だとこの辺り、道端には花が咲き始めている。

妹のようにおおはしゃぎる」とはないものの、心が浮揚していくのが分かる。

春が遅い分、この国の誰よりも春を喜ぶロアアールの地。

それは、領民だけでなく、公爵家も同じなのだ。

そんな春の道程を楽しみながら ついに姉妹は、イストの都へ入つたのだった。

王の都は、すさまじかった。

大きな道には石畳が敷き詰められ、馬車の混雑も物凄い。

それを、熟練の御者たちがまるで魔法のように操って、ぶつけないようにならしていくのだ。

ロアールから連れて来た御者たちは、父の謁見会にも付き添っていた者なので、もちろん都を走つたことはあるだろう。

しかし、これまでとは明らかに違う、少しきこちない馬車の動きに、レイシエスはハラハラしてしまった。

「姉さん見て、すぐ大きな教会！」

ウイニーは気づいていないのか、すっかり窓から観光を始める。

窓の外にも興味は山ほどあるが、今はとりあえず王宮へと無事たどり着きたかった。

そんな彼女の願いは聞き届けられたようで、馬車は大きな石造りの建物の前で止まつたのだ。

「お嬢様……」から王宮に入るための馬車の先導がつきます

「そう告げられ、どれだけほつとしたことか。

レイシエスは、この馬車のことしか考えていなかつたが、馬車の後ろには荷馬車の後続があるので。

公爵家が、謁見会に参加するのに、手ぶらといふわけにはいかない。

献上品に、着替えなど滞在に必要な物などを詰め込むと、1台目
の荷馬車はいっぱいだ。

そりに、駆使も連れて来ているため、もう1台。

これだけのものを、無防備に運ぶ訳にはいかない。

護衛が、軍より騎馬で10騎。

これでも、おそれく公爵家としては質素な方だろう。

派手に飾り立てる慣習は、ロアアールにはなかった。

外で、男の話し声がする。

片方は、護衛隊の隊長のものだが、もう片方はこの施設の人間だ
うづか。

「申し訳ありません…しばしあ待ちいただけませんでしょうか」

「何と、公爵家の馬車を待たせるところのか」

じつやう、トライブルのようだ。

謁見会の年である。

5公爵が都へ詣でることを、都の人間で知らない者はいないだろ
う。

いまの王都では、他のどんな立場の人間より、最優先されるはずなのだが。

「ほんの少し前、ニール（東）の公爵様がおいでになられまして…たつた今しがた、王宮に向けて出発されたばかりなのです」

何という間の悪いことか。

たつた5組しか来ない公爵が、同じ日のほぼ同じ時間でぶつかってしまったということだ。

ニールは、彼女らの父よりも年上の老公爵だったはず。

会った事はないが、情報としてレイシスはそれを覚えていた。

「他に先導はいないのか？」

「王家か公爵家にしか使わない、特別な先導ですのです…」

外の会話に、彼女はため息をつきながら、自分の不運を嘆こうかと思つた。

幸先が悪い」と、と。

「姉さん…助けてあげない？ キツとあの人、いま泣きそつだよ」

だが、ウイニーがそっと囁いてくる。

不幸なタイミングだったのは、二人の人間にとつても同じだらう。

更に、彼には何の手落ちもないといふのに、公爵家を待たせた罰が降りかかるかもしれないのだ。

「隊長…… その辺で

妹に言われてから行動する自分を、少し恥ずかしく思いながらも、レイシエスは馬車の外に軽い制止をかけた。

「し、しかし

どうにもならないことは、彼も分かっているが、主が軽んじられるような事が許せないのだろう。

「待ちましょつ…まだ日は高いのですもの」

『まだ日は高い』

ロアールの故事でもあるそれは、『最後には勝つ』という意味。正確には、『まだ日は高い』、雪は降つておらぬし、足も動ぐ』と いう、ご先祖様の言葉だ。

戦いの場で語られたものだけに、軍人たちにとつてそれは特別な言葉。

馬車を待たされた程度で、敗者というわけではないのだと、それをレイシエスは柔らかく伝えようとしたのだ。

「……ハツ！」

一瞬にして、外の空気がピコッとしたのが分かる。

やんわり伝えようとしたつもりが、隊長の軍人魂をくすぐってしまったのだろうか。

「姉さん、やあ～」

「ウイーーー、小さくひやかされる。

「馬鹿なことを言つてないで…」

そんな事件のすぐ後、もうひとつ事件がレイシエスの唇を止めた。

後方が騒がしくなったのだ。

「待たれよ、待たれよ…」

複数の馬の、いななく声。

護衛の隊が、ざつと後ろへと駆けていくではないか。

「「うらら、公爵家の馬車である、さがられよ。」

「何と… うららも公爵家の馬車である…」

恐ろしい事態が発生したのは、考えるまでもなく明らかだった。

ニール（東）の公爵だけで飽き足らず、またも別の公爵と時間がぶつかったといつのだ。

「何で…」
「」とだ

外で、男が呆然とつぶやく声が聞こえた。

滅多に起きないことが、起きてしまったようである。

もはや、この男の職は守られないかもしない。

わすがのレイシオスも、他の公爵の怒りまでは止めようがないからだ。

しかし。

「その紋は…ロアールの公爵家であらせられるか？」

驚きの声と共に、事態は違う方向へと流れ始める。

「なんど、フラの方ではありますか」

護衛同士が、半ば呆然とお互ひの地域を呼び合いつではないか。

フラ！？

反射的に、レイシオスはウイニーと顔を見合させていた。

次に、ウイニーは慌てて首を伸ばして後ろを見よつとするが、馬車の後に窓はなく何も見えるはずなどない。

レイシオスは、おとなしく座つたまま、胸だけを高鳴らせた。

祖母の国でもあり、手紙を送り合ひ粗手でもあるフリの公爵が、すぐ後方にいるというのだ。

「ビ、ビヒヒナリ…会えないかな？」

どうしても耐え切れなそうなウイニーを、視線で制する。

「だめよ…父上の名代なのだから。公爵家のの人間が、簡単に外に出る訳にはいかないのよ」

そう遠くなく、王宮で対面することが出来るのだ。

その時に、これまで磨き上げてきた礼儀作法で、恥ずかしくなく挨拶をすればいい。

ウイニーの言つよひなことをした日には、無作法で無教養な跡取りとして、悪い噂を故郷に届けてしまつ。

そうしたら母の怒りと、更なる教育が始まるに違いない。

母のことを思い出すと、レイシエスはどれほども自分を律することが出来た。

なのに。

「私の可愛い』はほとり殿』は、一いちらかな？」

馬車の外から、信じられない言葉が投げかけられた。

低すぎない、張りのある強い声。

扉につけられた窓の外に、人影はない。

わざと、覗かないようにしてくれているのだらう。

まさか。

いや、そんなまさか。

レイシェスは、余りのことに席で硬直してしまった。

「タータイト公爵のおじ様？」

だから、ウイニーの口にふたは出来なかつた。

外にいるのが誰か分かつて、嬉しくてたまらないのだ。

「おつと、驚いたな。その呼び方は、赤毛同盟の姫ではないか？」

少し芝居がかつた、おどけた口調。

ウイニーが、軽やかに笑つた。

手紙で交わした、お互にしか分からぬのだらうか。

「さて、可愛らしい一人のはと」殿……もしあ許しいただけるなら、「尊顔を押し奉りたいのだが」

レイシェスは、余りに常識はずれで、そして強引な公爵にただただ驚くばかりだつた。

「とにかくでま、落ち着いて挨拶も出来はしない。

ど、どうしましょ。」

じきじきと高鳴る胸では、とても冷静に考えられそうにな。

やうしたら、ウイーーが。

妹が、自信満々に笑いかけてくるではないか。

まるで、『大丈夫』と言わんばかりに。

この根拠のない自信は、一体どこから出でてくるのか。

けれど、その不敵なまでの妹の態度は、ほんの少しレイシエスを落ちつかせた。

相手は公爵で、ここまでへりくだられ、馬車の前まで来てもらつたものを、無碍にするわけにもいかないだろつと。

「光榮ですか？」

緊張で震えそうになる手を、膝の上できゅっと握つて、レイシエスはよひやくやつ答えた。

馬車の外で、わずかに空気が緩んだかと思つと。

「では…失礼を」

言葉の後、一呼吸おいて馬車の扉のとつてが、ゆっくりと弧を描く。

ロアーアールよりも温かい、春の空気が扉からふわりと入ってきた。それと同時に、馬車の横にいたであろう男が、二人の前に現れる。

輝く赤毛は、ウイーーのものとそっくりだ。

前髪を後ろに流し、それでおさまりをつけているようだが、とてもおとなしい髪質には見えなかった。

太陽の下がよく似合ひ、褐色の肌と逞しい胸板。

それらを、濃い緑の礼服におさめているのが、窮屈に見えるほどだ。

彫りの深い目元を、長いまつげに縁取られた黒い瞳が輝き、その上を太めの眉がきりりと這っている。

そして、物を自由に語るに違いないと思われる、大きめの唇を全部ひっくるめて一言で言つのならば 精悍、だらうか。

「馬車の中から失礼致します。わたくし、ラットオージェン公爵代理、レイシェス・ロアーアール・ラットオージェンと申します」

ロアーアールの男の、誰とも似ていのその容姿に、レイシェスは驚きながらも己の最初の使命を果たそうとした。

その、教科書のような挨拶を、フランの公爵は目を細めて見ていく。

「噂はもつと誇張して流すべきだな…美しきはとじ殿…いや、レイシェス殿。私は、カルダ・フラ・タータイト。私は雪を見たことはないが、さつと雪の精靈は、レイシエス殿のよつた姿をしてこるので違ひない」

馬車のステップに片足をかけ、身体半分だけを中心に入れると、彼がとても大きな男であることが伝わってくる。

片手をへりにかけ自分を支えると、公爵はもう片方の手をレインスに伸ばす。

しつかりと握りしめていた膝の上の手の片方を、優しく取られたかと思つと、深く上半身を屈めながらして挨拶の唇が寄せられる。男性から女性への、普通の挨拶だと分かっていても、こんな場での変則的な行為に、平然としているのは難しかつた。

「タータイト公爵のおじ様」

一方、ウイニーは皿を輝かせて自分の番を待つていた。

「やあ、可愛い私の赤毛姫…会いたかったよ。我らの行儀の悪い赤毛を、よくぞ受け継いでくれた。それに、素晴らしい色のドレスだ…よく似合つているよ」

祖母の古いドレスをほめられて、妹はとても喜んでいた。

ウイニーへの挨拶は、おでこに。

正式な挨拶と云ふのは、まるで親戚の子供もあるよつたものに見えた。

「可愛い一人のはどこの殿。王都に入つてすぐ、二人に出会えるなんて…何と云う神の思ひ召しだらうね。こんな幸運は、なかなかないものだよ」

ステップに片足をかけたまま、フランの公爵は本当に嬉しそうに微笑む。

レイシエスが、何故か眩しさで目を細めてしまいそうになるほど。しかし、ロアアルの姉妹とフランの公爵は、初めて顔を会わせる」となった。

そうして、内に、一ホールの公爵を送つた先導の馬の隊列が戻つてきたという。

公爵家の馬車が2台も待つて、云う前代未聞のこのトラブルは、次のように解決された。

2台の公爵の馬車は、ひとつずつ先導と共に王宮に入るにしたのである。

贈り物

ロアールの公爵家に、王宮の部屋は4つあてがわれた。

ひとつが、公爵代理であるレイシェスの部屋。

この部屋が一番広く、応接室と寝室が別々の部屋になつてゐる。

ひとつは、召使いたちの部屋。

あのふたつは、一緒に来た家族のための部屋だ。

謁見会は、公爵たちの義務であつたが、家族を伴つことを許されていた。

家族にとつては、都への観光のような面もあり、連れて行つて欲しいと願う者も多いといつ。

ロアールの姉妹には、多すぎる部屋数である。

父の時代は、家族は誰もとなわなかつた。

母は、極度の馬車酔いの体质で、結婚のためにロアから来たのを最後に、一度と馬車に乗らないと誓いを立てているようだ。

当然、レイシェスは後継ぎの勉強に釘付けにされていたし、ウイニーは母に反対されていた。

今回、妹がこの旅に滑り込めたのは、半ば奇跡のようなものだつ

た。

わざわざ病床の父へ、お願いに行つたところだ。

「元々、熱意のあるウェーニーではあるが、今回のそれは今まで以上で。

それほど、レイシェスと王都に行きたかったのだらう。

レイシェスは、妹にとつて良い姉ではないはずだ。

妹を母から守つてやるのも出来ないし、しつこいつ時に助けることも出来ないのだから。

それでも、ウイニーは彼女をとても慕つてくれる。

レイシェスは、そんな可愛い妹に、良いところへ嫁いで欲しいと願つていた。

公爵家の娘だ。

嫁ぎ先など、その気になれば引く手あまただらう。

ロアアールで不憫な人生だった分、嫁いで幸せになつて欲しかつた。

「姉さん……おじ様のところに行つてもいいかなあ

三十にも満たないフラの公爵も、妹にかかればおじ様扱い。

それに、レイシエスは苦笑しながら、妹を諫めなければならなかつた。

「後で、正式に挨拶に行くから……その時まで待つて」

まだ、召使いたちは荷馬車の道具を、部屋に運び終わつていないので。

ようやく、長旅の疲れをふかふかのソファに座つて休め始めたばかり。

王への謁見は、日程がしつかり決まつているものの、その前にやらなければならないこともある。

王太子 次期王になる者への、挨拶だ。

王太子不在の場合は、王弟などの継承1位となる。

未来の王にも、これまでと変わらず末永い忠誠を誓います、という儀式である。

レイシエスは、実践経験こそ少ないが、とにかく頭の中には多くの知識が詰め込まれていた。

そのため、数々の儀式の中に王の権威への執着が、透けて見える時がある。

しかし、この平和協定で結ばれた拳の国は、ロアアルにとつては助かるものなのは間違ひなかつた。

もはや、背後の心配をせずに、大陸からの圧力に防御を徹することができるのである。

更に、他家と比較してより危険な地域であることから、都より財政援助が来る。

どこよりも、兵力を抱えていなければならぬためだ。

人的援助は、どの時代も拒み続けていた。

もしもの時の増援ならば受けるが、他の地域の人間を入れる事は、領地にとつて良いことではないと、代々判断してきたのである。

過去に一度、王の圧力で一年だけ常駐させたことがあつたらしく、都の人間がロアアールの寒さに耐えられるはずがなく、王に泣きついて帰つていったということだ。

レイシエスが公爵になつたとしても、直接軍の先頭に立つことはないだろう。

軍の将軍たちの決めたことを、承認するくらいか。

領民としては、力強い男の公爵に先頭をに率いて欲しかつたことだろうが。

こればかりは、どうしようもない。

ソファに身を預け、様々なことを考へるともなく考へていたら、来客を告げるノックの音。

正確には、来客ではなく。

「フラの公爵様より、お届け物です」

赤毛の召使いがそつまつと、大きな箱が一つ運び込まれて来た。

まだ、じちらは下ろした荷物の整理に追われているところに、向こうはもう終わったのだろうか。

届け物そのものといつよりも、その速さに驚いた。

元々、この謁見会では、お互の公爵への贈り物も当たり前のことだ。

勿論、ロアールから各公爵への品々は準備済みだった。

ウイニーが、開けたくてたまらないように箱を見ている。

その様子が、見ていて余りに明らかなので、ついふっと吹き出してしまつほど。

「召使いを呼んで、開けてもらわなきやね」

「忙しそうだから、私が開けてあげる」

わんわんっ！

子犬が転がる玉めがけて駆けるよつて、ウイニーはテーブルの上の箱の前に陣取った。

公爵家の娘が、そんなことどうでもいいのー。

母の怒号が聞こえてきやうな気がするが、それはレイシスの被害妄想に過ぎない。

一瞬、きょろきょろと周囲を確認してしまったが。

妹は、まったくめらわず、美しい包装を解き一つの皿の箱を開ける。

「わあー！」

箱を開けたとたん、中から艶やかな色が溢れる。

青のドレスだ。

こま、レイシスが着てこようやく寒い青ではなく、深く濃い青。

まるで、想像の中の海の色のよつた色だった。

「すーー、綺麗ー！」

よく見えるように、妹は箱を斜めに立ててくれた。

間違いなく　　レイシスのための衣装だとこいつことが分かる。

箱を立てたことによつ、レイシスの赤毛とその青が並んだのだ。

その残酷なまでの色の食い違いは、誰の目にも明らか。

しかし、それは逆に言えば、赤毛の多いフランの間にとっても同じこと。

彼らは、こんなに美しい青を、似合わないところの理由であざらめなければならなかつたのか。

さつと、レイショスにその色を着て欲しくて、フランの公爵は送つたのだね？

もうひとつのおみやげは、

「あれ？」

それも、やつぱりドレスだった。

暖かい緑と白の織り込まれたそのドレスは、今度は別の意味でウイニーに贈られたものだろうとうことが、一目で分かつた。

だから、妹も変な声をあげたのだ。

フランの公爵の考えが伝わって来て、レイショスはふふふと笑つてしまつ。

「ウイニーは、ドレスを見たまま驚きで動けないでいる。

「私、都へ行くつて書いてなかつたのに」

どうして、自分の分の贈り物があるのか、理解できていないのだ。

「そんなのは、決まつているじゃない

可愛い妹の様子に、笑みを浮かべたまま、レイショスは答えを教えてあげることにした。

「あなたが来てなくとも、最初からそのドレスを贈りうと思つていたからよ」

一人で手紙を送つっていたのだ。

ウイニーが来て、いよいよがいまいが、あの公爵が妹を無視するなんて思えなかつた。

「あ……あは……嬉しいな」

跳ねまわつて喜ぶかと思つたら、妹は少し困惑したかのような笑いを浮かべる。

「やつぱり……フランの公爵様つていい人だね」

感慨深げに、呴かれる言葉。

妹のドレスを見る瞳は、まるで亡くなつた祖母を懐かしむもののように見えた。

次女の秘密の野望

(W)

ウイニーは、ラットオージョン家のオマケである。

彼女自身、自分のことをそう思っていた。

姉のレイシスさえいれば、あの家は成り立つ。

その代わり、ウイニーは自由気ままに生きることが出来た。

祖母が亡くなつて、本当にオマケの自分を痛感してはいたが、彼女にはフランと手紙のやりとりがあつた。

遠い地の人だが、それでもフランの公爵のことは、母よりも近い人だと思っていたのだ。

それに、姉が参加してきた時は、本当は少し落ち込んだ。

フランとの手紙は、赤毛の自分の唯一の特権だと思つていたから。

文通相手を、取られる気がした。

けれど、姉はある母の愛を、良くも悪くも一身に受けている人で。いつか重圧に壊れてしまうのではないかと、子どもの時からとも心配していた。

そんなレイシスに、「なんくだらないこと」で文句を言つじとも

出来ず、届けられた2通の手紙の内の1通で我慢する」と、ウイニーは少しずつ覚えていったのだ。

そんな時、姉が王都へ行くこととなつた。

父の代理だ。

フランの公爵にも会えるだらうし、王都にも行つてみたかったウイニーは、いつも何倍も母と戦つた。

しかし、やはつ母が折れるとはあつたず、つこに彼女は病床の父に泣きついたのだ。

わつといれが、最後の王都になるでしょ、ビックなお願いします

と。

すつかり病でやつれた父は、じぱりへじと彼女の顔を見たかと思つと、「分かつた」と言つてくれたのだ。

王都へ行ける、そしてフランの公爵に会えるー

ウイニーは、心震わせた。

嬉しその余り、部屋のベッドで枕に顔を埋めて泣いてしまつたらいいだ。

生まれて初めての、嬉しく泣きたつた。

泣くほど喜ぶ理由は、やることある。

彼女には、この王都で成すべきことがあったからだ。

自分の、今後の人生のために。

ウイニーは、オマケとは言え公爵の娘だ。

15歳だが、公爵になる姉とは違い、そう遠くなく結婚してもおかしくないだろう。

姉の結婚は、とにかく乗り越えるべき壁が高い。

公爵の夫になるとこゝにロアアルの政治に関わる可能性があるからだ。

保守的で防御に徹した冬の国を守るために、両親はおそらく多くの候補の中から、相手を厳選中だろう。

そんな時、召使いが奇妙な噂をウイニーの耳に入れた。

この召使には、元々祖母に仕えていた者で、フランから一緒に来た召使いの孫に当たる。

残念ながら、赤毛には生まれなかつたが、祖母にウイニーを守るよう頼まられたらしく、普通の召使い以上に頼んでくれた。

その召使いが仕入れてきた噂は　ウイニーはアル（西）の公爵家に嫁がせようか、といつものだった。

母の召使いから、流れてきたものだつ。

アール！

よつこもよつてアールなのだ、あのアール！

ロアアールと領地を接し、農業に恵まれた肥沃な土地を持つ地。

そして、何度も食料のこと、父を悩ませたといふだ。

そういう意味で、ウイニーはアールが一番嫌いだった。

これまで、ロアアールからアールに嫁いだ者はいない。

逆もまた然り。

たとえ食料の件があつたとしても、誇り高いロアアールは、アールには媚びない。

そんな、これまでの先祖が示してきた規範が、こんなところで崩されようとしているのだ。

いや、ウイニーにとつて、規範など本當はどうでもいい。

しかし、これまでの公爵同士の関係を考えると、嫁いだとこゝで冷遇されるのは目に見えている。

そして、彼女の輿入れが、食料の安定供給にはおそれくつかがらないだらう。

それを分かつていながらアールの話出すということは、母はただ単に、ウイニーを視界から消してしまいたいのだ。

ロア・アールでは、頻繁に顔を合わせることになるかも知れないし、自分の故郷であるロア（北）に嫁にやるのはもっての他。

ならば、アール（西）。

母には、政治的才能はない。

そのため、そんな単純な消去法で出した考えだったのだろう。

しかし、冗談抜きでやりかねない人だとも思っていた。

だからこそ、ウイニーは何が何でも王都へ行こうと考えたのだ。

父に、「これが最後かも」と言つたのも、2年後は嫁いでいるかもしれないという意味を匂わせたのである。

だが、それはアールにではない。

その相手を自力で探すため、彼女はここにいるのだ。

ウイニーは、母の思い通りにだけはなるものかと、心に決めている。

自分の人生は、自分で見つけて切り開くのだ。

女の人生が、嫁ぎ先で決まるというのなら、それを自分で探し出す最後のチャンスがここなのである。

姉のレイシェスほどの美貌もなく、素晴らしいプロポーションも才能もない。

しかし、とにかく前向きな行動力だけはあった。

どれほど姉が美しくても、未来の公爵になる人を、勝手に手折ることは許されない。

姉に求婚出来ない人の中で、公爵の娘ならもらいたいと思う人は、きっといるはず。

多少見劣りはするが、ウイニーは丈夫だし、きっとたくさん子どもも産めるだね。

何色の髪の子が産まれても、可愛がるんだー。

それは、彼女が子どもの頃から想像していたこと。

そして、これが　ウイニーが王都へ来た理由と決意だった。

姉には、絶対内緒だ。

アールに嫁がせられるかもしれないと聞いても、苦しめるだけ。

だつて、姉さんは母さんには逆らえないもの。

その残酷な現実は、子どもの頃から知っている。

どんなにつらしても、姉に泣きつかないのは、どうにも出来ない

のが分かっているから。

母からの重圧に耐えているレイシェスに、これ以上負担はかけられない。

だから、ウイニーは泣きつく相手を、外に求めたのだ。

自分を愛して、大事にしてくれる人。

そんな人が、誰か一人でもいてくれたら　それが、彼女の乙女らしい夢だった。

王太子

ようやく部屋の仕度が整つた頃、レイシエスの元に王太子からの呼び出しが来る。

「いらっしゃりだつたかしら。

教えられたこととの、ずれを覚える。

確か、身の周りが落ち着いたら、レイシエスの方から働きかけ、その後王太子への挨拶の時間が伝えられる 実際に動き始めるのは、それからと聞いていたのだ。

しかし、遣いの者は『王太子殿下がお待ちです』と言つたのである。

これではまるで、既にロアアールのために時間を取つてくれているかのようではないか。

王太子を、待たせる訳にはいかない。

急いでレイシエスは装飾品を身につけ、公爵令嬢らしい身なりを整える。

普段、故郷でこんな宝石をつけて歩き回るとはなかつた。

男の公爵であれば、必要のないもの。

しかし、まだ何の実績もないレイシエスを、少しでもよく見せよ

「うど、母が持たせてくれたのだ。

「姉さん、すつゞく綺麗！」

ウイニーは、皿を大きく瞬きながら、嬉しそうに笑う。

「留守番、お願ひね」

その笑みに勇氣の後押しをされ、レイシオスは部屋を出た。

初めての人に会つ時は、いつもビキビキする。

フラの公爵とは、また別の意味のビキビキ。

「これからは、わずかの甘えも許されない世界なのだと、自分に言い聞かせる。

みなが、フランのように優しいわけではないのだ。

美しい花が、溢れるほど惜しみなく飾られる廊下と、踵を取られるのではないかと思えるほどやわらかい絨毯を、高いヒールで慎重に踏みしめながら、王宮の左奥へと向かっている あらっ・

また、知識と現実がずれた気がした。

王太子との面会は、もつひとつつの謁見の間だと聞いていたのである。

王宮には、謁見の間がふたつあり、ひとつは王のためのもの。

わづひとつは、王太子のためのものだ。

勿論、規模は明らかに違うが、王太子の内から、公爵をひざまづかせることに慣れさせるための練習場のようなどうなのだねつ。

ともかく、それらの謁見の間は、王宮のひたすら中央の奥のはずだ。

相当の奥まで来て、ようやく先導は扉の前で歩みを止める。

立派な扉ではあるが、場所的におそらく王太子の謁見室ではないはず。

「ロアールの公爵代理様を、お連れ致しました」

「…お通しなやこ」

返事をした男の声は、事務的なもの。

おそらく、王太子本人ではないだろう。

いくつかのズレは気になりはするが、いよいよ挨拶の時間だ。

レイシエスは、背筋を緊張させながらも胸を張った。

いまは公爵令嬢として、そして未来は公爵として付き合つていいく相手。

ひとつと開かれる扉を、彼女はまばたきもせず見つめた。

「レイシェス・ロア・アール・ラットオージェン……御前に参りました」

視界に映つてゐるものに、一切心を乱されないよつに己を律しながら、ドレスを大きくふくらませ、中で片膝をつくほど折り曲げる。

しかし、彼女を見ている男に、心を乱さないでいることは出来なかつた。

部屋の奥の大きな椅子に腰をかけ、足を組み、ひじ掛けに肘をついてこちらを見ている男がいたのだ。

レイシェスより少し年上のはずの彼は、柔らかそうな艶のある黒髪と、縁がかった灰色の瞳を持っている。

しかし、髪質とは裏腹にその瞳に柔らかさはない。

傲慢さと自信たっぷりの気は、離れていても十分にレイシェスマで届いていた。

金糸銀糸をふんだんに使われた豪奢な上着の襟もとから胸元にかけて、女性でもため息の出そうな、こまやかなレースが溢れて出ている。

それほどの贅をつくした衣装を、着るべくして着る男。

その自分勝手な乱暴な気配は、レイシェスを戸惑わせた。

「Jijiは謁見室ではなく、この男の態度を見る限り、公的な場には感じなかつたのだ。

まるで、私的に部屋に呼ばれたかのようだ。

「なるほど… 噩以上だな」

彼女の礼儀作法の教師が見ているならば、素晴らしいとほめてくれただろう挨拶など、男 王太子は興味もないよつこ、レイシスを見ている。

頭のてっぺんからつまさきまで、何度も。

噂。

フランの公爵もそんなことを言っていた。

ロアールに閉じこもっていたレイシスの知らないことひりで、噂とやらば流れていたのだ。

「側に寄ることを許す」

厳しげほどの強い声は、レイシスを脅かすようなものだった。

身体がびくと震えそくなるのを、何とか止める。

側に？

習っていた」ととは、違う。

ところで、王太子は公爵の遠方よりの上京について、労をねじりつつ葉をかけるはずだった。

中に入れとこつ」とだらうか。

「おそれります」

レイシエスは、三歩で部屋に入った。

「…………」

「…………」

そのまま止まつてみたが、ただ後ろの扉が閉ざされるだけで、王太子からは何の声も発せられない。

それどころか、明らかに機嫌を損ねた顔で、こちらを見てくるではないか。

多くの使用人も側近もいるが、彼らは一切に反応せず、ただこの部屋の隅の空間を埋めているだけ。

重苦しく息苦しい気配と想定外すぎる状況に、レイシエスが次の行動を模索している。

「耳が悪いのか？ 僕は『側』と言ったはずだ」

その不機嫌な声が、鉄鉱石のような重さを持つて投げつけられる。

一般的の女性であれば、泣き出してしまつような威圧感と言葉の暴力。

これが……挨拶？

もはや、ズレなどとこゝ境界は飛び越えていた。

王太子の表情を見ながら、ゆくべつと足を踏み出す。

彼の言ひ『側』とやらが、一体どこまでなのか　　その田を見て
いなければ距離が分からぬ氣がしたのだ。

一歩一歩、探るように近づく。

瞳も唇も、意思を強く表してはいるがピクリとも動く気配はない。

椅子の三歩手前まで来た時、たすがのレイシエスも足を止めた。

手を伸ばしても、触れられない距離でいたかったのだ。

「そこまでか

として機嫌の直つていらない声で、突き刺される。

自分の顔の中心に、大穴でも開けられるのではないかと思えるほ
どの気配に、しかし彼女は必死に耐えた。

「そこまで……お許し下せませ」

「これは　普通の謁見とは違つものだ。」

その感触は、もう十分すぎるほどわかつてゐる。

噂、なるもののせうだらう。

ロアールの公爵代理に、興味があつたわけではないのだ。

ただ、美しい女を噂通りか確かめたかつただけ。

そう思ひと、レイシェスは泣きたい気持ちになつた。

自分の美しさというものを、いまほど情けなく思ったことはない。

彼の目に映つてゐるのは、ただの女。

どんなに勉強をしようとも、良い公爵になるべく努力をしようと
も、そんなことは男たちには何の興味もないのだ。

「その距離で…挨拶が出来るのか？」

王太子は、無造作に自分の手をレイシェスに向かつて投げ出す。
普通であれば、男が女にするような挨拶を、しろと言つているの
だ。

過去、女公爵が存在しなかつたわけではない。

5公爵の地位は、この国ではとても大きかつたため、傍系に成り
代わられるのを嫌がつた本家が、直系の娘を公爵に据えることがあ
つたのだ。

そんな彼女らの物語を、レイシェスもいくつか読んでいた。

だが、その中にこんな話は書いてない。

彼らも おそらく、男には分からぬつらさを数多く味わつたことだろ？

しかし、レイシスは今、ロアアールの公爵の名代だ。

家のため。

彼女はもう一歩足を踏み出し、膝を深く折った。

「失礼いたします」

投げ出されている大きな手を、そつと下から触れる。

自分のすべての動きを、王太子は見ている。

完璧に。

レイシスは、男が女にするように完璧に、親愛の挨拶を終えたのだった。

そつと、手を離す。

視線を上げると。

「さすがは、ロアアールの血筋だな

満足そうな、王太子の目があつた。

だが、それは決して優しい瞳ではない。

「すぐに溶けるような、ひ弱な氷ではないといつていいのか」

手を取り返される。

身を引き上げられるかと思ひほどの強さで、手を引かれた。

あつと思つた時には。

「その氷の瞳に敬意を払つて、俺も挨拶をくれてやる。」「

指先に。

口付けられていた。

もう一人の赤毛の男

ウイニーは、部屋から顔を出してキヨロキヨロしていた。

姉が出て行って、もうどれほどたつだらう。

たつた一人で部屋にいるには、とても退屈すがいい。

うつかり、フランの公爵でも通らないものかと、様子を見ていたのだ。

そうしたら。

一人の召使いを従えて、赤毛の男が廊下の向こうから歩いてくるではないか。

赤毛！

一瞬、公爵かと思ったが違った。

彼よりももっと髪を短くした、そしてもっと若い男だったのだ。

耳が出るほどサイドの髪も短いため、赤い石の耳飾りが鮮やかに見える。

柔らかさよりも硬さを感じる体つきと、田舎者。

若々しい身体を、鈍い茶金の礼服がぴたりと包んでいる。

大人しい血には、とても見えない。

赤毛であるという事実に意識を取られ、ウイニーは思わず彼を見つめ入ってしまった。

その髪の色を持っているといつことば、フランの関係者かと思つたせいだ。

そんな風に、長く眺めていたものだから、向こうにも気づかれてしまつた。

じきつ。

「」の時のウイニーは、相手に向かつて胸を高鳴らせたのではない。

赤毛の男が、自分を赤毛だと理解し、そして赤毛であることについての反応があるのではないか。

そう思つていたのだ。

しかし、とてもとても深い怪訝の眼を向けられた。

「……」

その怪訝な視線を、わずかもそらさないままこちらに近づいてくるため、ウイニーも引っ込むタイミングを見失してしまつていた。

いや、逆だ。

「」の赤毛の男との出会いを、自分の野望のきっかけにしたかった

のだ。

そのために、来たのではないか、と。

部屋の奥の前まで、お互に見つめあうよつた形を続け、そしてついに男の足が止まつた。

「じくり、と喉がなる。

男の一言には。

「ロアアールでは……そんな無作法しか教えていないのか？」

思い切り、呆れた声だつたのだ。

瞬間、ウイニーは自分の髪よりも赤く、頬が燃え上がるのを感じた。

この男は、自分がロアアールの娘であることなど、既に承知だつたのだ。

その上で、なぜこんな無作法な真似をしているのか　それが何よりも怪訝のだつたに違いない。

あ、あ、あ、だって、赤毛。

ウイニーは、色とこなの同胞を見つけて舞い上がりてしまつていた。

フランの公爵のようだ、この赤毛を喜んでくれるのではと、心の底

で思っていたのだ。

どうして、そんな浅はかなことを考えたのか。

彼らのとつて赤毛など、ただの見慣れた色に過ぎないといったのに。

「ウイニー・ロアアル・ラットオージェンです！　し、失礼いたしました」

恥ずかしさに死にたくなりながらも、ロアアルの恥と思われたくなく、彼女は必死に自分の失敗を覆い隠そうとした。

「スタファ・フラ・タータイトだ。さつきは、兄上が無作法なことをしたようだが……あれを真似る必要はないぞ」

ウイニーが姉についてきたように、フラも公爵の弟が同伴していたのか。

彼は公爵のように、人の馬車に飛び込んでくる男ではないのだろう。

無作法、無作法と連発され、硬いはずの彼女の心臓は、カナヅチでカンカンたたかれている気分だ。

「公爵のおじ様は、無作法なんかじゃありません！」

しかし、自分を馬鹿にされるのはまだいいが、かの人のこと悪く言われるのは嫌だつた。

今日、初めて出会つたばかりだが、それまで手紙で何度も何度も

話をしたのだ。

優しく心をこめて、遠いロアアールの赤毛の娘のことを、思つてくれた大事な人である。

どれほど、彼の手紙に慰められただろうか。

それを、この人に分かるはずなどなかつた。

「おじ……様」

一瞬、ぽかんとした後　　スタッフはふと吹き出した。

「あつはつは……あの兄上も、そうか、若い娘の目から見たらおじ様か」

おかしくてたまらなそつだ。

その笑いつぶりに驚いて、逆にウイニーの方がぽかんと彼を見つめてしまった。

しばし笑つた後、視線に気づいたのか、スタッフはよつやく表情を元に戻して咳払いをした。

「悪かった……だが、フランの前以外でこんな真似をすると、お前の姉上が困ることになるぞ」

一瞬。

視線が、開いたままのドアの奥の方へと動いた。

何だらう。

漠然とした『姉上』という表現には、感じなかつた。姉のことを知つていて、そつ言つてゐるよつた。

「姉さんを！」存知なんですか？」

どいかで、会つただらうか。

不思議に問い合わせると、スタッフはふーっと息を吐いた。
その息に乗つて、南国匂いが畳をわたりだ。

「『存知も何も……お前も知つてゐるよ』

やれやれといつ音で、言葉が綴られれる。

何も知らないウイーーー、呆れているのだらう。

「……寒い日だつたな。雪を見たのは、あの時限りだ」
思い出をたどる、声の調べ。

いまは見えない雪を見るよつて、一度視線が上へと上がる。

あー。

ウイーーの微かな記憶が、その音で刺激された。

あれは たいして寒くない日のこと。

スタッフの言葉と食い違うそれが、彼女の中で引きずり出された。

その年の、初雪が降った日。

あれは。

「お祖母さまの……葬儀に……」

フラン人間が雪を見る機会など、滅多にないだろう。

そんな彼が、見たというのならば、それはきっとロアアールで。

あの時、フランの公爵は来られなかつた。

代理で來たのが。

「そう……お前は、ただただ泣き続けてたな」

四年ほど前の記憶。

彼にひとつは、ロアアールの何もかもが、珍しいことだったから。

しかし、ウイナーひとつは、この世の終わりかと思つた口だつたのだ。

周囲のことなど、気にする余裕なんかなかつた。

まだ、11歳だったのだ。

「姉上は……元氣であられるか？」

そんなウイニーの過去への旅路など、知らぬ顔でスタッフはそう聞いてきた。

「はい、さつき王太子殿下のところへ挨拶に行きました」

何気なく、答えたつもりだった。

それは、ただの雑談なのだと。

「そうか、先触れを兼ねて挨拶に来たのだが……それは、残念だつたな」

だが、スタッフは本当に、残念な表情を浮かべるではないか。

瞬間。

雷に打たれるほどの衝撃が、ウイニーの中を走り抜けた。

彼の表情に、社交辞令はない。

本当に、姉に会えずに残念そつだつたのだ。

あは、そつか。

スタッフの目的は レイシェス。

彼は、姉に会つために、わざわざいろいろやつて来たのだ。

四年前。

あの葬儀の日。

泣きじゅぐるウイニーなど飛び越えて、彼は姉を見ていたのだろう。

白い肌をなおなり白く見せる黒いドレスに身を包んだレイシエスは、いつも通りあの日も美しかったではないか。

悲しみでいっぱいだったウイニーでさえ、覚えていたほど美しい、ひとつ年上の姉。

彼女は、心の中で「×」をつけた。

スタッフの名前に、である。

彼にとつて自分なり、レイシエスのおまけの無作法な泣きじゅくつてる赤毛の娘。

それに、公爵の弟であるならば、彼には姉を手に入れる可能性があつた。

ロアールに婿に入ることが出来るし、身分的にも申し分ないからだ。

「どうした？」

怪訝な問いに、「いいえ、失礼いたしました」とだけ答えて、ウイニーは自室へと戻り扉を閉めた。

いきなり暗礁に乗り上げた計画だが、殿方は彼だけではないのだ。

部屋の、姿見の前に立つ。

自分の顔をじっと見る。

「そんなに……悪くはない、わよね」

心が折れてしまわないように、そう自分に言い聞かせる。

姉が、特別なだけなのだ。

そうよ、姉さんが特別なだけ。

自己暗示をかける。

『ウイニーといふと、まるでフランシスのようだ元気になれるわ』

祖母の言葉を、心の糧に思い出す。

「よしー。」

「なんどいろでめげていたら、最後にはアールへの嫁入りだ。

それだけは、彼女は防がなければならなかつた。

だから、もう一度奮い立つ。

やっぱり、おじ様に相談しよう!

他の見知らぬ人に当たるより先に、フランの公爵ならば良い助言か、良い人を紹介してくれる気がしたのだ。

そう考えて、ようやく少し心が軽くなるワードだった。

姉の戦い

「公爵になつてしまつとは……残念なことだな」

王太子の指から、よつやく自分の手を離すことに成功したレイシエスであったが、一度近づいた身を、勝手に下げることも出来ず、彼の前にかしづき続けているしか出来ない。

「5公爵の娘なら、側室に上がつてもおかしくないだね！」

からかつてゐるのではなくことしたが、彼女の姿をひどく気に入つたといふことだらう。

側室。

王や王太子は、最初から正妃と決めて女性を娶らない。

公爵の子女や王の親族である貴族が嫁ぐことが多い、互いに不平等にならないためである。

誰が嫁いでも、嫡子と認められる子を産み、その子が王となつて初めて正妃として認められるのだ。

だが、ロアアルは、5公爵の中でただひとつ、王に娘を送つたことのない地域。

氣骨あふれる守りの地は、媚を売る」となど良しとしない。

だから、たとえレイシエスが跡継ぎでなかつたとしても、この男

の希望など叶つことなどないのだ。

いや、正直に言えば危なかつただろつ。

王太子が、本気で望めばロアアールに圧力をかけることなど、造作もないはず。

しかし、常識的に考えて、公爵となるべき女を王宮に引きちりていくわけにもいかない。

「」の肩書きが、初めてレイシヨスを守つた瞬間だった。

なのに、王太子はその傲慢な灰緑の瞳を、残酷な色に細めるではないか。

「やつにえは、確か……お前には、妹がいたな？」

ぞくつとした。

一つの意味で、だ。

ひとつは。

「妹は、お前によく似ているのか？」

王太子が、妹に興味を示す」と。

「いいえ、まったく似ておりません……指先ひとつ、爪の先ひとつ、まったく似ておつません」

ウイニーを、この男の慰みものにするわけにはいかない。

あの明るい妹が、この王太子とわずかも含みはずなどないのだ。

まろまろに傷つけられるのが、関の山だらけ。

ウイニーは、もう十分傷ついたではないか。

妹には、幸せな結婚を レイシエスの願いの中に、王太子はとても入れられなかつた。

「似ていなくても、美しいのか？」

「妹の噂は……聞かれておいでではないでしょ」

ウイニーがこの場にいたら、間違いなく傷ついただらけ。

レイシエスは、これほどのことを言われるのだから。

しかし、もし妹が絶世の美女であつたとしても、同じことを言つただろう。

それが、彼女を守るためと信じて。

だが、話はそこで終わりではなかつた。

「では……」

前よりも更に、ぞつとする。

レイシスの考える、もうひとつの恋愛じことを、この男が考
えているのではないかと思ったのだ。

「では……ロアアルは、妹が継げばいい」

息が、止まるかと思つた。

彼女が一番恐れている言葉を、どうしてこの男は、こともなげに
言い放てるといづのか。

レイシスには、公爵になる以外の道はない。

ウイニーが、それに相応しくないと言つてはいるのではなく、レイ
シスはそつなるべく、それ以外をすべて捨ててこれまで生きて來
た。

今更、別の道など歩けない。

別の道を歩く方法も、歩く靴もないのだから。

自分が、真っ青になつてはるのは、分かつていた。

その道を奪われたり否定されたりすることが、これほど意味しへ
田の前が暗くなるようなことだとは思つたこともなかつた。

「わた……」

言葉が、もつれる。

「わた……くしには……公爵以外の生きる道はござりません」

わなわなと震える唇で、それでもレイシエスは言い切つた。

「どれほどの不興を買ひかなど、」この時の彼女には考へるにじが出来ず、それでも言葉にしなければ、とても自分が保てそうになかったのだ。

レイシエスと云ふ女の輪郭がぼやけて、靈になつてしまいやすうに思えた。

キシット、すぐ側の椅子がきしむ。

王太子が、身を乗り出したのだ。そのまま、青ざめて震えるレイシエスの顔を眺め回す。

「屈辱に満んだ顔も……美しい。美しいとは、つぐづぐ得だな」

王太子なるものは、かくも残酷に女を辱めるのか。

彼もまた、別の意味で美しい顔をしてくる。

「この世の善の美しさではなく、惡の美しさ。

女の白い肌に爪を立てて、いたぶる畜生でもあるのかと疑わずにいられない酷薄な笑み。

「公爵などといつ、こんなつまらない地位より……次の王の母になる方が、女としての出世だと考へないのか？」

「こんなつまらない。」

その言葉が、痛いほどレイシスに突き刺さる。

本当に、こんなつまらないことはない。

王太子の前に跪かされ、言葉で嬲られ、それでも罵のじとも立ち去ることも、許されないのだ。

女に対してこんな人間が、男を相手にしたとしても優しいはずなどない。

父も、どれほど王太子や王に辱められただろう。

しかし、父は耐えた。

耐えた挙句に、身体を壊したのだろうか。

どんなことにも耐え、ロアアールの領民を守るために生きる公爵。必要以上に、イスト（中央）に媚びるなどなく、じりじみでの歴史を紡いできた北西の地。

媚びなことじりとは、風当たりがきつじりと。

これもまた、その中のひとつ。

キッヒ、レイシスは上にいる王太子を見上げた。

「私は、どんなにつまらなかつと、必ず公爵になります」

そう。

これが ロアアルの答え。

ギシと、王太子は椅子の背に身を預けた。

不機嫌なため息をひとつ、あらぬ方へと吐き出す。

「もういい……下がれ」

ようやく、レイシエスはその地獄の場所から、立ち去ることを許された。

ここにいる、ほんの短い時間で、どれほど彼女は苦しめられただらうか。

「失礼いたします」

心の根元まで抉り出され、弄ばれたのだ。

初めて肌で知る、男の政治の世界。

一瞬でも気を抜けば、心をへし折られるか、媚びた方がマシだと思われる。

レイシエスは、心をがちがちに凍らせ、その中にさつきの衝撃を閉じ込めよつとした。

今後、あの王太子とずっと付き合つていかなければならなかと思つと、憂鬱を通り越して、床に伏して閉じこもりたくなる。

そんな、酷い精神状態のレイシェスは。

「姉さん、おかえりなさい！」

ウイニーの明るい笑顔で、わずかながらでも救われた。

祖母がそうだったように、彼女も人を明るくする笑顔を浮かべられるのだ。

「姉さん、顔色が悪いけど大丈夫？」

慌てて駆け寄つて心配してくれる、丸い瞳。

ウイニーは、確かに美人ではない。

だが、自分の周囲の人たちの中で一番 温かい。

「大丈夫よ……ちょっと緊張しそうただけ」

その温かさに、ようやく自分が呼吸をしていることを意識して、レイシェスは大きく息を吐いたのだった。

姉は、とても疲れているように見えた。

初めての公務は、どれほど精神的な負担だったのか。

ウイニーには、それを推し量ることが出来なかつた。

姉が少し落ち着くまで、ふかふかのロア織りのソファで、温かいお茶を飲みながら話をした。

その真っ白だった頬に赤みが戻つてきた頃、ようやくレイシエスは次の行動に出る気になったようだ。

「フランの公爵様のところへ、贈り物を届けましょうか」

明るい話題に、ウイニーもほつとした。

届けると言つても、向こうがそうしたよつて、召使いが持つて行くだけだが。

それでは、とてもつまらない。

「一緒に、いつご挨拶に伺つていいか、手紙を添えない?」

だから、ウイニーはそつ提案してみた。

フランの公爵とは、手紙の方が付き合つが長いのだ。

特にウイニーは、手紙で彼とはとても氣のへんな付き合ひをしていた。

今日の馬車での出来事は、物語のよつとんでも素敵ではあつたが、それでもやはり彼は『公爵』で。

手紙と比べると、少しだけ遠くなってしまつ寂しい感じなのだ。

「素敵なドレスのお礼も書けば、喜ばれると想ひの」

特に、ウイニーはその感謝の気持ちを、より速く送りたい気持ちでいっぱいだつた。

王都に来ていなかつたとしても、ちゃんと彼女のことを数に入れてくれた、フラの公爵の思いやりは、本当に嬉しかつたのだから。

「もうね……もう今日は、大きな用事はないし……手紙でも書きましょうか」

姉も、気晴らしになると考えたのか、ウイニーの案にゆるやかに乗ってくれる。

そして、贈り物に添えた二人の手紙は、フラの部屋へと送られて行つたのだった。

一人の手紙は、次の手紙を呼んだ。

公爵からの短いそれは、二人のドレスのお礼に対し、喜んでもらえたことを光栄に思うというお返しの言葉と 30分後に、こちらからロアアルの部屋へ伺いたいといつものだった。

女性に訪問させるのではなく、自分から出向くといつりが、フランの公爵らしいといろか。

あの馬車の出来事だけ取つても、十分に彼が行動派であることが分かる。

「まあ、大変」

姉は、慌てて召使いに来客をもてなす準備をするよう、手配を始めた。

「フランの公爵さまお一人よね……」

「違うわ、二人よ」

レイシェスの独り言のような疑問に、ついウイニーは答えていた。

スタッフの顔が、頭をよぎったからである。

姉に興味を持つている彼が、せつかくの訪問についてこないはずがない。

次の時、わずかながらに沈黙がよぎった。

姉の顔が、ゆっくりとこちらの方を向く。

「……何で、知つてゐるの？」

とがめていはるわけではない、本当に純粹な疑問の声を聞いた時、
ウイニーはハツとした。

彼女が、非常に不作法なことをしてはいた時に出会つたのが、スタ
ファだつたのだ。

彼との出会いを話すには、その事にまで遡らなければならぬ。

「ええと……その」

結局、ウイニーは『ほんのちょっと』部屋を出た時に、たまたま
偶然、フラの公爵の弟に出会つたと説明したのだ。

「お、同じ赤毛だから……ね？」「ほり」

フラの人間を判断する、一番の材料なのだと主張すべく、彼女は
自分の明るい髪を指した。

多少の怪訝は残つてはいるようだが、姉はとりあえず納得してくれ
たようだ。

「でも、一人で勝手に出てはダメよ……皆がフランの方みたいに優し
い人ではないのだから」

姉の諭す言葉は、妙に力が入つていた。

まるで、王宮に危険があるかのようだ。

いや、あるのだろう。

もしも、フーラではなくアール（西）の公爵関係者に不作法を見られたならば、ウイニーの失敗は姉の失敗　ひいては、ロアアールの失敗にされるかもしれないのだ。

「はい、「ごめんなさい」

小さくななりながら、姉の言つことを素直に聞いていた。

そういうところで、30分などあつとこいつ間にたつてしまつ。もうそんな時間と驚く間もなく、静かなノックが部屋に響き渡つたのである。

フーラの公爵たちが、やつて來たのだ。

慌てて出迎えに立つ姉の斜め後ろに、ウイニーも立つた。

恭しく口使いによつて開けられる扉の向こうから、明るい髪が一
つ現れる。

公爵とスタファだ。

「やあ、私の可愛いはと」「殿たち……熱烈な手紙に誘われて、早速伺わせていただいたよ」

出合えたことと、ドレスへの喜びは沢山書いたつもりだが、彼に
ひとつそれは、熱烈なものに感じたのだろうか。

姉に会わせて挨拶をするウイニーは、ちょっと恥ずかしくなつてしまつた。

そんな二人の元へと近づいて来て、公爵はそれぞれに手の甲への挨拶をしてくれた。

馬車ではおでこだつたウイニーは、嬉しくなつてしまつ。

ちゃんと大人の女性のように、扱つてもらえた気がしたからだ。

「弟のスタッフだ」

場所を譲つて、公爵は彼を紹介する。

「スタッフ・フラ・タータイトです……お由にかかるのは一度由ですね」

兄のよつにレイシエスの手を取り口づける様は、さつき廊下で笑つていた男とは別人のよう。

気合い、入つてるなあ。

ウイニーは、そつちの方に笑つてしまいそうになつた。

「一度由? もしかして……祖母の葬儀にいらしてくださつたのですか?」

ウイニーは、すっかりそのことを話すのを忘れていたといつのこと、元のウイニーは、聰明な姉はすぐにそれがいつであるか理解したようだ。

「ええ……あの時は、ゆつくり話も出来ずに失礼致しました」

「いえ、私もまだ12でしたから……」「うひうひ、」挨拶もきちんと出来ず申し訳ありませんでした」

熱くまつすぐなスタッフの瞳に、姉は恥ずかしそうにまつ毛を伏せる。

絵のようになり美しい紳士と淑女の会話とは、このよついつなものを書いつのだろうか。

本当は、馬車の中で姉と公爵を見た時も、同じよついつなことを思つた。

大事に扱われるのが何て似合つんだろうと、ウイニーはじつと姉を見つめてしまった。

そんなスタッフの視線が、こっちを向いた。

びくつとする。

「わっきぶつだな」

明らかなるウイニー用の顔で、彼は近づいてきた。

「そ、そうですね……先ほどは失礼致しました」

ひきつりそうになる唇を何とか我がものとこし、彼女は聞いえのよご言葉を綴つてみた。

「不作法もほどほどにな」

ヒジメの一言と共に、手を取られて挨拶をされる。

今日の鬼門の言葉を、フランの公爵の前ですぱっと言われたこと、深い衝撃に包まれたウイニーは、彼の挨拶など記憶にも残らず風化していく。

ひどい。

心中でメソメソと泣きながら、彼女はスタッフとの出会いを激しく後悔した。

もし、あの出会いがなければ、きっともつと淑女のように扱ってくれたに違いない。

彼の中では、ウイニーは敬意を表するに値しない人間という値札をつけられてしまったのか。

いいんだ、もうこの人は最初から×だから。

一人のフランの男が、ソファに案内されるのを見ながら、彼女は再び心を強くする。

雑草のような心だと、自分でも思つ。

へこまないわけではないのだ。

ただ、へこんでいたとしても、何にもいいことはないと悟つた結

果、こんな性格になつたのである。

×の人を、気にかけていてもしょうがない。

問題は、いつフランの公爵にお願いするか、だ。

姉のいる前では、とても話しづらいこと。

ウイニーは、そのタイミングをこれから探していかなければならなかつた。

フランの男たちの話は、とても面白かった。

社交的な性格と、女性への献身の気持ちがあるためか、女性を楽しませる話題を数多く持っているのだ。

おかげでレイシエスは、何度も強い笑いを我慢しなければならなかつた。

「雪を持って帰つて来いと、スタッフに言つたんだがな……手ぶらで帰つて来るなんて、あの時は失望したぞ」

「兄上は、雪が溶けることも存知ではなかつたようですから、それを教えて差し上げたのですよ」

弟のスタッフも、兄のようこよへ言葉の回る男だった。

ただし、公爵よりも毒氣のある言葉が得意なようだが。

「フランは、雪は降らないそいつですが……水遊びは、出来るのでしょう?」

季節が逆の地域だけに、お互いないものねだりの憧れのような話が交わされる。

これらのことは、手紙でも何度か話に出したことがあるが、こうして言葉でやつとりをすると、また違った趣があった。

「やつやつ、子どもの頃はよくずぶ濡れになつて叱られたものだ」

「よく、ずぶ濡れにされた記憶が、私にはたくさんありますよ、兄上」

仲の良い兄弟だが、少し年は離れているようだ。

スタッフが小さい頃は、きっと兄にいじつまわされたに違いない。

聞けば、公爵は27歳、スタッフは19歳だという。

二人の間には、更に一人の女性。

「母違いを入れれば、10人は越えます」

付け足されたスタッフの言葉に、レイシエスは反応に困つてしまつた。

近年のロアアールでは聞かないが、王族や一部の公爵は側室を持つている。

確實に男の子孫を残すための方法ではあるが、女の身からすると反応に困る話もある。

「え？ じゃあ、フランの公爵のおじ様にも、他に女性の方がいらっしゃるんですか？」

なのに、きょとんとした顔のウイニーが、ズバッと聞いているではないか。

その、余りに素直な疑問に、スタッフが向かいのソファで口元を押さえて笑っている。

何という話をしているのか。

驚きの余り、レイシェスは言葉を挟むことも、妹を制することも忘れてしまったのだ。

「そうだよ。正妃は亡くなってしまったが、一人の女性に仕えてもらつていい」

だが、公爵は何のわだかまりも見せず答えた。

レイシェスとスタッフの雑念など、ビニ吹く風だ。

ウイニーは、そんな公爵に嬉しそうに笑みを浮かべている。

「よかつた……それじゃあタータイトの公爵のおじ様は、お寂しくはないのね」

一瞬、妹が何を言つているのか分からなかつた。

「ありがとう……ウイニーは優しいね」

だが、公爵は十分その気持ちを汲んだ瞳で、赤毛の妹を見つめ返す。

「健康的な発想をするものだな」

スタッフは、呆れたような笑つたような微妙な表情で、ウイニー

の言葉に茶々を入れる。

そこまできて、ようやく少しだけ、妹の健康的な発想なるものが
レイシエスにも伝わった気がした。

ウイニーは、公爵が正妃を失つた事を、きっと自分が祖母を失つ
た事のように思つていたに違ひない。

自分が寂しかつたように、彼も寂しい思いをしているのでは
それが杞憂であつたことが嬉しいのだ。

本当に健康的な発想は、正妃と側室の関係などすっとばし、ただ
公爵の幸せだけに重点を置いて考えた結果、出てきたのだろう。

さすがは、ウイニーといづべきか。

レイシエスには、とても追いつくことのできない思考だ。

それは、公爵を前よりもここやかにしたように思えた。

楽しい会話が、ひと段落した頃。

「よければ……」一緒に庭に出ませんか？」

スタッフは、レイシエスを外へと誘つてきた。

少し神妙に、しかし、男らしく黒い瞳を強めて自分を見ている。

「花壇で、春の花が咲き誇っていますよ。男一人で愛でるには、少々恥ずかしく思います」

花を見たいが、付き合つてもうえないかと誘つてしているのだ。

フランの男は、こんな誘い方をするものだらうか。

楽しいスタッフと花を見に行くのは嫌ではないが、ここには公爵やウイニーもいる。

一人だけで出かけるのは、おかしなことではないかと、公爵の方へ視線を向ける。

「もしよければ、弟のお相手をしてもうえるかな？ 弟より私の方がよければ、私がご一緒するよ」

「兄上……」

からかうような瞳を向けられ、スタッフは軽い睨みを返している。

この申し出は、事前に兄の許可を得ていたことが、そこで分かつた。

公爵に失礼にならないといふのならば、レイシエスに断る理由はない。

ただ、ウイニーを残して行くことになるため、今度は妹の方を見た。

大丈夫だろうか、と。

田はロボビにものを語つ ウィーーの田は、きらめりと輝いて
じゅりに向けられているではないか。

「じゅり、じゅり

満面の笑みで送りだしてくれる妹に、腑に落ちない気持ちを抱え
たまま、レイシエスは庭に向かつことにしたのだった。

「まあ……」

王宮の中庭には、柔らかな春の花が咲き乱れていた。

ロアールでは、まだ見られない景色だけに、それはとても贅沢
なものに思えた。

その花に誘われたのは、何も彼らだけではない。

王宮の女性なのか、はたまた既に到着している公爵家の身内な
かは分からぬが、女性が殿方や召使いをともなつて、花を愛でて
いる。

「綺麗でしょうか？ わきまび、少し散歩に出た時に見ていたのです

スタッフの言葉の『わせせんべい』とせ、ウイーーと田舎つた時だらうか。

「田舎へは、よくいらっしゃいますの？」

「いえ、これで三回目です」

「あら、それでも私より先輩でいらっしゃるのね」

「四年前に、来たところだらうか。」

「四年前と聞えれば、祖母が亡くなつた年。」

「その年のスタッフは、とても忙しかつたことだらう。」

冬の終わりにはイースト（中央）に、そして次の冬の始まりには、ロアマール（北西）にいたのだらう。

勿論、その冬の始まつとはあくまでもロアマールの感覚であつて、いちりではまだ秋だつたらうが。

「前回までは、まだ姉が一人來ていたのですが……嫁いでしまいましたので、駄ばかりのつまらない旅になりました」

「つまらないではないでしょ？、楽しけりですわ」

彼ら一人のやつとりは、先ほど見せてもらつた。

あんなに、面白い言葉を交わせるのだ。

つまらないなんて、とんでもなかつた。

「それは、女性がいる前だからですよ……子どもの頃から顔を突き合わせてくる男一人の会話など、女性に聞かせられたものではありますから」

とても想像できな」「ことを、スタファは苦笑しながら口にする。

「女性同士とは、違うのですね」

明るい色の花から彼に視線を移すと、やはり明るい色の短い髪が視界に飛び込んでくる。

その度に、ウイーー や祖母を思い出してしまひ。

「やつですね……女性同士の旅は、やがて楽しいのでしょうか？」

『言外』に、『やがて、つむかこのじょひ』と呟かれた気がした。

その言葉の中に、妹が潜んでいるのに気づく。

既にウイーーと話をしたスタファは、妹の性質を知ったのだろうか。

「そうですね……ウイーーところと退屈はしませんわ」

言外を綺麗にくみ取つて、レイシオスはその柄杓を彼へと返した。

「それは……羨ましい」とです

スタッフの含んだ言葉は、どちらが羨ましいといつ意味だったの
だろうか。

まさか、こんなに早く公爵と一緒にきりになれるとは、思つてもみなかつた。

ウイニーは、それを喜びながらも、だんだんじきじきしてくる自分に気がつく。

これから、自分が言おうとする」ことを、彼はどんな風に聞くだろうか。

そう考へると、胸が苦しくなつてくるのだ。

「さじもさじも……我が弟は、うまくやれるかな」

出て行つた一人を少し気にしたように、公爵は扉の方を見やつている。

「……」

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせていると、口の方がお留守になつてしまつ。

一人しかいないのだから、自分が答えなければ公爵が不思議に思うではないか。

「どうかしたのかな？」

当然、不思議に思われていた。

頬が熱くなつてきて、唇が渴いてしょうがない。

と、とうあえず。

「ちょっとじ相談があるのですが……」

改まつた口調で、そんな音を出してみる。

家中でも使つたことない、どこからか借りてきたような言葉。

自分の声が、自分のものとは思えなくなつてきた。

「大事な話のようだね」

優しい言葉に、ただこくこくと頷く。

首はまだ、ちゃんと動いてくれた。

その上下に揺れた視界で、ウイニーは部屋にまだいる幾人もの召使いを見つける。

姉についていったのは、一人だけ。

他は、まだいるのだ。

「あ、ネイラだけ残して……さがつていいわ

慌ててウイニーは、祖母から受け継いだ召使い一人を残し、他の部屋へと下げる。

彼女だけは、事情を知っているウイニーの味方だった。

すーはー。

よつやく相談が出来る空間が出来て、ウイニーは田の前に公爵がいるにも関わらず、大きく深呼吸した。

面白そつな田で見られているのは分かつてはいるが、いまの彼女はそれどきではない。

「あ、あの…… フラの公爵のおじ様……」

心臓の音がつるわなくて、自分の声がよく聞こえなくなる。

それでも、きっと公爵には聞こえているだろうから、ウイニーは振り絞った勇気をしつかり握ったまま、身を乗り出した。

「わ……わた……私を妻にもらつて下さるよつな、ご親戚の方はいらっしゃいませんか?」

ウイニー・ロアアル・ラットオージェン、15歳。

決死の覚悟で、ついにそれを言こといった。

言こいつた反動で、そのつままぐつたりとソファに背を投げ出してしまつたが。

ぐつたりと同時に、公爵の顔を見るのが怖かつたのだ。

こま、彼は一体どんな顔をしていて、そしてどんな風に思つているのか。

公爵の娘が、こんなことをよその公爵に願い出るなんて、普通なら絶対にありえないだらう。

そんなことは由も承知の上で、フロの公爵だからこそ打ち明けたのだ。

「の気持ちを 理解してくれるだらうか。

「……ロアールの公爵は、何とおっしゃっているんだい？」

返された言葉は、じへじへ常識的なものだった。

当然だらう。

ウイーーは、ソファの背もたれから何とか身体を話して、そりそりと座りなおした。

「父は向も……でも……母は……私をアールにやさしこと考へて……ようでや」

父が元気であれば、母の野望も打ち碎かれたかもしれない。

しかし、京都行きをせがんだ時の父は、去年よりももっとやつれていた。

もし、そのまま父が亡くなることがあれば、姉が公爵になれる。

そうなれば、きっとウイニーはアールに嫁にやられてしまつ。

姉は、決して母に逆らえないのだから。

「アールに……それはまた

各領地の力関係を、よく分かっているだらうフランの公爵は、深く
考えるようになつた。

「おじ様の親戚のどなたかが、一言妻に欲しいと両親に行つていた
だければ、私はフランに行けるかもしれません」

『フランに逃げられるかもしだせん』

本當は、そう言つたかった。

祖母の故郷であり、この髪の故郷でもあるフランであれば、いまよ
りももっと自分が幸せになれるのではないか。

ウイニーは、若く浅はかながらに、そう呟つたのだ。

「ロアアールの公爵の奥方は、我々を余りお好きではないようだね

遠く離れていても、それは伝わつてしまつのだらう。

ウイニーたちの代で途切れた手紙や、付き合いの端々できつと
うこうものは出でてしまうだらうし、謁見会のために都に来た父から、
何か聞いたのかもしない。

「ウイニーは……つらい思いをしただろ?」

優しく情け深い声でそう語られると、簡単に心が流れてしまいそうになる。

でも、どう答えていいか分からなかつた。

そうどうと呟つてしもうと、姉や父に迷惑がかかる気がした。

けれども、大丈夫と言つてしまつたら、一度とそんな優しい言葉を聞くことは出来ないようと思えて。

「私……この赤毛は、大好きですよ。美人ではないけど、この色のおかげでいつでも明るい気分になれますから」

結局、変な言葉を並べてしまつた。

毎朝、呑使いを苦労させる髪だが、その分、おそらく人よりも長く鏡の前に座つてきたのだ。

毎朝毎朝、鏡に映る明るい髪を見る度、自分を励ましていた。

「ウイニーは、フラの花のよう不可愛らしくよ。明るい心と、お祖母様の古いドレスを喜んで着る、慎ましい心を持つ優しい女性だ」

最大の賛辞と言つていいだろ?」

公爵にとつては、女性に言い慣れた言葉の一つだろ?が、ウイニーにとつてはこれまでの自分を、全て肯定してもらつた気がしたのだ。

手紙で書いた、祖母のドレスのことがでも、むせんと覚えていてくれた。

「ありがとうございます、心から嬉しいです」

おかげで、涙をこぼすことに済んだ。

泣いてしまったのは、余りに勿体なすぎたからだ。

今夜、ベッドの中で何度も何度も言葉を思に出して噛みしめて、幸せだと思つことだらけ。

そして。

「ウイニーの嫁ぎ先のことは、前向きに考えさせてもいいが……大事な可愛いはとこ殿の人生だからね。真剣に考えなければ、私が一生後悔するだらけ」

フランの公爵は、ウイニーにとって本当に、最高の親戚だと思い知られた。

こんなにも彼女の行く末を案じて、しかも真剣に考えてくれるというのだ。

光明が、見えた。

ロアールの長い冬のような、ウイニーのつらい時代の終わりが、フランの公爵の向こうに見えた気がしたのだ。

「あつがとついでこまか……お忙しことにひい申し訳あつませんが、
よろしくお願ひ致します」

『だからか借りてきた言葉だつて、いまの彼女はするやうひとつ口に
に出してしまひ。

本当は。

『ありがとう、おじ様!』

そう叫んで、彼の首にかじついて、感謝の抱擁をしたいほどだ
つた。

だが、こまのウイナーの中には『不作法』と鳴く赤い鳥がいたた
め、多くの力が彼女を引き止めたのだ。

そうしたら。

公爵は、少し苦笑して。

「ありがとう、おじ様、でいいよ

ものの見事に、ウイナーの心を読み当てられてしまった。

一字一句違わないのだから、恐ろしこことだ。

それほど、彼女は分かりやすい性格をしているのか。

そのせいで。

「ありがとう……おじ様……」

恥ずかしくなったウイニーは、赤くなりながらはにかむお礼が精いっぱいになってしまったのだった。

フラーとロアール

「フラーの方は、優しいのですね」

レイシエスの動きを、ひとつひとつ助けるようにエスコートしてくれるスタッフに、お礼を含めた称賛を送る。

ロアールでは、屋敷の中にいることの多い彼女は、従者にかしづかれて甲斐甲斐しく世話を焼かれることがあっても、こういうエスコートには慣れていない。

華やかな社交パーティではなく、軍事的な祝祭を主とする地域のため、礼儀作法の練習以外、ほとんど無関係な世界だったのだ。

「ロアール限定ですよ……フラーは、どこにでもいい顔をしているわけではありません」

称賛は、彼を喜ばせたのだろう。

目元と口元にたたえられた笑みは、香辛料の中にわずかに甘みが混ざったような、男性らしいものだ。

その笑みの持つ香りは、レイシエスの胸の中に入り込み、ちりちらと小さくはぜた。

「ひいお祖父様の時代の話かしら？」

ふふふと、思い出したら笑みが浮かんでしまう。

先々代のフーラの公爵は、この方のようだつたのかしり、と。

「ええ……いまもフーラの者は、みな覚えていります。『無謀公爵』の名と共にね」

黒々とした瞳の中に、過去が閃く。

フーラとロアアールが、深い縁で結ばれるきっかけとなつた出来事。

それは、レイシェスの曾祖父とスタファの曾祖父が、公爵だつた時代の話。

当時のフーラの公爵は、破天荒な人だつたといつ。

巨大な船を建造して、遠い異国と貿易を始めたり、異国の文化にかぶれたり。

そんな彼は、ある日思ひたつた。

いや、思ひたつてしまつた。

『そう言えば、雪を見たことがないな。よし、雪を見に行こうぞー!』

そして、手紙一つロアアールに送つたかと思うと、彼はその手紙の到着を追い抜くほど速く、北西の地に雪見をしに行つてしまつたのだ。

ただ、冷たくて白くて綺麗な物。

その程度の考えだつたフーラの公爵は、雪で覆われた道を見誤り

それはもう、見事に遭難した。

フランの馬にフランの護衛、フランの人にしては頑張った程度の厚着、とこう南の国の公爵一行が、雪に抵抗出来るはずもなく、彼らはばたばたと倒れてしまう。

そこへ、たまたま山手の村に、荷を運ぶ一行が通りかかった。

ただの行き倒れかと思ったら、馬車は立派だし、ほとんどの人が赤毛だし、これは何かやん」となき理由に違いないと、村までまだ遠いこともあって、慌ててその場で火を起こし、彼らに常備しているきつい酒を飲ませた。

何とか意識は取り戻したものなの、やはりとても自分で動ける状態ではなく、彼らは荷馬車から大事な荷を下ろし、場所を空けて彼らを村まで連れ帰ったのだ。

亡くなつた人もいたが、フランの公爵は何とか無事で、その後に連絡を受けたロアアールの公爵家に、呆れられながら運ばれて行つたところ。

その時のことを、フランの公爵は忘れられなかつたらしい。

『あれほど寒いところで暮らしているならば、荷は命と同じほどの意味があるう。それを捨ててまで、助けてくれたロアアールへの恩は子子孫孫まで忘れんぞ』

何度も何度も礼の手紙と贈り物を寄こし、ついにはその後、後継ぎだった祖父に、娘まで送つて寄こしたのだ。

それが、彼女らの祖母である。

『側室でも構わん』といつ、恐ろしい手紙をつけて送られたフーラの公爵の娘は、幸いにしてまだ結婚していなかつた祖父の、妻としておさまることが出来た。

そして、『フーラの無謀公爵と、優しきロアアールの民』なる話は、フーラに広く伝わり、物語にまでなつたといつ。

後に、その物語には続きが出来た。

二十年ほど前。

ロアアールの姉妹は、まだ生まれてはいなかつたが、父が公爵を継いですぐの時代。

大陸から、ロアアールへ大がかりな侵攻が行われた。

代替わりの不安定な時期に加え、ようやく遅い春を迎え、ロアアール中が忙しかつたその時を狙われたのだ。

防御戦に強い地域ではあるが、敵はしのぐのが難しいほどの多勢だつた。

父は、ついにロア（北）とイスト（中央）へ使者を送り、援軍を乞つたのである。

かくして、一番最初にロアアールへ増援に駆けつけたのは フラの騎馬隊であった。

走りに走ったり、拳の南の果てから北西まで駆けつけたのである。

父は、フラン救援は送つてはいない。

送つたのは 祖母だった。

父が、増援をひつかどうか迷つていた時には、既に手紙は送り出されていたのだ。

祖母が國から連れて來た老いた召使いが、命がけで単身フランまで手紙を抱いて駆け抜けたのである。

『今こそ返さん、かの日の大恩を』

先代のフラン公爵からの手紙は、その一文のみだった。

赤毛の騎馬隊を、敵は知らなかつた。

これまでフランの兵は、国境の戦いに参加したことはなかつたのだ。

イストの拳の王を最後まで苦しめた、魔物のことを強さは昔話ではなく、侵攻する敵をことごとく敵を蹴散らしたのだ。

『赤い槍の群れのようであつた

父の記憶の中の光景は、言葉でレイシエスへと伝えられた。

「おれは、二十年ほど前に、既にしていただいたのに……まだ覚えて下さつてゐるのですね」

その出来事のおかげで、ロアアールの軍の者は、フラーに対する態度大きく変わった。

今日、馬車がかち合つた時も、護衛隊がフラーの馬車だと確認するや、すぐさま攻撃的な態度をやめたのもこのおかげだらう。

残念ながら、ロアアールではフラーの援軍は、物語にはならなかつたが。

軍人と、国境近くの村の間だけで、語り継がれていくくらいだろう。

「ええ……あれはうちの曾祖父を助けて下さったお礼です。あと……うちの曾祖父が迷惑をかけた分のお詫びが終わつてません」

苦笑いしながら、スタッフは『』の曾祖父を荷物のように言い放つた。

「まあ……」

不敬な物言いに思えたが、陽気なフラーの侯爵家で、『冗談のよう』『無謀公爵』の話が語られている様子は、何故か簡単に想像がついた。

さあや、かの人は身内に迷惑をかけまくつたのだろう。

「お詫びなんて……もう十分でしてよ」

想像するとかかしくて、ついくすべくと笑つてしまつ。

そんな彼女を、スタッフはまっすぐに見ていた。

あの王太子の田を見た後だと、彼の田は暗くとも美しい夜空のように想えるほどだ。

「こつでもフリは、ロアアールの味方です、

南の風をはらんだ言葉は、レイシースの心に優しく絡みつく。

「ありがとう」それこそか……その言葉、髪の先ほども纏つてはおりません」

遠い地の、普通であれば無縁の公爵。

しかし、遠いからこそ利害を超えてつながることもあるのだ。

これほど良好な関係は、大事にしたい。

だが。

「もしよろしければ、今度ロアアールへ遊びに行つてもよろしいですか？」

まっすぐなスタッフの言葉は、レイシースの心を少し重くした。

彼のせいではない 母のせいだ。

妹の話

「迷惑ですか？」

浮かないレイシェスの表情を見たスタッフは、少し心配そうな眉になつた。

「いえ……そうではないのですが……」

どう、レースにくるんでも話さうか、彼女は迷う。

母は、フラを嫌つてゐる。

勿論、外交上の問題だから、表立つて好き嫌いを言つことはないだろう。

しかし、しわ寄せはすべてレイシェスに來るのだ。

母のしわ寄せの重さは、なかなかに辛いものがある。

「フラは、ロアールに片思いですか？」

更にスタッフに押されて、彼女はすっかり困つてしまつた。

ついに、彼女はひとつ決断をする。

「実は……母と祖母は、余り仲が良くなかったんですね……」

遠回りの話で、彼に分かつてもらえないだろうが、とそこを打ち

明けたのだ。

ロアール全体では、決してフラをないがしろにしているわけではないのだと。

「ああ……」

ふと、声のトーンが落ちた。

彼の心のトーンが落ちていくと、同じもののように思えて、はつと彼を見る。

美しい花を見つめながら、彼は半田になっていた。

「なるほど……分かりました」

明らかな不機嫌が、そこには隠れている。

自分の選んだ言葉が失敗だったと、レイシェスが後悔し始めた時
彼の言葉は、あらぬ方へと飛んだのだ。

「だから……ウイーーだけ違うのですか」

ぞくつと、した。

花に怒りを落とすよつこ、それが呴かれる。

怒りの向いている先が、自分ではないことは分かった。

しかし、優しいフラの人の表情に、怒りが閃く瞬間を見てしまつ

たのだ。

大きな落差に、心臓が止まるかと思った。

「あなたは、完璧な礼儀作法を身につけておいでだ……とても美しい。しかし、ウイニーは、まるでフラの町娘のようだ」

彼がウイニーに言つていた、無作法というもののことだらうか。

それは、あれは　何を言つても、言い訳にしか過ぎない」とは、自分が一番よく知つてゐる。

放つておかれた。

放つておかれてゐるのを知つていながら、レイシェスも妹を放つておいた。

一応、最低限の教師はつけられていたが、それが何だというのか。期待もされていなければ、愛のある叱りもない中で、どれほど人は成長できるというのだろう。

そんな思いが、心中を駆け巡つたレイシェスは、知らず酷い表情を浮かべていたようだ。

スタッフは、微かに首を傾けて目を伏せた。

「すみません……同じ赤毛のせいだ、無意識に同族だと思つクセが出ました。ロアアールには、ロアアールのしきたりがありますね」

余計な口を挟みましたと、スタッフは困った眉をする。

曾祖父の時代、あれほどフラが感謝を表した理由が、彼を見ているとよく分かった。

とても、情に厚いところなのだ、かの地域の人は。

祖母にさかのぼる長い手紙のやりとりでも、それが十分に伺えるではないか。

赤い髪というだけで、ロアアールで冷遇されている妹に、すぐに気づいて、そして怒つてあげられる人たちなのだ。

彼らにとって、ウイニーの冷遇は祖母の冷遇と、きっと同じように感じるのだろう。

「いえ……あなたの思っていることは、本当です。私は、頼りない姉で……妹一人、守れていません」

髪の色こそ違え、同じ両親から生まれた身内も守れない自分が、ひどく恥ずかしく思える。

だが、こんな人なら。

いや、こんな人がいるからこそ、ウイニーに希望があるのではないか。

「もし……あなたが嫌でないのなら……ウイニーをお嫁にもらってくれませんか?」

これほど、同族に情の厚い彼ならば、妹をきっと幸せにしてくれるのでは、そう思つてしまつたのだ。

不羨な願いだとは、分かつてはいる。

両親に叱られるかもしれない、勝手な話なのは分かつてはいる。

それでも、ロアアールではウイニーは幸せになるのは難しいのだ。

母が生きている限り、それはない。

ならば、それならばいつか、フリに話すといつ手があるのでないか。

レイシエスは、本気でそう思つたのである。

スタッフは、険しい表情に変わつていった。

それほど多くはない、いくつかのことを考へ、そして余り良い結論にたどり着かなかつた　そんな表情。

「残念ですが……私は、あなたの妹を幸せにすることは出来ません

返事は、表情通りとこうべきか。

本当に残念とは、きっと思つていらないだらう正直な声音が、ゆるやかにレイシエスの胸を刺す。

既に結婚相手が決まつてはいるか、心に決めた人でもいるのだろう。

「やつですか……忘れてください。あ、ウイニーは、このじとせ

……」

フラの男性に、結婚の話を断られたと聞いたら、妹の心の傷がひどいものになる気がした。

ウイニーは、自分の姿にコンプレックスを持つて居る。
それくらい、気づいていた。

母の言葉と、自分がいつも近くにいるせいだ。

だから、どれほど彼女が可愛らしかレインシェスが言つても、決して妹には通じない。

その言葉は、本当に彼女を愛した他の者から伝えられなければ、何の意味もなさないだろう。

「分かっています……ただ、あなたがそれほど妹を心配していらっしゃるのなら……フランでよい嫁ぎ先を探してみましょ」

代わりに出された言葉は、とても魅惑的に思えた。

ウイニーがフランに嫁ぐ。

それだけで、彼女が幸福のように感じたのだ。

だが、顔も知らない、誰かも分からぬ相手に嫁がせることを考えると、まるで自分が厄介払いをしていくように思えてしまつ。

「フラン、ビリでもいいわけではない。

妹のことを深く考えすぎたレイシェスは、「めかみを押さえた。

軽い頭痛を感じたのだ。

すつとスタッフが、身を支えてくれる。

「大丈夫ですか？」

優しくも情熱を秘めている男。

彼が、ウイニーを望まなかつたのは、本当に残念なことだとレイシェスは思った。

「これほどの扱いをしてくれる男であれば、妹もきっと幸せになれるだろ?」^{アーヴィ}

「はい……」

微かに震える声で、彼女は小さく答えた。

「部屋に、戻りましょう」

スタッフは、彼女の腕を取ると、美しい春の庭を後にしようとした。

後半、ほとんどその景色を愛でる間もなく、彼と妹のことで頭がいっぱいだったレイシェスは、最後に一度だけ庭を振り返る。

ロアールには、まだ遠い美しい花園。

自分たちの幸せもまた、遠いのだろうか。

彼女は、すっかり気落ちしてしまった。

スタッフの事情

「お前……ウイニーを妻にする気はないか？」

兄 カルダにそう言われた時、スタッフはがっくりと肩を落とした。

今日は何で日だ、と思いながら。

ロアアールの部屋から帰つて来て、すぐの出来事だった。

「今日、私にそう言つてきたのは、兄上で一人目だ」

上着を脱いでソファに身を投げ出しながら、彼は天井を見上げた。

ウイニーが、嫌いなのではない。

彼女のことばは、髪の色のせいか同族のように思えるところがあつて、気にかかるはいるが、それは恋ではないのだ。

「ああ、レイシェスがそう言つたのか……彼女も心配しているのだ

る（う）

物思いにふけるように、兄は小さく吐息をついた。

「お前は、本氣でロアアールの未来の公爵の婿になる気が？」

カルダは、そんなソファのひじ掛けに腰かけながら、弟を見下ろす。

子どもの頃から、8つも年上の兄と競つて来たが、大人になるまでほとんどの事で勝つことなど出来なかつた。

最近、ようやく乗馬と剣術で越えることは出来たが、スタッフの心には、負けず嫌いの根性が深く深く根付いている。

「可能性はあるだろ?」

彼女は、自分に良い感情を持つてゐるのは、一緒に歩いていく分かつた。

でなければ、自分にウイーーを勧めるはずなどない。

あの時の彼女の目は、本氣だつた。

本氣で、妹を自分に託そつとしていたのだ。

自分に対する信頼が、そこにあるよつと思えた。

「可能性か……公爵の奥方を乗り越えられれば、あるかもしけんな」

カルダの言葉に、自分の顔が歪むのが分かる。

娘たちに、どれほどひどいことをしてゐるのか。

それは、レイシヨスの態度と言葉を見れば、嫌でも伝わつてくる。

趣の違う姉妹　　そんな言葉では片づけられない、母親が抉つた
だらう一人の間の溝。

その溝を越えてなお、仲良くしようといつ気持ちがあつたことが奇跡で、彼ら姊妹の性質のよさを表している気がした。

スタッフが、心を奪われているのはレイショスだ。

15の時、葬儀の会場で彼女を初めて見た。

12歳とは思えない、すらりとした彼女の立ち姿に、最初に目を奪われた。

白い肌に、黒い喪服の闇が絡みついているように感じて、彼女から目が離せなかつたのだ。

そのまま、闇に飲み込まれてしまつような儂を、そこに感じた。

フランにはない、かき消えるよつた線の細さ。

沈痛な面持ちの彼女が、泣きじゃくる妹を見る時だけは、深い慈愛に満ちた色になる。

彼女が、決して冷たい人ではないことが、そこから伺いしれた。

あの日からスタッフの心には、ロアアルの美しい娘が焼き付いているのだ。

兄が、一人と文通をしていると聞いた時、どれほど羨ましく思つたか。

しかし、カルダは弟には決して、レイショスの手紙を見せようと

はしない。

確かにそれは常識的な行為ではあるのだが、兄を恨めしく思つたこともあった。

『お前も、手紙を出せばいいだろ?』

あいつさつと兄にやう言われたが、スタッフは腰が重かつた。

手紙は、ウイニーの名で送られてきていた。

あの、泣いていた赤毛の妹だ。

スタッフは、妹に手紙を出す気はない。

だが、ウイニー宛てに手紙を送りながら、中身はレイシェス宛てだと、余りにあからさますぎる。

それに、レイシェスではなく妹の名で送られる手紙の事情から、何か障害があることを感じていたのだ。

「しかし、お前が駄目となると… フラで相手を探すのは難しいかもしれんな」

「一むと、カルダは唸った。

4年前から流れて来た記憶を握っていたスタッフは、そこでようやく現実へと足をつける。

個人的な興味はないが、祖母の血を濃く残す赤毛の娘だ。

恩義あるロアアールの娘でもあるヴィニーに、いい嫁ぎ先を考えてやるのは、良い事だと思っていた。

レイシエスに感謝もされるだろう。

「他の弟じや駄目か？」

スタッフの頭には、腹違いの弟たちが通り過ぎて行つた。

「曲りなりにも、ロアアールの公爵令嬢の相手だぞ……いくら公爵の息子とは言え、腹違いで納得させられるかどうか」

兄は、ロアアールの公爵夫人の壁を、それほど厚いと読んでいるのか。

娘を嫁がせるということは、今後もフランとの付き合いが深くなるということだ。

フラン嫌いの夫人が、フランからの申し出を喜んで受けけるとは思いたい。

よほど断りづらい相手でなければ、確かに難しいだろう。

5公爵の娘であれば、王太子の側室にもあげられるほど身分なのだから。

側室ではない、正妃から生まれた娘なら、なおのこと。

側室の子どもたちは、明らかに正妃の子とは違う扱いを受ける。

それは、勿論フラでも同じだ。

兄弟ところづけは、陛下との付き合に近くなる。

血筋は間違いため、勉学や軍事の訓練にいそしめば、高い地位もある程度約束されていた。

それを考えると、あの氣楽なウイニーであつても、格の落ちる相手であることは間違いないだらう。

「何も、フランだわらなくともいいと懲り。たとえば、せつかく王都にいるから、王太子に勧めてみるとかどうだらう」

スタッフの言葉は、半分は本気、半分は冗談だった。
フラン以外の可能性を示唆したかったのが、本気の方。

ウイニーの礼儀作法では、多分難しいだらうといつのが、[冗談の方]。

「馬鹿なことを言つたな……王太子殿下の相手なんてさせたら、ウイニーが壊されるぞ」

[冗談でも許し難いと言わんばかりに、カルダは唸つた。

赤毛の娘が問題というわけではなく、ビタや王太子の方が問題のようだ。

直接話したこと、それどころか会つたこともない相手のため、

どうじつ壞され方をするのか、まったく想像がつかなかつた。

ただ、ウイニーが幸せにはならない それだけは、十分に伝わつてくる。

「となると弟殿下か、ニール（東）の公爵の孫か……いや、ニールは年が合わないな」

王太子は問題だが、その弟たちならまともな者もいるよつだ。

兄は、ぶつぶつと赤毛の娘の嫁ぎ先について、口の中で呴いている。

「だが……本当はフーラに嫁がせたい気持ちでいっぱいだよ

そんな呴きに、ついに終止符を打ちながら、カルダはため息を洩らす。

その気持ちは、スタファでもよく分かつた。

フーラの公爵家だけでなく、領民がウイニーのフーラ入りをどれほど喜ぶか。

想像するのは、簡単だった。

『無謀公爵』の赤毛の娘は、ロアアールへ嫁いだ。

その孫が、偶然赤毛に生まれて、そしてフーラへ嫁いでくる。

あの物語を、そして二十年前の出来事を知っているフーラの領民は、

まるで自分の恋の成就のように、ウイニーの婚礼を喜び、そして再び運命の物語でも書きあげるに違いない。

ロアアールにいた彼女からは、信じられないほど歓待が待つているだろう。

しかし、フランにはロアアールの公爵の令嬢を受け入れる席がない。

「スタッフア……」

「くどい、兄上」

弟の心変わりを望む呼びかけの声など、すぐに分かる。

身内への情に厚い分、フランの人間は、身内への甘えもあるのだ。

「大体、私がロアアールに婿に入るのも、おそらく向こうの公爵夫人以外には、歓迎されると思いますよ。勿論、フランの領民にもね」

打倒・ロアアール公爵夫人。

スタッフアの心の中では、自然とそんな文字が踊り始めていた。

レイシェスの表情を、あれほど暗くさせる人。

その女性さえ黙らせてしまえば、ウイニーの心配も格段に減る気がした。

求婚の中から、一番いい嫁ぎ先をゆっくり選べるだろう。

しかし、他家の夫人に心変わりをさせる方法など、いまのところありはしなかつた。

「お前の心配はしていない。いつそ、わざわざレイシスに求婚して、断られてこい。ウイニーには内緒で」

最後の一言で、よくよく兄の気持ちが分かった。

そして、ウイニーを嫁にもうえと言っているのだ。

「じつくつ時間をかけさせてもらひよ、兄上」

そんなカルダの希望など、スタッフは思い切り蹴飛ばしたのだった。

夕日の庭

「姉ちゃん……ちょっと花を見に行つてもいい?」

ウイニーは、そつと姉の寝室に入つてそう聞いた。

長旅の疲れと、公務の精神的な負担が響いたのだろう。

姉は、頭が痛いと今日は早々寝室へと入つてしまつた。

時間は、夕刻。

まだ、太陽は夕暮れの位置で、沈み切つてはいない。

ウイニーはおとなしくしてはいたのだが、一人で寂しい思いをしていた。

フランの公爵との時間が、楽しすぎた反動だろうか。

「場所が……分からぬいでしょ?」

ベッドから半身を起こしながら、青い顔でレイシェスは止める。

「あ、大丈夫。ネイラが、行き方は分かつてゐるみたい」

召使いは、主の遣いで部屋からよく出る人間だ。

そのため、王宮の出入り出来る場所は、ロアアールを出る前から、彼女らには教え込まれてゐる。

彼女の召使いのネイラも、ぎりぎりで王都に来ることが決まったが、ちゃんと下調べはすませてくれていた。

「そう……大丈夫？ 私も行きましょうか？」

「平気よ、姉さん。ちょっとだけ、花を見てくるだけだからおそらく姉は、ウイニーの身よりも『不作法』を外にさらけだす方を心配しているのだろう。

スタッフの一件で、それは十分懲りたので、今度こそはちゃんと公爵の娘らしくしようとやかにすればいいだけ。

「ネイラも一緒に連れて行くから、姉さんはゆっくり寝てて

「そう？ 気をつけ……早く帰つてらっしゃい」

心配そうな視線は消さなかつたが、最後にはようやくレイシェスは折ってくれた。

おそらく、庭が本当に美しかったのだろう。

そして、気楽に散策できる場所だったに違いない。

姉の許可に、少しほとしながら、ウイニーは召使いのネイラを連れて部屋を出たのだった。

初めて、一人で出歩く王宮で、わくわくする。

そのわくわくで、ウイニーは必死に重じをつけた。

公爵令嬢らしく、公爵令嬢らしく。

自分に呪文をかけながら、彼女はしずしずとネイラの誘導通りに廊下を歩いて行った。

これから少し遅つ夜に変わつていく時間のせいが、お偉い方々は既に部屋に戻つてしまつたようだ。

おかげで、すれ違ひの会釈や挨拶など、ほととぎす無縁で通る」とが出来た。

よつやく、庭に降りられるとじろくたびつづくと、ひよひよ西側を向く形になり、強い夕日が眩しくウイニーを襲う。

この季節、ロアアルでは考えられない、光の強さだ。

本当に遠くまで来たのだと、肌で思い知る瞬間もある。

その夕日に照らされ、春の花はオレンジがかつた赤に燃え上がつているよつだつた。

本当の色は別にあるだろつて、全てその色に染め上げられているのだ。

まるで、自分の髪の色のような世界。

よつ思ひと、少し上機嫌になつて、ウイニーは庭へと下つた。

自分の色の世界であれば、きっと自分に優しいに違いないと、根拠のない自信を持ちながら。

「わあ……」

黄色もピンクも白も、みな赤く彼女を迎える。

彼女は、花と夕日に包まれて、とても幸せだった。

「夕日の精か?」

そんな 男の声が聞こえてくるまでは。

庭の真ん中ほどにきたウイニーは、驚いて西を見た。

声はそちらから聞こえて来たが、その眩しい夕日のせいでの、誰かよく分からなかつたのだ。

誰、だろう?

ぽかんと、近づいてくる人を見ていたウイニーは、まつと我に返つた。

たとえ誰であれ、ここは王宮で、そして庭を散策できる身分の人であることは間違いない。

姉ならまだしも、ただのオマケでついてきたウイニーより、身分が低いはずがなかつた。

「失礼いたしました……」

慌てて、近づいてくる人に腰をかがめて挨拶をしようとすると。

「ドレスを汚したいか？」

腕を無理矢理取られ、強い力で立たされる。

それほど近くまで寄られたとは思いもせぬ、ウイーーは驚きで心臓が止まりそうになりながら、慌てて田の前の男を見上げた。

ああ。

さすがの太陽であっても、黒は染められない。

自分に影を落とす男の髪は、柔らかくも美しい闇の色。

無表情にも不機嫌にも見える瞳の色は、影のせいによく分からない。

そんな男に。

「本当に赤いな……フランの娘か？」

突然、前髪が 引っ張られた。

「いたつ」

びっくりした。

いきなり、初めて出会った女の髪を引っ張るなんて真似をされる

とは、思つてもみなかつたのだ。

「な、何を……不作法だわ」

今日、さんざんウイーーが言われたその言葉が、反射的にぽろつと飛び出しあしまつた。

慌てて口を押さえるが、時は既に遅い。

「不作法？ 私が不作法なら、お前は無知で無教養で、そして時代遅れのドレスを来ている田舎者だ」

言葉は、まるで刃物のようだった。

ひとつ田の痛みに気を取られていたら、容赦なく次々傷つけられ、もひびがどれの痛みやら分からなくなつてしまつてこる。

時代遅れのドレス。

その言葉が、一番悔しかつた。

無知で無教養は、それは十分身にしみている。

これは、ウイーーが勉強を真面目にやらなかつた罪だ。

田舎者も、本当のことだひづ。

だが、ドレスの悪口だけは、彼女の怒りを跳ね上げてしまった。

「これは、お祖母さまが遺してくれた、大事な大事なドレスよ！」

「このドレスが時代遅れというのなら、私は時代になんか乗らなくてもいいわ！」

カツとなつたウイニーは、この失礼な男の言い様の、その一点に囁みついていたのだ。

悔しくて悔しくて、これ以上切りつけられる言葉を投げられるのに耐えきれず、彼女は踵を返した。

速足で花園を後にする。

召使いのネイラが、慌ててついて来ているのを気にもかけられなまま、ウイニーは自分の部屋へと急いで戻ったのだ。

もう絶対、フランの人以外とは会わない！ フランの公爵の部屋以外行かない！

そう固く心に誓いながら、彼女は夕食も無視して、フテ寝することに決めたのだった。

赤い髪の記憶

フランの公爵は、王太子との謁見をよつやく許された。

まさか、夕食も過ぎた後の時間になるとは思つてもみなかつたが、身なりを整えて王太子の謁見室へと向かう。

正直、もう明日になるだらうと思つていた。

王太子はとても氣まぐれで、性質が余りよろしくない。

その上、頭だけは切れるせいで、本当にタチが悪かつた。

だから、こんな常識はずれな時間の呼び出しにも、何か意図があるのではと思ったのだ。

ウイニーと二人で話をしている時、既にレイシエスが挨拶に行つたことは聞いていた。

妹である彼女には言わなかつたが、それを良い事だとカルダには思えない。

どうせ王太子も、レイシエスの噂に釣られたのだろう。

その謁見が、うまくいったかどうかは分からぬが、少なくともフランの公爵と会つことは先延ばしにしたようだ。

「『機嫌いかがですか、王太子殿下』

謁見室の椅子にふんぞり返っている男に、カルダは恭しくも穏やかに挨拶をし、言葉をかけた。

彼が公爵を継いだのは去年だが、父の体調の関係で、2年前にも代理で来ていた。

だから、これが一回目の謁見ということになる。

椅子の上からこちらを見降ろす視線は、カルダの頭に不躊躇に注がれている。

「相変わらず赤いな……妹はいるか？」

フランの髪が赤いのは、今の始まつたことではないことに、今更どうしたというのだろう。

しかも、いきなり身内の話に振られる。

「おりますが……一人。しかし、どちらも既に嫁ぎました」

赤毛の女にでも、興味が出てきたのだろうか。

側室に寄りせと言われる前に、カルダは先手を打った。

「Jの王太子に、可愛い妹たちをやるものかと思いながら。

田をつけられる前に嫁に出しておいて、本当によかつた。

胸をなでおろしていたカルダであったが、王太子が不機嫌な表情に変わっていくのが見える。

「お前は、嫁いだ妹まで連れてきているのか？」

常識外れを、咎め飄るよつて王太子は言葉を投げる。

「おっしゃつている意味が、分かりかねます」

カルダは 慎重に答えた。

余り不機嫌になられると、後が面倒だからだ。

アール（西）の公爵が、2年前の謁見会で、酒の入った杯を頭上でひっくり返されるという事件があった。

勿論、彼の頭に酒を飲ませようとしたのは王太子だ。

晚餐の席での話である。

あのおしゃべりな公爵に、そつしたくなる気持ちも分からないではないが、人前で大恥をかかされた彼は、カンカンに怒っていた。

勿論、怒つたところで王族に逆らうことも出来ず、王に苦情を陳情するのが精いっぱいだったようだ。

そのおかげか、王太子の前でアールの公爵は、無駄に口を開かなくなつたとか。

とにかく、この王太子を不機嫌にすると、口クなことがないのだけはよく分かつていた。

「赤毛の娘を、連れてきているだらう?」

これ以上、しらばつくれるなどでも言わんばかりに、強い言葉でカルダを串刺しにしようとする。

赤毛の、娘。

一瞬、真っ白になりそうだった意識を、カルダは何とかとどめた。思い当たる人物は、たった一人しかいなかつたのだ。

ウイニーである。

一体、どこで会つたのか。

少なくとも、その髪の色だけで王太子がフラに探りを入れるということは、ちゃんと話をしたわけではなさそうだ。

彼女　ウイニーが、自分をフラの人間だと言つはずなどないのだから。

しかし、悪い気配が大挙してカルダの足元に集まつてくるのが分かつた。

もし、ここで彼女がロアアールの娘であることを知つたら、ロアアールの姉妹がとても不幸になる気がしたのだ。

レイシェスは、まだまだ公爵を務めるには、精神的に育ち切っていない。

そんな彼女では、おそらく王太子に妹を取り上げられようとしても、抵抗出来ないだろう。

それどころか、姉妹のお互いの気持ちを利用して、一人とも手に入れかねなかつた。

「いいえ……殿下。私が連れて来ているのは、第一人で『ゼロ』ます……髪の色をお間違えではありませんか？」

慎重に、本当に慎重にカルダは言葉を綴つた。

「この男の視界から、ロアアルの姉妹を隠してしまつよ！」

「確かに赤……いや、夕日のせいがれ」

フランの公爵に、じつと見られているのに気づいた王太子は、眉間に皺を深く刻んで彼を追い出した。

ありがたい事に、これで慣例の挨拶は終わりにしてくれるようだ。

謁見室を出て血室へと戻りながら、カルダはゆっくりと安堵の息を吐き出した。

とりあえずの問題は、回避出来た。

だが、まだ安心できた訳ではない。

おそらく、王太子の気まぐれな興味だろうが、今度ウイニーと会えば、どうなるか分からぬ。

参ったな。

「どいで、王太子に見られたのか。

部屋に戻つて、召使いに酒を持つてこさせていると、スタッフがやつてきた。

まだ部屋着にも着替えていないところを見ると、彼の戻りを待つてくれたようだ。

「珍しい、兄上がそんな疲れた顔をしてるなんて」

顔を見るなり、驚かれた。

王太子のあの発言は、よほどカルダを疲れさせていたようだ。

「赤毛の娘について聞かれた」

蒸留酒のグラスを受け取りながら、カルダは弟にさつきの出来事を語つた。

スタッフの反応は、ただの一言。

「あの馬鹿……」

弟らしい、分かりやすい一語に、全てが凝縮されていた。

勿論、それは王太子に向けられたものではなく、彼らの愛すべきはどこへのものなのだが。

「また、ふらふら外に出たのか

弟はそう言つが、カルダはそこを責める氣はない。

まだ15歳なのだ、ウイニーは。

好奇心も旺盛だし、初めての王宮で浮かれているところもあるだろ。

ただ、彼女は女性なのだ。

レイシェスと一緒にいるからこそ、ウイニーは自分の姿勢を平凡なものだと思っているだろうが、決して悪いわけではない。

年の頃も、そろそろ結婚の話が出てもおかしくない。

迂闊にその姿を人にさりすと、どこから婚姻の話が来るか分からぬのだ。

それが、ウイニーの望むものであれば、カルダも反対はしないが、残念ながら王太子が釣り上がることもある。

「今度会つたら、一度と部屋から出ないように言つておけ」

レイシェスびいきのスタッフからすると、ウイニーの行動は姉の評価を落とすものだと判断したようである。

公爵代理で葬儀に出席させたら、ロアアールで恋の風邪にかかりついた弟だ。

そんな彼にかかるば、ウイニーは自分の妹のよくな扱いになる。

赤毛同士の親近感ゆえだらう。

兄弟の中で一番末の子だけに、自分より下の面倒を見るのは、そ
う嫌いではないようだ。

「そうだな……余り出ない方が、ウイニーのためだらう

弟にはまだ、王太子がレイシェスだけ特別に、最速で謁見した話
はしていない。

したところで、スタファにはどうすることも出来ないし、王太子
への余計な恨みを蓄積するだけだらう。

それより、まだ弟にウイニーを守らせておく方がいい気がした。

弟が彼女のこと好きになれば万々歳　などと云ふことは、も
はや考えていない。

フランの男は、愛が強い。

一途な愛ならば、どこのまでも貫き通す。

いつぞ、強すぎると云つてもいい。

だからこそ、カルダは正妃を持ちながら、一人の側室も持つたの
だ。

正妃一人にぶつけんには、愛が強すぎて女性を壊してしまいかね

なかつた。

実際、正妃は身体を壊してしまつたではないか。

正妃に最初に子を産んで欲しかつたため、誰よりも多くの愛を注ぎ続けた挙句の結果だとするならば、彼女が亡くなつた大元の原因は、自分にあるのだろう。

それほど愛の深い血筋のため、もはやスタファの心が動かないことは分かつた。

だが、妹のようにウイニーを守れば、それが結果的に彼の愛するレイシエスとロアアールを守ることになる。

「ウイニーが部屋を出てしまつのは、退屈だからだらう……ちよくちよく遊びに行つてやれ」

「私が子守？」

兄の言葉に、少し不満そうではあつたが、それでもウイニーを口実にレイシエスに会う機会が増えるという考えに至つたのは、カルダの目からも非常によく分かつた。

「分かつた……ウイニーの子守をしよう

しばしの後　弟は勿体ぶりながらそつ答えたのだった。

兄さん

翌日　何故かスタッフがやつてきた。

ウイニーの部屋に、だ。

姉は、まだ調子がよくなく、隣室で横になっている。

そんなんまらない午前中、何の前触れもなく現れたのだ。

「人のこと、無作法って言えるんですか」

まつたく淑女に対する扱いをしてくれないスタッフに、彼女は不平をぶつける。

召使に慌ててお茶の用意をさせながら、彼をソファへと案内した。

「昨日、私たちが戻った後……部屋から出たの？」

しかし、切り返された言葉は、彼女をギクリとさせる。

昨日の記憶を最悪の最後で締めくくった男が、目の前を駆け抜けたのだ。

ベッドで散々、その男のことをなじりながら眠ってしまったのだが、朝起きて

みたら怒りよりも違うものが押し寄せてきて責ざめた。

もしかして、自分はとんでもないことをしたのではないか、と。

彼が誰かは知らないが、姉よりも身分が高かつた時、間違いなく迷惑をかけるだからだ。

公務の重圧にふせつている姉を、朝ちらつと見て、その罪悪感は計り知れない。

いまのレイシェスに、昨日の自分の失態など、とても告白できなかつた。

「ちょ……ちょっと花を見に行つただけです」

昨日の外出を、何故スタッフが知つてゐるかは分からぬが、花を見に行つた
という点では彼も同じではないか。

悪いことをしたわけではないのだと、とりあえず主張してみるとすると。

彼は、はあーっと深い深いため息を落としたのだった。

全身で呆れているかのようだ、ウイニーには見えた。

「だから、私が来たんだ」

自分の連れて來た召使いを、スタッフは呼ぶ。

召使いは、ずっと手に持つていた箱を、二人の間のテーブルの上

に乗せた。

「ウイニーを退屈させると、何をするか分からなからな」

彼が箱を開けると、そこからはカードだのチエスだのダイスなど
が出てきた。

いかにも、これで遊べと言わんばかりに。

「ううう遊び」というのは、大抵相手が必要だ。

一人でカードをするような趣味は、ウイニーにはない。

「昔、お祖母さまが教えてくれたカードくらいしか……遊び方はよく分かりません」

箱からそれぞれ取り出していたスタファの手が、言葉で一度止まつた。

その目に、明らかなる不機嫌が見えて、ウイニーは内心で同じほど不機嫌になる。

「ようがないじゃない」と。

祖母くらいしか遊んでくれる人はいなかつたし、母がうるさかつたせいで、姉とおおっぴらに遊べなかつたのだ。

「ね、姉さんだつて……余り遊び方は知りませんよ」

不機嫌を向けられるのが嫌で、レイシェスを引き合いで出す。

スタッフは、姉にはそんな顔をしないのではないかと思ったのだ。

姉が、遊び方を知らないのは、勉強が忙しくて遊ぶ暇がほとんどなかつたからなのだが。

「心配するな……ちゃんと教えてやるから」

ため息はひとつだけ。

不機嫌は、ゆっくりとその陰に隠れていった。

やはり、レイシェスという免罪符が、一番スタッフには効くようだ。

褐色の長い指でカードを器用に扱う彼を、ウイニーはじーっと見ていた。

姉に会いたいだろ?に、わざわざ自分の相手をしに来てくれたといふことは、おそらく公爵に頼まれたからだろ?。

そう思つと、まるで自分が重いだけの荷物であるかのように思えた。

もう、ここでの目的はある程度達成したのだし、後は本当にこの部屋にこもつて大人しくしている方が、みんなのためになるに違いない。

目的　それは、自分の嫁入り先をフラの公爵に託したこと。

あとはただ、彼を信じて待つていればいいのだから。

それならば。

そう自分が心に決めて、ちゃんとそれを実践するところのならば。
スタッフが、わざわざ本命でもない自分に、付き合つ必要はない
のではないか。

これ以上、フーラの人たちに余計な手間をかけさせるのは、さすが
のウイニーであっても心苦しくなる。

「えっと……私、ちゃんと部屋にいます。もひ、部屋から出ないの
で……大丈夫です」

ウイニーは、いつもよつよつと神妙に言葉に出してみた。

しかし、ハハハとすぐさまスタッフに、笑い飛ばされたのだ。

「お前は、フーラの血が濃すぎるよつに見える。フーラの人間に、大人
しくしどけなんて……無理な話だ」

事実　　彼は、そのまま話を続ける。

「事実……兄上だって、ロアアルの馬車を開けただらうっ！」

それが証拠と言わんばかりに、スタッフは昨日起きた出来事を挙
げた。

自分の兄である公爵を、大人しく出来ない悪い見本にしてしまつ

たのだ。

「ひど……」

「だから、フラン人間はそういう性質なんだよ。大人しくしていられない、ずっと無言でいられない」

ウイニーの反論など、即座に言葉でがぶせて邪魔し、その上、指を一本折つてみせるのだ。

1・大人しくしてられない。

2・ずっと無言でいられない。

心当たりがありすぎて、彼女は恥ずかしくなった。

しかし、その性質は決して自分だけのものではないのだと、スタッフアは言つ。

フラン人間が、大体そうなのだと。

そう言えば、この扱いの難しいスタッフアも、昨日さつそく姉を訪ねてこよつとしていたし、庭に連れ出していた。

言葉に至つては、ウイニーの方が言い負けるほどだ。

「いいんだ……それがフランの普通だからな」

そして。

馬鹿なことを口にし、やる。

それを止められない気持ちを、フランの人間なりば分かると そう、スタッフは言つてくれたのだ。

ロアールでは、とても厄介なこの性質も、フランにかかれば当た
り前。

何で、居心地のよさがついた国なのだろう。

ウイニーは、心の底から感動してしまつた。

いま、じつして来てくれているのも、公爵に言われたのと、姉への行為のオマケではあるだらうが、少しはウイニーのことを心配してくれているのだらう。

「スタフアさん……お兄さんみたい」

子供の頃から憧れていた兄という存在が、いまそこにいる気がした。

兄さえいえば、レイシエスは重圧から解放され、自分ももつと幸せになれるのではないか。

そう思つたこともあつた。

ウイニーの言葉に、ぴくりと彼の指先が反応する。

「兄さん……そう呼んでもいいだ

何だか、少し嬉しそうだ。

彼は末っ子だと聞いたので、自分より下がいることが嬉しいのだ
らうか。

「え……」

まさか、そんな切り返しがくるとは思ってもいなかつたので、ウ
ィーーは
ちょっと困惑してしまつた。

「えっと……スタッフ兄さ……ん？」

これで、呼び方が合つてゐるのかどうか分からなつたが、彼女はそ
お一つと言葉を並べてみる。

「悪くない」

つむ、と彼は満足そうに頷く。

えへ、えへへ。

ウィーーは、彼への苦手意識が軽く吹つ飛んだのを感じた。

苦言の数々も、妹に対して言つているのだと思えども、何一つくこ
むことなどない気がしたのだ。

「えへ……スタッフ兄さん、もし私がフリのどこかにお嫁入りする
ことになつても、いつ呼ばせてくださいね」

すっかり浮かれたウイニーは、遠くにある未来まで引き寄せてしま葉にした。

自分の未来が、全部ばら色に見えたのだ。

瞬間

曇ったスタッフの表情を見てしまった。

大馬鹿

ウイニーは、素直な娘だった。

無作法で、町娘のように奔放なところはあるが、笑うと可愛いし、『兄さん』なんて呼ばれた日には、本当に自分の妹のようと思えてくる。

正妃の子の中では、末っ子であるスタッフにとつて、その言葉は甘く心をくすぐった。

しぶしぶ子守をする予定が、彼女のためならばそれもいいかと思いつめていた矢先。

「えへ……スタッフ兄さん、フランビィーにお嫁入りすることになつても、じつ呼ばせてくださいね」

見過[レ]せない言葉が、彼に激突した。

話の流れが読めていなかつたスタッフは、反射的に自分の表情を抑えることが出来なかつたのだ。

そうだつた、と。

どれほどウイニーを可愛い妹と思つても、彼女の嫁いでくる席はフランにはなかつたのである。

その上、スタッフの曇つた表情は、過敏に伝わつてしまつ。

「あ、あの……す」い身分の方でなくていいんです。ロアアルは、そんなに贅沢な暮らしませんから、……あの……」

不安に揺れる黒い瞳と、少し呆然とした唇。

足場の少ない中、握っていたはずの綱が、いつの間にか少し遠くに離れて揺れているのに、必死に手を伸ばそうとしているような姿。

「そういうわけにはいかない。フランがロアアルを見下すような婚姻を、持ちかけることも出来ないし、そうしたところで断られるだろ？」

スタッフは、ゆっくりと立ち上がった。

向かいの、彼女のソファへと近づくためだ。

自分の姉たちを見てきたおかげで、フランの女性がどう癪を爆発させめるかまで、よく知っているつもりだった。

「でも……でも……」

現実を見たくない、小刻みに動く目。

スタッフは、そんな彼女の足元に膝をつき、その手を取った。

血の気が引いた手は、とても冷たい。

これが、今のウイニーの心の温度なのか。

「大丈夫だ……フランなくとも、兄上が一番いい嫁ぎ先を考えてくれ

れでいる。心配しなくていい」

小ちい子に言い聞かせるよひし、スタッフは声を穏やかにしてそう言つた。

「こんな言葉や声を出したことは、これまでない。

家族が自分にしてくれた」とを思い出し、真似るしかスタッフには方法がなかつた。

「……」

よほど、フライに嫁ぐところを楽しんでいたのだろう。

ウイニーは、すっかり氣落ちしてしまつたようだ。

赤毛はフライの象徴のよひなものだからこそ、彼女はそこに溶け込みたかったのだろう。

「うん……」

奇妙な音で、彼女は頷いた。

スタッフに向かつて、そういうふうな見えない。

自分の中の言葉に、自分で頷いているのだろうか。

「うん……あ、いいえ、はい……分かりました」

少しずつ、顔が上がつていいく。

手に、温度が戻つてくる。

「他の国でも大丈夫です……元々、ビニでもよかつたんですね。心を碎いてくれてありがとうございます、スタファ兄さん」

笑顔になる。

荒地から生まれた、小さな双葉を見つめるような瞳だ。

小さな小さな幸せでも、大事に自分の糧として生きている人の瞳。

彼女は、赤毛ではあるが、完全なるフラの人間ではない。

その身には、確かにロアアールの血が入っていて、そしてロアアールの地で生きてきた時間がある。

この我慢強さと、小さな幸せを満足する性質は、彼女をこれまでかの地で育ってきたのだ。

胸が、痛んだ。

ウイニーを、フラに迎え入れることが出来ない現実を、今ほど呪つたことはなかった。

許されるならば、無理やりフラに連れ去つて、ターティー家の娘として、晴れやかに血族にでも嫁がせただろう。

それほど、スタッフはウイニーのことを見つめた。

「この気持ちが恋であれば、何の障害もなかつたといつのこと。

彼の中に、もうレイシェスが住んでいるのだ。

むづくつと手を離して立ち上がると、スタッフはその赤い頭をぽんぽんと軽くなでる。

兄が、この少女に心を碎きたいと思つ気持ちが、本当によく分かつた。

手紙できつと、この性質はよく表れていたに違いない。

己の環境を呪わず、すれず、姉を妬まずにいるのが、どれほどまでに大変なことか。

こんな、スタッフにとつても身内のようになつた彼女を、幸せに出来るかどうか分からぬところに嫁がせるのは、確かにとても面白いことではなかつた。

何か。

何か、いい方法はないか。

彼女の側に突つ立つたまま、彼は必死に考えたのだ。

親戚中の顔を、一人ずつ頭の中で検分し始めた。

そんな自分を、見上げている目に気がつく。

ウイニーは、丸い目が見えなくなるほど細めて笑っていた。

「励まされるのって……嬉しいですね」

ロアールの公爵夫人など、この世から消えてしまえばいい。

彼女の笑顔は、スタファーの中の攻撃的な部分を上昇させるに過ぎなかつた。

昨日から、姉妹への仕打ちの数々が垣間見える度に積み重ねてきた感情だが、またもそれに大きく重いものが乗せられたのだ。

フラーの本気の励ましなど、こんなものではない。

もしも、ここにウイニーを心から愛するフラーの男がいたならば、公爵夫人を激しく憎み、そして彼女を何日も何日も慰めただろう。

彼女は、その愛を受けてしかるべきだ。

怒りを余り面に出さないよう努めながら、スタファーは向かいのソファへと戻つた。

レイシェスも、妹とは違う意味で苦しんでいる。

自分が、彼女の愛を許される男であれば　ふと視線を、隣へ続く扉へと向けた。

「あ、姉さんは……ちょっと具合が悪いみたいで。で、でも、お昼過ぎには起きるつて言つてました」

そんな彼の仕草を、ウイニーは見逃さなかつた。

廻過ぎにはスタッフが会えるように聞いてみる、とまで言わせてしまったのだ。

何を、やつてるんだ私は。

心配しているはずの少女に、逆に気を遣わせてしまつなんて。

「そんなことはいい……今日は、お前のところに来たんだ」

スタッフは、腐つてもフリの男だ。

ウイニーを踏み台にするような最低な男に、絶対になりたくないかつた。

そうしたら。

そうしたら、だ。

彼女は、嬉しそうに笑うではないか。

影ひとつない笑いを、心から浮かべるではないか。

こいつは、馬鹿だ。

スタッフは、思った。

最初から、馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、本当に大馬鹿のようだ。たつたこれっぽっち、自分が大事に扱われただけで、この世の全

てが楽園であるかのように笑うのは

馬鹿以外にありえなかつた。

ダイス

レイシェスは、わずかに漏れてくる隣の部屋の笑い声で目を覚ました。

鬱々とした気分が、その明るい声で慰められる。

Jの部屋はカーテンを閉め切つて日は入らないが、隣の部屋には太陽があるように思えたのだ。

「どなたかいいらしているの？」

控えてくる召使いに問つと、フラの公爵の弟　スタファードといひ。

ウイニーを妻にすることは出来ないと言つていたが、随分と仲良くなつたようだ。

隣室の明るさが気になつて、レイシェスはついにベッドから離れることにした。

昨夜の夕食も、そして朝食も取つていなかったため、飲み物とクッキーを少し用意させる。

空っぽの身体に、甘いものが染み渡る感覚を味わい、よひよへー息ついてから支度を始めた。

今日は、深い落ち着いた赤のドレスにする。

顔色が良くないと、思われたくなかったのだ。

母は彼女に青いドレスを着せたがるが、レイシェスは赤い方が温かみがあつて好きだつた。

身支度が整うと、臥せつている間に届いた、いくつかの事務的なことをこなす。

今回の滞在中の予定表が届いていたり、他家からの贈り物が届いていたり、あるいは昨日送つた贈り物の、礼状を早々に送つてきているところもあつた。

見れば、それはロア（北）とニール（東）の公爵である。

ロア・アールとは友好な、穏やかな関係の地域。

それから返事を書き終わり、ひととおりのことを済ませて、ようやく彼女はウイニーの部屋へと向かつたのだ。

寝室から続く扉を、使用人にノックさせる。

そこが、妹の部屋。

「姉さん、もう平氣なの？」

カードで遊んでいた手を止め、慌てて妹は立ち上がつた。

スタッフも同じく立ち上がり、一ぱらへと進み出していく。

「朝から、お騒がせして申し訳ありません」

今日は手を取られることはなかつたが、わざわざ側まで寄つて深い礼を見せる。

情熱のひるがえる瞳だ。

ロアールの憧れる、温度の高い黒曜石。

「いえ……私が余り相手を出来ないので、ウイーーも退屈でしょう。心遣い、痛み入ります」

レイシェスは、彼とその向こうにいる妹に、順番に視線を移した。

ウイーーは、えへへと笑つている。

心の底から上機嫌のようだ。

「いま、スタファ兄さんにカードを畳つっていたの。お祖母さまの教えて下さったのとは、全然違うの」

姉さんも、一緒にどう?

勧められるテーブルには、カードの他にも遊具の入つた箱がある。

フランの男たちは、オモチャ箱持参で都に来たのだろうか。

それに、『スタファ兄さん』とは。

彼が異論を一切挟まないとこらを見ると、その呼び方には同意しているのだろう。

二人の間には、一切色氣などないのだと それを、周囲に知らしめるような呼び方だった。

彼が昨日言つたことは、やはり揺らいでいないのか。

「兄上には、やたらと待ち時間があるので、暇つぶしです。勿論、一度勝負が始まつたら、どつちも本氣ですが」

彼女の視線が、箱に釘付けになつていて、ことに気づいたのか、スタッフはどうぞと道を開ける。

「どつちが勝つんですか？」

彼の言葉に反応したのは、妹だ。

結末が気になつて気になつて仕方のない、好奇心に溢れる黒い瞳。

それに、つい微笑みが溢れてしまう。

「ふふ……どちらなのでしょうね」

ちらりとスタッフに視線を投げ、それからウィニーの横に腰かける。

そして、姉妹二人でにこにこと彼を見上げるのだ。

「6：4で兄上が勝ちますよ……これで満足いただけましたか？」

白状させられる真実に、彼は苦そうな表情だ。

嘘をついても、さしたる罪もない質問だったといふのに、彼は偽らなかつた。

「やっぱり公爵のおじ様の方が、お強いのね」

天真爛漫に、妹がスタッフに追い打ちをかける。

もはや、彼も子どもではないのだ。

「このような遊戯で、大人に遅れを取ることはほとんどないだろ。」
といふことは、あくまでフラの公爵の方が実力は上ということだ。

そんな残酷な現実を、ウイニーはざくざくと刺したのである。

「ダイスだけは、私が強い……運がないわけではない」

さすがに面白くないのか、スタッフは言い返してきた。

運。

言葉に、レイシェスは口元をおさえれる。

笑い声が、出そうになつたのだ。

弱い言い訳なのは、彼も分かっているのだろう。

スタッフは、不本意そうに向かいのソファに腰かけながら、箱に手を突っ込んだ。

その手からすると、とても小さく見える田と茶のダイスが一つ取
り出された。

白い方を、ウイーーに渡す。

「同時に投げて、大きい方が勝ち。分かりやすい運の勝負だろ?」

妹に考える暇を取れない速さで、説明が終わるや否も「せーの」と手を振り出す。

「えつ……」

慌てながらも、ウイーーも真似てダイスをテーブルに転がした。

「……いまのナシです」

妹が、悔しそうに唸る。

彼女の出した田は 1。

何がどうあつても、勝てない数字だった。

「勝負は勝負だ、ウイーーの負け」

5を出した男は、1の白いダイスを持ち上げ、今度はレイシェスへと差し出す。

勝負を、とこづいたり。

自分の指の白さとは、また違つ白。

軽く、それを指の中で回してみる。

「こきまじょうか……セーの」

性急な掛け声は、レイシエスを慌てさせる。

さつきの妹の気持ちがよく分かる一瞬を駆け抜けながら、彼女はダイスを放つた。

からからと、テーブルの上で転がる六つの顔。

そのダイスが、近くで止まったスタッフの茶のダイスにぶつかり、ようやく止まった。

「あー」

ウイニーが、驚きの声をあげる。

出た四は 6。

最高の数字だ。

だが。

「引き分けですね

レイシエスを見つめながら、彼のダイスもまた6の四を上に向けていたのだった。

「動いてきたぞ」

昼になり、一度部屋に戻ったスタッフに、兄が一枚の触れ書きを差し出す。

明日の夜の、晩餐会についてだ。

それが、どうしたのだろうか。

謁見会の晩餐会は、一回行われることになつてゐる。

ひとつは、謁見会の前。

毎回お馴染みの、それではないのか。

「家族も同席されだし、だそうだ」

たつた一文付け足されたその部分を、兄が読み上げる。

スタッフにとって、それは小さな違和感に過ぎなかつた。

しかし、兄にとっては大きな違和感なのだろう。

「前回までは、公爵の妻か後継ぎが同席出来る程度だつた…」

わざわざ、こんな但し書きは書かれていなかつたところなのだ。

「謁見会の前の晩餐会は…王太子殿下主催だったな」

スタッフは、思考を組み立てた。

王は、謁見会まで姿は現さない。

それまでは、挨拶から晩餐会の取り仕切りまで、王太子の管轄だつたはず。

といふことは。

「まさかとは思ひけど…赤毛の娘をあぶり出すために、こんなことを？」

カルダは、しきりと首を傾げている。

その様子は、スタッフにとつて少し滑稽に思えた。

兄貴分として、ウイニーの味方につくと決めたら、突然身内の顔
眞目が出たのか、彼女がとても可愛らしく見える。

あの奔放なところでさえ、赤毛をかいぐりかいぐりして可愛がりたいほどだ。

「失礼だな、兄上は。ウイニーに、一田で恋に落ちたとは考えないのか？」

だから、はつきり言つてやる。

可愛いあの娘なら、王太子に一田ぼれられる価値はあるのだ、と。

「うう……」

突きつけられた言葉に、一瞬兄は息を呑んだ。

「信じられないな、兄上は。ウイニーが、今の様子を見たらどれほど傷つくだろう……あんなに兄上を信頼しているところの」「

珍しくスタッフは、兄に向けて置みかけた。

普通、なかなかしゃべりで勝つことの出来ない相手だが、ウイニーの事への指摘は相当痛いところを突かれたのだろう。

「ウイニーが可愛いことは、私だって分かっている。ただ、王太子の趣味ではないだろうと……」

言葉は、弟のじつと見つめる眼力にかき消された。

「言い訳は、男らしくないな……」

そして　観念したようだ。

「すまない、ウイニー」

そして、彼女たちの部屋のある方角を向いて、膝をついて懺悔を始めた。

兄もフラの男ならば、女性に蔑まれることなど、ひとつもなくなっちゃうことだろう。

「…………」

そんな兄が、えらく長く黙り込んでいたため、怪訝にそつちを見ると、祈りのために組んだ手をそのままに、虚空を見ているではないか。

何があるのかと、スタッフも真似てみたが、その先には天井とうか壁というか、そんなどうでもいいものしか見当たらない。

「そう……か」

だが、兄には何か見えたのではないだろうか。

まるで、神から啓示が降りてきたかのように、田に強い光が宿つたのだ。

「そうだ……その手があった！」

兄は、すくっと立ちあがり、スタッフの方を振り返る。

「昼食後、ロアアールの部屋へ訪問するぞ。触れを出せ」

のじのじと、兄につっこロアアールの部屋へ来たのはいいが。

スタッフは、いまだに何の説明も受けてはおりず、ただ後ろにくつづいているしか出来なかつた。

「わざわざ、公爵までお越しいただきありがとうございます」

美しいレイシェスが、一人を出迎える。

その斜め後方で、赤毛の妹分も笑顔で立っていた。

おそらく、兄が思いついたのは　　そのウイニーのことだらう。

前後の話の流れから、スタッフはそう推測していた。

席を勧められ、向かい合わせで姉妹と兄弟が向かい合つ。

昨日と同じ対面のように見えて、そうではない。

「突然、お邪魔してすまないね……大事な話があつたものだから」

切り出しが、穏やかな公爵笑顔。

兄弟一人の時はざつぐばらんだが、公爵として向かい合つ相手には、一枚皮をかぶるのだ。

時々、鼻につくほどもつたいぶつた言い回しをするところは、スタッフは余り好きではなかつたが。

「大事なお話……ですか」

笑顔の兄に対して、レイシェスは慎重な受け答えだった。

ロアールを代表して来ているだけに、多少心配そうにも感じる。

あんまり、回りくどい言い方はするなよ。

思慮深い彼女を、兄の言葉が惑わすのではないかと思い、軽く睨んでみるが、こいつに視線一つ投げてよこさない。

「そつ…… ウィーーの結婚について、なんだが」

言葉は、意外にシンプルだった。

更に、スタッフの予想通りだった。

瞬間、ウィーーの腰が一瞬ソファから浮きかけ慌てて戻る。

反動で、隣のレイシェスも軽く揺らされた。

その揺れが、完全におさまっていない中。

「ウイーーが望むのなら…… フラを結婚相手に選んでもらえないだ
るつか」

兄は、微笑みながら言った。

「……

スタッフは、無言で親戚検索をいちからやりなおし始める。

この場で、自分が言つべき言葉などありはしない。

だが、兄が答えを出してしまつ前に、自分なりの解答にたどりつ

いておきたかったのだ。

なのに。

ちらりと、レイシェスがスタッフの方を見た。

まるで、自分がウイニーの結婚相手なのでは そんな怪訝の瞳

で。

そうじゃない！

誤解を即座に解きたい心をぐつと押さえる。

ウイニーは、驚きで目をまんまるに見開いていた。

彼女は、もはやフランの嫁入りはあきらめていだらう。

なのに、再び兄はその根本をひっくり返したのだ。

この場にいる、兄以外の三人の心は、いま大きく揺れている。

もし、くだらない答えを口にしようものなら、この三人を失望させることになるのを肝に銘じて欲しい。

レイシェスの視線に、軽く首を横に振った後、横目で兄を見ると。

優しい微笑みの目を。

ウイニーに向けて。

「うわ言つた。

「ウイーー……私の正妃になってくれないかい？」

部屋の空氣と三人は、兄の言葉に完全に固まつてしまつた。

「え、え、え、エエエエエ、エエエエエー？」と…？

ウィニーは、石膏像のようになっていた。

脇過ぎ。

突然、彼女の人生は足元からひっくり返っていたのだ。

ウィニーの結婚先として提示されたのは、公爵自身の正妃。

「過去、大伯母がロアールの公爵の正妃として嫁いだことを考えると、フランの公爵の正妃が、一番ふさわしい場所だと思ったのだよ」

フランの公爵は、穏やかに言葉を続ける。

どうしてこんな簡単なことを、すぐに思いつかなかつたのだろう
そんな晴れやかな口調で。

まさか公爵の正妃などという、最上の地位を用意されるなんて想像もしていなかつたウィニーは、すぐに考え始めることが出来なかつた。

それは、他の一人も同じだったのかもしれない。

姉は、ようやく考え込むような表情で、視線をやや下に落としていたし、スタッフは逆に天井の方を見上げていた。

そんな中、最初に口を開いたのは、スタファだった。

「義姉上が亡くなつて四年……喪はとつぐにあけているし、確かに兄上がいつまでも新たな正妃を娶らないでいるのは、時々問題にはなつていたけど……」

フラの内情をよく分かつてゐる彼は、ゆっくりと自分の言葉を噛みしめるように言葉を吐く。

義姉上。

新たな正妃。

それらの言葉は、ウイニーをドキリさせた。

そう、フラの公爵は初婚ではない。

昔、愛していた人がいて、その人が亡くなつたのだ。

どんな人か、彼女が知つてゐるはずはない。

15歳の大人になりきつていらない頭では、まだその辺りの複雑なことを上手に消化出来そうになかった。

だが。

公爵の誠実な気持ちは、きちんと伝わってきて、少しずつウイニーを嬉しくさせていく。

「どうか分からぬところに嫁入りさせるくらになら、公爵自身がもうつてくれると言つてくれたのだから。

だが、自分が公爵夫人に相応しいかと言われると、真反対だとしか答えようがない。

ロアールのおまけがフラン西妃では、かの領民たちの期待にこたえられず、がっかりさせてしまうかもしれない。

喜びと困惑の入り乱れるウイニーは、そつと横の姉を見た。

どう思つてゐるのか、分からなかつたのだ。

そうすると、レイシエスもまた自分の方をちらりと見るではないか。

ウイニーの心を、まるで伺ひつけた。

そして、姉は薄く、寂しげな笑みを浮かべた。

どういう表情であつても、本当に美しい姉は そのまままつすぐと領主の方へと向き直るのだ。

「お心遣い、本当にありがとうございます」

どんな回答であろうとも、切り出しが儀礼的なもの。

レイシエスが、何を言おうとしているのか分からぬまま、ただウイニーはさきどきと鼓動を高鳴らせた。

「もし、このお話を本気でおっしゃつて下さるのでしたら、我が父に出来るだけ速く、そして非常に強い希望の意思を、お送りいただかねばなりません」

姉の答えは。

肯定的なものだった。

じきつと、ウイーーの小さな胸が跳ねる。

「戯れで、こんな大事なことなど言わなによ。 そうだね……はとこ殿の言つ通り、要請は速く強くなければならぬだろ?」

言葉の最初は、ウイーーを向いて。

言葉の終わりは、レイシロスの方へ。

赤毛のはねつかえりに、フリの公爵は『本気だよ』と語ってくれているのだ。

その感情は、物語の中のような『恋』ではなくこれら、ウイーーにも分かる。

でも、『好意』は本当にたっぷりと詰まっていた。

姉を見ていると分かるが、公爵の結婚は恋愛だけでは片付かない難しさがある。

必ず、どこか不自由さがつきまとつものだ。

そんな立場の中、『好意』でウイニーを選んでくれたといつゝことは、本当は物凄いことなのだろう。

姉や公爵の言つ『速く強く』といつのは、父の容体に関係しているに違いない。

父が亡くなつてしまえば、母が侯爵家の実権を握りかねない。

レイシェスは、母には頭が上がらず、押し切られてしまつ可能性があるからだ。

そうなれば、この話を蹴つてしまつ可能性がある。

それを、姉は危惧しているのだ。

父がまだ判断出来る内に、そして既にある不穏な噂が本当になってしまふ前に話を進めるには、もはや多くの時間は残されていないのだ。

自分が、正妃に相応しい人間でないことは、分かつてゐる。

一番田の正妃であることも、言葉としては分かつてゐる。

だが。

たつたいま。

一瞬だけ現れた、公爵の助け船に飛び乗らなければ、永遠に次の機会などないのかもしれないのだ。

「ウイーーは、ソシなおじさんでは嫌かもしれないが、……どうだら
うへ。」

物凄い速度で、自分の人生を賭けた思考を繰り広げていた彼女は、
ふつと微笑みながらソーシャルを見た公爵の言葉に、すぐにには気づけな
かった。

「えつ、あつ、セ、そんなことは……ありません。公爵のおじ様は
……あつ……」

しどろもどろになつて答えていた内に、顔が真つ赤になる。

自分が、これまで彼のことと何と呼んでいたのか、思いだしたの
だ。

『公爵のおじ様』

ソーシャルの言葉は、さつげなく彼を傷つけっていたのだらつか。

確かに、まだ三十歳にもなつていない人なのに。

「公爵のお……いえ、フランの公爵様は……とてもお若いです……」

今更、ジの口がそんなことを言つのだらつか。

ウイーーは、必死に自分の言葉をフォローしようとした。

「いいんだよ……確かに、十三も離れていたら『おじ様』と呼ばれ
ても仕方がない」

笑われて、ますます顔が熱くなる。

「では……私の妻になつていただけるだらうか？ 私の可愛いはと」
「殿……いや、ウイニー嬢」

その笑いを緩やかにおさめながら、公爵は自分の方をはつきりと見つめてきた。

彼のなでつけた赤い髪が、一筋乱れてその額へ落ちる。

自分と同じ、言ひこと聞きにくい髪。

そんな髪を持った人から、まっすぐに求婚されているのだ。

船が。

来る。

海とは無縁の、船とは無縁のロアアールのウイニーの前に、すう
つと流れてくる一艘の船。

きつと。

もう。

一度と。

来ない。

「よろしく、お願い致します」

船に飛び乗つた。

「ほんことになると……思つてもみませんでした」

レイシエスは、そう切り出した。

側に立るのは、スタッフ。

彼は、まるで昨日と同じよつて、レイシエスを庭へと連れ出してくれたのだ。

ずっと詰めていた息を、その開放的な空間で深く吐き出す。

妹の、人生を決める一瞬だったのだ。

何一つ簡単な選択など、なかつた。

遠いフラン地の、年の離れた公爵。

更に、前の正妃が亡くなつた後の、新たな正妃として入るのだ。

複雑で、非常に難しい立場である。

苦労しないはずなどない。

遠すぎて、助けの手も差し伸べにくい。

何かあつた時、妹はかの国で孤独な存在になつてしまいはしない
か。

それらを全部考えた上で　なお、ロアアールにいるよりは、ウイニーのためではないかと考えたのだ。

だが、同時に。

妹を、手元から失うのである。

ウイニーは、レイシェスの心の支えだ。

彼女の明るさや強さに、どれほど助けられただろう。

そんな大事な妹が、滅多に会えないほど遠くに行ってしまう」とを、手放しで喜べるほど、レイシェスは大人ではなかつた。

そして、憂鬱も付きまとつ。

ウイニーが嫁いだ後は、母と二人暮らしになる。

どれほど、それが息苦しいことか。

妹の結婚にまつわることを考えると、上手に微笑めないので。

「不安ですか？」

スタッフが差しだした腕を、レイシェスはそつと取つた。

「そうですね……私が、もうすこしふりした大人だったらと、いつも思います」

判断とこゝもののは、とても難しい。

どんな結末がやつてくる可能性があるのか、いくつも想定をしなければならない。

不幸な可能性を出来るだけ回避できるよう、あらゆる対策を打たねばならない。

そして。

どんな結末になろうとも、それを受け入れ、対処し 責任を取らなければならない。

それが。

公爵になる、レイシエスの一番大事な仕事なのだ。

「支えが必要でしたら……いつでも寄りかかって下さい」

スタッフの腕にかけた手に、すっと手が重ねられた。

あつ。

挨拶とは違う体温に、彼女はどきつとじてしまう。

まさか、ね。

一瞬、自惚れたことを思いかけて、レイシエスは困った笑みになってしまった。

彼は、フランだ。

公爵の手紙でも挨拶でも、これまでの会話でも、かの国の男性が女性に情熱的なのはよく分かる。

優しさや親しみのこもった多くの言葉を並べるのは、じぶ当たり前ではないか。

「困らせてしましたか？」

「うらかな春の日差しに、髪は明るく赤い光を放つのに、黒い瞳は憂いを揺らした。

「いいえ……お心遣い、ありがとうございます」

曖昧な笑みに変えて、レイシェスは花を見るように視線を動かした。

本当は、ちゃんと見てはいないのだが。

スタッフは、好ましい男だ。

ウイニーを実の妹のように可愛がり、レイシェスに対して紳士な態度で接してくれる。

だが、さつき胸を掠めた自惚れが、たとえ事実であつたとしても、一人に未来はないだろ？

一つ目は、母がフランを嫌つてること。

ウイニーをそこへ嫁がせる分は、遠くへ追いやれるという理由で許されるかもしれないが、スタファを喜んで迎えることは想像出来ない。

一つ目は、ウイニーとフラーの公爵の婚姻が成立した場合、ロアールとフラーの政治的結びつきは完了したこととなる。

これは、周囲の目から、とこゝう意味だ。

それなのに、更にフラーからスタファをレイシエスの夫として迎え入れた場合、他の公爵や王からあらぬ疑いをかけられてしまつかもしれない。

特定の公爵同士の、結びつきが強くなりすぎると。

ただでさえ、王家に側室を送らないロアールだ。

謀反の嫌疑でもかけられては、非常に厄介なことになる。

それらを考えると、スタファを相手として選ぶのは、非常に難しい。

特に、あの王太子がその内に王となり、レイシエスは長く付き合わねばならないのだ。

迂闊な穴でも見せよつものならば、無慈悲に突き刺されるだろつ。

「貴女の考えていることを、当ててみましょつか？」

視線を花に逃がしたレイシエスに、スタファは不思議なことを言

つた。

じきつとする。

自分の婚姻さえも、政治的な駆け引きの材料など知られたら、わざややらしくないと思つだらう。

だが。

こんなことを考へてゐるなんて、知られるはずがないのだ。

なのに、不安は拭いきれず、おそらくそんな目で彼を見上げてしまつた。

「『ウイニー』が、フリに行つてしまつたら寂しい」、ピコッピコ
でしょうか?」

優しいけれども、力強い瞳。

そして、その唇は 少しだけからかうつな響き。

「まあ……当たりです」

少し前に、確かにそれは思つたことだつた。

本心が知られずに済んだ」と平安堵しながら、レイシエスは肩の力を抜いて笑つてしまつた。

なのに。

「美しいも賢きロア・アールの姫……」

その強い瞳は。

レイシェスの青い瞳を射ぬいて、止まる。

「ロア・アールの冷たい冬から、貴女をお守りする炎として、私を側に置いてはいただけませんか？」

美しい言葉と、情熱的な声。

本当に雪さえ溶けそうな熱い聲音と瞳に、一瞬めまいを覚えた。

ついやつとき、駄目だと思つたばかりなのに、スタッフはその禁断の地へ足を踏み入れてしまつたのだ。

フラン太陽に照らされ、自分の肌が溶けてしまいそうな錯覚の中。

「それは……とても難しいと思われます」

これ以上の障壁を越すには、彼女は若く、それほど強くはないのだ。

憂鬱に視線を伏せるレイシェスに、しかしスタッフはふつと笑つた。

はつと顔を上げると。

前よりも、燃え上がった目で自分を見ている。

「それは……私自身のことは、好みしく思つて下さつてはいるところ
意味に取つてもよろしいですね」

障害を前に、何一つ怯む気配もない。

それどころか、なおさら情熱の炎を燃やすよつた男だった。

これが、暑い国の血なのね。

想像も出来なかつた反応に。

困りながらも、レイショスの心は 摺れてしまつた。

なりたじこととなる」と

晩餐会ー。

ウイニーは、皿をキラキラ輝かせてその皿葉を歯みしめた。

そんな素晴らしいものにて、自分が参加出来るとは思つてもみなかつたのだ。

王太子主催のそれは、今回はいつもより華やかに行われるといふことで、公爵家の家族の参加も許されたといつのだ。

絵本の中でしか知らない舞踏会が、頭の中に溢れ出す。

しかも。

エスコートつきー。

フランの公爵が、ウイニーと踊ってくれるとこいつのだ。

憧れと幸せな気分で、いまの彼女は本当に胸がいっぱいだった。

公爵のおじさまのお嫁さん。

複雑な事情はあるが、ウイニーの前にそんな可愛らしい道が作られたのだ。

あとは、父がそれに頷きさえしてくれれば、彼女のフランへの嫁入りが決まるのである。

いつもは、祖母のドレスを着るのが好きだが、晩餐会は公爵から贈られたドレスを身につけるつもりだった。

きっと、彼はとても喜んでほめてくれるだろう。

「つきつせと、ウイニーは晩餐会の相談のため、姉の部屋へ訪れた。

「……はあ

だが。

レイシェスは、ソファで物憂げにため息をついている。

そんな表情すら美しい。

「姉さん、どうしたの？」

変な感心をしながらも、ウイニーは問いかけた。

ちらりと視線で妹を見るが、返事は深いため息。

「心配事？」

「いいえ、たいしたことではないわ」

薄く微笑まれて、少し心が痛む。

自分に、明るい道が見えたせいたづか。

一人、あの母と暮らさなければならぬ姉が、不憫に見えるのだ。

現金な性格だと、自分でも思つ。

人の不幸の心配が、じにきてようやくウイニーも出来るようになつたのだから。

「姉さんは……何かやりたいことはある?」

だから、つい自分の感覚で姉に聞いてしまつた。

ウイニーは、ただロアアルから離れて幸せになりたかったのだ。

それ以外の夢や希望は、何ひとつ持つていなかつた。

すると、ちぢつとレイシエスは自分を見る。

「私は、公爵になるわ」

その言葉は、姉と自分の差を大きく見せつけるだけだつた。

レイシエスは、『夢』や『希望』など口にしない。

公爵に『なる』という、確固たる意志。

『なりたい』ではないのだ。

思考の根元から、姉とは違つのだとほつきつと思い知らされた。

同時に。

「ウイニーには、責任など何もないこと」と云つべ。

それが、どこか寂しくも思えた。

「姉さん……」

しょんぼりと、姉の名を呼ぶ。

すると、美しくも優しいレイシスは、難しい顔を苦笑へと変えながら、穏やかな瞳を向けてくれる。

「心配しなくていいのよ……難しこことを考えてはいけないけど、苦しいことを考えてくるわけではないから」

不思議な、言葉だった。

難しいが、苦くはない。

つらこことではないのだと、姉は言つてゐるのだろうか。

「晩餐会の準備で来たのよね？ アクセサリーを選びましょっか」

ウイニーは、奇妙な顔をしていたのだろう。

姉が、話を変えるよひにソファから立ち上がった。

ほとんどアクセサリー類を持ちこんでいない彼女のために、貸してくれるといつ。

わあつと、ウイニーの心は晴れやかになった。

これまでの微妙な気持ちも忘れて、姉の後ろについていく。

宝石箱の中は、本当にキラキラしていて、目の保養だった。

公爵の娘とは言え、華美さを良しとしないロアアルの人間のため、体面を守る程度のアクセサリーしか持っていない。

この宝石箱の中身すら、母から持たされたもので、姉のものでさえないのでだ。

そんな侯爵家の性質は、領民にも好ましく見られているので、姉が公爵を継いだとしても変わらないだろう。

「姉さんは、スタファ兄さんがエスコートしてくれるのよね」

ネックレスや耳飾りに触れさせてもらひながら、浮かれた口調でウイニーは言った。

それはもう、本当に軽な話しおつもりだった。

なのに、姉の指は止まり　ため息が落ちる。

自分がこの部屋に来た時と、まったく変わらない表情とため息だつた。

まさか。

「スタファ兄さんに……何か言われたの？」

ウイニーは、彼の望みを知っている。

姉のため息の原因がスタッフだとするのならば、何か姉を悩ませるようなことを言つたのではないか。

そう、素直に考えたのだ。

「少し……ね」

気恥ずかしげな表情は、姉を年相応に見せる。

こんな子供っぽいウイニーと、たったひとつしか変わらない年なのだ。

本当であれば、もっと感情的であってもおかしくない年頃。

それを抑えるクセを、あの母の前でずっとしてきただけ。

姉の感情は、大きくは動かない。

それでも、このわずかな恥ずかしさを、スタッフは引っこ出したのだ。

結構、健闘しているように思えた。

「スタッフ兄さん……いい人だよ」

ウイニーは、思つてゐることを正直に言つた。

最初は、意地悪な人かと思った。

でも、それはウイニーを貶めようと書いてこよつと書いた。出来の悪い妹をしつけるようなものだ。

彼の中に、ちゃんと愛情があるのだと分かつてからは、すっかり懐いてしまつたほどだ。

そんな男なら、姉を幸せに出来るのではないだらうか。

「知つてるわ」

姉の心が、少し動いている。

ウイニーの知らないところで、スタッフの方へとわずかに揺れているのが伝わってくる。

「スタッフ兄さんは……」

もつと、彼のことを持ち込もうと口を開けたら。

姉が。

じりじりを見て。

じりじりと微笑んだ。

16歳といふ年を隠してしまつた顔で。

「だから言つてるでしょ？ 難しいけど苦しくない」とだから大

丈夫よつて

やんわりとした、拒絶。

ちやんと考へているから、それ以上の口出しは無用。

もう告げられたのだ。

本当かなあ。

ウイニーは、心配だった。

反対するだらうフラン嫌いの母を考へると、レイシェスが逆らえるとは思えなかつたのだ。

何か。

強く突破する力が必要だらうと思つたが。

ウイニーは、姉に拒否されてまで進言する案を持つてはいなかつた。

文

いくつかの、書状がレイシェスの元に届く。

晩餐会の事情を聞きつけた、他公爵の身内からの、エスコートのお誘いだ。

別途招待されている、王の親族からのそれも来ていて。

彼女は、丁寧に断りの手紙を書く。

最初に誘われた、スタファとの約束を守るつもりだったのだ。

ふう。

フランの次男坊のことを思い出して、レイシェスはため息をつく。

今日は、何度も息をついただらう。

まったくあきらめる様子のない、彼の熱い瞳を思い出してしまうのだ。

フランの人間は、思い切りがいい。

妹を見て、それからフランの兄弟を見ると、それがよく分かる。

彼らは、怖くないのだろうか。

人に拒絶されたり、悪く思われたり、壁にぶつかったり足場がな

かつたり。

そんな、ごく当たり前にある障害にあたるのを、どうして恐れな
いで足を踏み出せるのか。

レイシヨスは、それが不思議でならなかつた。

手に入れようとしなければ、難しい問題は起きないところの上、
手を伸ばすのをやめようとしないスタッフア。

その手の先にいる自分。

血筋としては、申し分ない相手だ。

そう考えかけて、彼女は苦笑した。

レーハーの考え方が、自分の基本なのだと。

公爵になる自分。

この自分の身は、ロアアールという領地に捧げられるものなのだ。

自分の私欲のために、使つてはならない身。

その感覚が、きっと血の中にも流れているに違いない。

ウイニーが、フラの血が濃く出た娘ならば、レイシヨスはロアア
ールの血が濃くでたのだろう。

そんな公的な身である彼女は、自分の中の私心と向かい合つ羽田

になつたのだ。

その結果が　ため息。

そんなため息にかぶさるよう、扉がノックされる。

侍女が応対に出た後、レイシェスの方へ書状を持ってきた。

また、晩餐会のエスコートの件だらうか。

受け取つたそれを見たら、胸に微かな疼きが生まれる。

スタッフからだつた。

書きかけの返事の手を止めて、レイシェスは封を切る。

中身は。

まあ、いわゆるひとつ　恋文だつた。

彼女の美しさと聰明さをたたえる美辞麗句のあいさつに始まり、言葉で語られるのとはまた違う思いが文字にしたためてある。

一見、恋愛のみに偏つた軽薄な手紙に感じるが、スタッフはいつも書いていた。

『貴女と手紙を送りあえる関係になりたい』のだと。

手紙。

それは、レイシエスの心を震わせる言葉だ。

フランの公爵と始めたそれは、彼女に外の世界を見せてくれた。

きっとスタッフは、彼なりでは手紙を書いてくれるのではないかと思つたのである。

正直に言えば、美しい言葉の羅列よりも、そちらの手紙の方に興味があつた。

男と女だから、恋を覚えたり惹かれたりするといつ、古代からの感覚を否定したいのではない。

それよりも、その人の性質や考え方や、根元で一番大事にしているもの。

そういうもので、人を尊敬したいのだ。

尊敬と恋が、ふたつ並ぶほどの相手であれば、保守的なレイシエスであつたとしても、重い腰を上げられるのではないか。

自分の性質をよく理解した上で、彼女はそう思つた。

書きかけの、他の人の返事を押しやり、レイシエスは新しい便せんを目の前に置いた。

愛の言葉は、書かない。

「の手紙に、彼がどう答えるのか。

彼女は、わずかな空想を巡らせながら、気がついたら長い手紙をしたためいた。

返事が、来た。

予想以上の速さで。

彼女はまだ、他の方への断りの返事を全て書き終えていなかつた
といふのに、侍女が再びスタッフから手紙を届けて来たのだ。

「まあ……」

人知れず、驚きの声をあげてしまった。

レイシエスからの手紙を読んで、すぐに返事を書き始めたのでな
ければ、これほど速くはないだろう。

封を切ると、また違う美辞麗句の文句から始まっていた。

それはもはや、彼ら一族の基本であるじじく、どんな手紙であつ
ても変わらないのだろう。

だが、そこから先は、速く力強いペンの流れと共に言葉が綴られ
ている。

スタッフは、これまで公爵の補佐の仕事をしてきたようだ。

資料もなしに書き綴られたであつて、秩序正しい仕事の話は、彼が有能であることを垣間見させてくれた。

とどめが。

『私は、公爵の補佐が得意なのです』、といつ文章。

これには、レイシエスもふつと笑いを洩らしてしまった。

一見、ただの自信のあらわれのよう見えるが、まるでレイシエスに自分を売り込んでいるようと思えたのだ。

ロアールの公爵の補佐も、きつと得意です、と。

言外にある、彼の小気味よい言葉は、心の中に余裕を思われる。

精一杯支えますよ、ではなく、貴女を支えてなお、私にはまだ余裕がありますよ。

だから、何の心配もありませんと、たつた一言の中に込められている気がした。

それが、彼の細めた田と、ゆづくつした声で聞こえてくるようと思えるのが不思議だ。

レイシエスの中に刻まれた言葉。

つい、くすくすと思いつき出し笑いをしてしまったのは、これまでに

はない自分の中の感情。

彼の余裕の言葉を聞くと。

何だうつ。

レイシェスにも、少しだけ余裕が生まれてくる気がしたのだ。

「不思議な方ね」

レイシェスは、微笑みを消しきれないまま、新しい便せんを手に取つた。

他の方への返事は　もう少し遅れそうだった。

晩餐会の始まり

「……！」

出来上がりでござりますと、侍女たちがウイニーの周囲から下がつていいく。

ようやく、姿見で自分の全身を眺めながら、彼女は驚き そして喜んだ。

最新の、しかし派手さより可愛らしさを中心とした、ふっくらとしたデザインのドレス。

暖かい緑と、清楚な白の糸が入り混じるそれは、ウイニーの赤く強い髪を鮮やかに印象付けてくれる。

綺麗にアップされた髪は、侍女たちの頑張りの賜物だ。

さわるとパキパキと音がするくらいに固められているのだが、ふんわりと見えるようになつている。

気合の入った化粧をしたのは、これが初めてかもしれない。

これまでウイニーは、ほとんどロアアルの公式の行事に出たことはなかったのだ。

だから、おしゃれで白くなつた肌や、まぶたの上の色や、増えて長くなつたまつ毛や、艶やかに光る朱の口紅で彩られた自分を、食い入るように見つめてしまつた。

「じゅぶじゅぶじゅ。」

白い手袋の手で、鏡に触れる。

姉に、美貌で遠く及ばないのは分かつていた。

だが、こつもの自分よりも、一段階くらい可愛くなつていねと思
う。

それくらいの白惚れは、許されるのではないだろうか。

フランの公爵様は、何と言つだらう。

そう考へると、なむすゞ心臓が物凄い音を立てるのだった。

扉が、開く。

赤毛の兄弟が、ロアアルの姉妹を迎えていてくれたのだ。

気高い美しさの姉の、少し後に控えていても、ウイニーの心は
躍り回っている。

「ほう……」

公爵の足が止まる。

驚きの由は ウィニーに注がれていた。

えへ。

それが、嬉しかった。

姉が美しいのは、当たり前のことだ。

もう、彼らはそれを由の当たりにして知っている。

だが。

ウイニーが気合を入れたのを見たのは、彼女自身がそうであるよう、初めてなのだ。

目新しさに過ぎなくとも、ウイニーは素直にそれが嬉しかった。

「化けたな……ひつ」

スタッフの驚きの弦は、公爵の肘鉄で閉ざされた。

「余りの美しさに、ほつととなってしまった……今は、可愛い私はどこ殿」

「本日は、どうぞよろしくお願い致します」

公爵と姉が挨拶を交わす。

そんな決まりごとの後に、彼はウイニーの前に立ってくれるのだ。

「ほ… 本田は……」

じきじきしきして、つまく舌が動かない。

「赤い花束のよひに美しいよ、ウイニー。エスコート出来る私は、
幸せ者だ」

手を。

取られると思つたのに。

ウイニーに顔が近付いてきたかと思うと、頬に軽い口づけをして
くれた。

カ、カアアアア。

もつと近しい挨拶のように思えて、彼女は茹であがつてしまつ。

これもきっと、ドレスと化粧の魔法なのだ。

赤い花束。

緑のドレスに赤い髪。

そう呼べなくもないが、そんな言葉が即興でスラスラ出でてくるのは、やっぱり大人だからだろうか。

「フランの澄んだ海より美しいですね……」

「本当に小さな青なのでしょうか、そちらの海は」

隣で、スタッフと姉が挨拶を交わしていく。

彼は、手袋の手に挨拶をしていた。

だが、その手は熱い色を帯びている。

ウイニーには、『化けたな』扱いだったところの上。

「驚いたな……ちゃんとレディに見えるね」

続いてスタッフは、彼女の前にやつてくる。

彼の言葉は、歯に衣着せない分、本当のひとなのだ。

本命以外には、極端なところがあるのが、たまにきずだが。

「スタッフさんも、紳士っぽく見えるわ」

お互に、苦笑いを浮かべながらのこ挨拶となつた。

わあ。

「よしよ、晩餐会トビゴーだ。

ウイニーは、公爵にエスコートをしながら、口から飛び出しそうな自分の心臓を、じくんと飲み下したのだった。

光。

ホールは、目も眩まんばかりの光に溢れていた。

夜とは思えない。

数えきれないほどの蠟燭のともされたシャンデリアが、炎の灯りを上から照らしているだけではない。

纖細な飾り硝子の覆いのかけられた燭台が、美しいインテリアとなつて壁やテーブルで光を放っているのだ。

ちかちかとする田を、ウイニーはまばたきをして取り戻した。

華やかな王都に来たのは分かつてはいたが、その華やかさの全てがここに詰まっているように思える。

更に、宝飾品やドレスの飾りが、光に反射してキラキラしている。

目が落ち着かず、どこから何を見たらいいか分からない。

そこまで来て、ようやくホールに美しい楽隊の音楽が流れていることに気づいた。

「大丈夫かな？」

手を取つたまま固まっていたウイニーに、公爵が優しく問い合わせ

てくれる。

「ぐーぐーと頷いて、彼女はよつやく足を踏み出した。

今日の招待は、5公爵と王族。

そんなに多くないと思っていたのだが、その家族までとなると結構な人数になるようだ。

「王太子殿下が出てこられたまでは、ダンスもないからね……おしゃべりでもしていよつか」

公爵の言つ通り、あちこちでは挨拶だの雑談だのが始まっていた。

その視線の多くは、一度は必ず姉のレイシエスに注がれる。

それは、決して短い時間ではない。

隣のスタッフアは、そんな視線をものともせずに、姉と語り合つていた。

あ、笑った。

公式の場で、姉がくすくすと微笑んでいる。

楽しそうだなあ。

あつ、誰か来た。

そんな二人に、若い男が近づいている。

スタッフの目が、一瞬怖くなつた気がした。

「大丈夫だよ……スタッフは、ああ見えて抜け目がないからね」とする。

全部、公爵に見られていたようだ。

「姉さんとスタッフ兄さんは、うまくいくのかな？」

そうなつたらいいなと、彼女は思った。

しかし、不安もいっぱいある。

「ま、それはあいつの頑張り次第だらう。おつと……王太子殿下のおでましだ」

一度、音楽が完全にやんだ。

まるで、それが合図だと皆が知っているように、ホールはシンと静まり返る。

続いて、ファンファーレが鳴り響き、ホールの奥にある大きな扉が開く。

黒いものが、出てきた。

馬だった。

「え？」

間抜けな声が、ウイニーの口から洩れた。

現れたのは、王太子ではなく　ただの黒馬だったのだ。

赤毛の扱い

う、馬？

ウイニーは、茫然とその光景を見ていた。

きらびやかな馬具をつけてはいるが、馬は馬である。

王太子が魔法で馬に変えられた、なんてことがない限り、あれは正真正銘の人ではないものだ。

ホールは、一瞬水を打ったかのように静まった直後、一斉にザワつき始めた。

初めての晩餐会出席のウイニーではあるが、この状況が普通ではないといふことだけは、その様子から分かった。

「何を考えてらっしゃるのか……」

隣にいるフリカの公爵さんも、畳然とそんな言葉を口にしている。

どうやら安心して驚いていようだと分かったウイニーは、彼に言葉をかけようとした。

『王太子殿下は、どうなさつたのでしょうか』でもいいし、『馬が出てくれるなんてびっくりしました』でもいい。

胸につつかえた驚きを、言葉として吐き出せればそれでよかつたのだ。

なのに、横を向こうとしたウイーーの髪の毛は、ぐこつと引つ張られて、公爵の方を向くことは出来なかつた。

「つ……。」

突然の髪の抵抗に別の驚きを抱えたまま、髪に氣をつけてゆつくり後ろを振り返ると、

男がいた。

黒髪の、冷たい目をした男。

その男の手には、ウイーーの赤毛が握られている。

赤毛の毛先が、彼の指の間から跳ね出しているのだ。

それを見た瞬間の彼女の絶望感は、とても言葉に出来ないものだつた。

毛先があるということは、既に結われた部分から引き抜き出されているということだ。

綺麗に上げるのに、どれほど侍女たちが苦労したと思つてゐるのか。

こまの自分の髪は、ひどくみつともない状況にされてゐることだらう。

初めての晩餐会だということ。

「な……何するんですか！」

ウイーーは、男に囁みついた。

「の男の顔は、覚えてる。

一度だけ、花咲く庭で会った失礼な男だ。

田舎者だとされ、ドレスを時代遅れだと馬鹿にされたのである。

ウイーーは、思わず言ひ返して逃げた。

あれは、非公式な場だった。

だが、UJIは公式な場所で。

そんなところで、正装した女性の髪を弓つ張りめたりせりへりせりへりするなんて、どんな仕返しなのか。

小さな男の子のようではないか。

せ、せっかくの、せっかくの晩餐会が。

綺麗なドレスと髪で、公爵にも褒めてもらひたウイーーは幸せだった。

その幸せめ、毛先ひとつで急転直下だ。

「……やつぱり赤毛だな

髪を離さないまま、男はウイニーを見ずにフランの公爵を見ていた。

いや、睨んでいたと言つた方がいいだらう。

そうだ。

ここには、公爵がいた。

こんなひどい仕打ちをする男から、きっと自分を助けてくれるに違いない。

頭をうまく動かせないまま、ウイニーは後方の助けを待つた。

だが。

そこから聞こえて来たのは。

「王太子殿下……」

という、苦しげな呼びかけだった。

おうたいし、でんか？

ウイニーは、瞬間に言葉の意味が理解出来なかつた。

大きすぎて、持て余すほどそのそれ。

本当ならば、馬が出てくるところから現れるべきだつた次代の王。

「タータイト公は、嘘をついたな

「あ」

髪が引っ張られ、その痛みでウイニーの身体も引っ張られる。

王太子の方へ。

「嘘などついておりません」

彼女は、王太子に背を抱かれるような形になり、結果的に田の前にフランの公爵を見ることとなつた。

彼は、とても不機嫌な表情でこちらを見ている。

おそらく、怒りを抑えているのだろう。

「赤毛の娘など、いないと言つただろう?」

後ろから、冷たい声が降り注ぐ。

ぞわぞわする。

「フランから連れて来ておりませんと、お答えしたはずです

周囲の人たちが、馬から王太子へと意識を移し始めていた。

ようやく、そこへいることに気づいたようだ。

それは伝染するように、次第に外側へと向かって行く。

「では、この赤毛はどうの誰だ？」

責められた形で、髪が引っ張られる。

「私の妹ですわ」

進み出て来たのは　レイショスだった。

責められた顔で、姉はウイーーの前に来てくれた。

本来であれば、母よりも身分的には怖い相手である。

なのに、来てくれた。

ウイーーは、それが嬉しかった。

髪を引っ張られた痛みとは別に、泣きたくなるほど。

「ああ……なるほど、確かにまったく似ていなーいな

「王太子殿下……女性の髪は、引っ張るためにあるものではありますせん。お離しいただけますか?」

フランの公爵が、一步足を踏み出す。

「妹の髪を直して、一度下がらせていただきたく思います

姉もまた、一步踏み出してくれた。

一人とも、ウイニーを助けようとしている。

嬉しくて嬉しくて、二人に抱きつきたくなった。

足を踏み出そうとしたが　またも、頭がついてこなく引き戻されることとなる。

「分かった……だが、私が乱した後始末だ。私が責任を持つて直させよ！」

王太子は、冷たい言葉のままウイニーを引っ張った。

ようやく髪から外された手は、彼女の腰に回っているではないか。

な、何で！？

公爵と姉からひきはがされる。

そして。

ウイニーは、ぽいつとホールから放り出された。

控えていた侍女に向かつて。

「髪を直してやれ」

と言い置くや、王太子はホールへと戻つて行つたのだ。

その理不尽な背中を、ウイニーは茫然と見ていた。

い……。

震える心と頭で、彼女はよつやか言葉を思ひ浮かべることが出来た。

目の前で、ホールの扉は開かれた。

一体、何だつていうのよー！

ウイニーだけ 追い出されてしまった。

問題だらけの王太子

ホールから出たのは、ウイニーだけだった。

王太子が戻ってきた姿を見て、レイシェスは心底ほっとしたのだ。
あのまま妹が連れ去られて、この男に無体なことをされるのではないかと恐れていたのだが、少なくともそれはないと分かった。

妹の遭遇について、問いかけようとレイシェスが動き始めた時。
ホールにいた男たちの方が、先に王太子の元へと詰めかけ、挨拶を始めるではないか。

すっかり囲まれた王太子を見て、これではとても近づけないと諦める。

だが。

「王太子なら、あそこにはいるだろう?」

王太子本人は、残酷なまでの笑みを浮かべて、顎で馬など指している。

この男の仕組んだだろ?、ひどい茶番。

ファンファーレを鳴らして入ってきた馬を自分だと言い、馬に挨拶に行けという戯れを口にするのだ。

鼻白む周囲の人間たちを試すよつて、更に畳みかけている。

フラーの公爵は、すっと動いた。

王太子本人の方ではなく　馬の方に。

「立派な馬ですか。王太子殿下の愛馬ですか？」

王太子の戯れに、フラーの公爵は乗ることもなく、笑みをえたたえた上で受け流している。

馬は馬だ。

それ以外の何物でもないのだと。

一瞬、馬の方に別の意味で動きかけた他の人間は、そんな彼の堂々とした態度に安堵したように、「いやあ、本当に立派な馬ですね」と迎合し始める。

「フン……」

面白くなさそうに、王太子は鼻を鳴らした。

彼は、瞳と顎の動きで静かなる指示を出す。

さつきまで、皆の注目を集めていた馬はホールからさげられ、楽隊が音楽を奏で始める。

「皆の者……好きなよつて楽しめ」

そんな一言を冷たく言い放つと、彼はレイシスの方へとやってくるではないか。

再び、一人で彼に立ち向かわなければならないのか。

そう思った時。

すっと、隣に進み出た男がいた。

「ウイニーの様子を見に行きましょう」

王太子に声をかけられるより速く、そう語りかけられる。

スタッフだ。

レイシェスは、ほつとした。

このまま、急いで彼の助け舟に乗れば そう思ったのだ。

だが、そこまでの時はなかった。

彼女の腕は、すでに王太子に掴まれていたのである。

「一曲、相手をしろ」

そしてレイシェスは、栄えある王太子の一曲目の舞踏相手になってしまったのだった。

こうなってしまっては、スタッフが助けるのは不可能になる。

相手は、次代の王。

公爵でさえ、ここには引かねばならない相手。

「ウイニーをお願いします」

レイシェスは、振り返つてそう伝えるので精一杯だった。
逆を言えば。

一番、このホールの中で動きやすいのはスタッフだらう。
公爵の家族という肩書きの彼は、ここにいる義務はない。
退席したとしても、誰にも咎められはしないのだ。

不機嫌そうに、しかし軽く頷く仕草をすると、スタッフは出入口の扉に向かつて歩き出した。

それにほつとした直後。

ぐるんと身体は回され、目の前に現れた王太子に、レイシェスは冷ややかな眼差しで見つめられる」ととなるのだ。

「確かに、まったく似ていらないな」

厳しい声。

「嘘など申しません」

その責めを盾で押し返すよつて、彼女は踊りのポジションを取つた。

向こうが踊るといつのを拒めないのだから、やつと終わりせて離れようと思つたのである。

誰もが注目する中、この晩餐会の主催者である王太子が、一曲目の相手に自分を選んだ。

その事実は重いものの、逆にレイシェスは周囲の人間が、こう考えるだらうと想像したのだ。

王太子の戯れ。

彼女が誰なのかなび、一瞬の間に伝わつて行く話。

次期、女公爵。

そんな肩書の人間を、いくら王太子とは言え後宮に入れることが出来ない。

ただ、美しいから選んだだけだらう、と。

後宮の寵を競う相手とならない女など、空氣と同じなのだ。

「さつきの赤毛は、タータイト公の弟だな……随分と親密ではないか」

腰に回された手に、力がこめられる。

もつと密着するように引き寄せられたが、レイシエスは一曲の辛抱と、抵抗しなかつた。

下手に逆撫でて、長いこと拘束されるのは御免だ。

「親戚ですか？」

ウイニーの髪を見れば、フカの血がロアアールに混じっているのは明らかではないか。

レイシエスは、親戚という隠れ蓑を使つた。

「親戚と言えど、ロアもそうだろう？」

「そうですね」

へぬじと回りて位置を変えながら、言葉を軽く流す。

誰とつきあおうが、この男には関係のないことだ。

人目のある環境と云ふのは、レイシエスにとっては非常に助かる。ただ、礼節を守つて下さいれば、周囲の目が自分を守ってくれるのだから。

「私が……何もしないと思つていてるだろう？」

耳元で見透かすように言われ、ぎくじとする心を抑える。

「何のことでしょう？」

素知らぬふりに、王太子は性質の悪い微笑みをたたえながら
レイシエスの身を突き放した。

踊っている真つ最中に放り出され、彼女はよろけてしまった。

慌てて彼を見上げると。

「そうだな……お前には、何もしないでいてやるわ」

一曲目のダンスの途中で相手を放棄するや、王太子はついていないレイシエスや周囲も全部置き去りにした。

そして、今度こそホールを出て行ってしまったのだ。

『お前には、何もしないでいてやるわ』

不吉な言葉が、立ちつくすレイシエスの中ではじだます。

では。

誰に。

何をすると。

いつのまにか。

馬、ではなく

くしゃくしゃの赤い髪。

それを右手でおさえ、もう片方の手でドレスを掴み上げながら、
ウイニーは通ったことのない廊下へと侍女に案内されていた。

茫然の後のみじめさが、いまの彼女を包んでいる。

何で、こんな目にあわなければならぬのか。

次期公爵であるレイシオスの妹として、目立たない程度に初めて
の晩餐会を楽しむ予定だった。

あまりダンスは上手ではないが、公爵とも踊つてもらひつゝもりだ
った。

そんな予定は、あの王太子の出現でボロボロにされてしまったの
である。

文字通り、髪はボロボロにされた。

ホールから放り出され、みつともない姿で歩くウイニーは、王宮
で働く人間たちの目にさらされる。

表情を変えずに会釈して道を開ける警備兵や侍女たちに、どんな
想像をされているのか分からぬが、みじめさに拍車をかけてくれ
るのだけは間違ひなかつた。

く、くやしい。

相手は、王太子だ。

どれほど理不尽な真似をされたとしても、ウイニーでは決して立ち向かえない相手。

ロアアールにいる間は、彼女より上の人間は身内だけだった。

母は論外だが、父や姉にこんな理不尽はされたことがない。

ロアアールから離れてみれば、他人から非道な振る舞いをされるのだと、身を持つて味わってしまった。

何の抵抗も出来ない相手。

その悔しさを、じうじて一人ぼっちで味わわされながらも、自分がロアアールという殻に少なからず守られていたのだと痛感する瞬間でもあった。

「ウイニー」

足取りも重く歩いていた彼女の背後から、駆けてくる音と声。

慌てて振り返ると、スタッフが追いついてきた。

赤毛の髪が、少し乱れている。

強硬なヘアセットにも関わらず、反乱を起こしかけているのだろう。

う。

「スタファ兄さん……姉さんは？」

心細かつたウイニーは、追つてきてもうえて本当に嬉しく思はしたが、同時にレイシェスを放ってきたのかと心配になつた。

「ああ、余り大丈夫じゃないが……彼女にお前のことを頼まれた」

険しい表情を眉間に浮かべながら、彼は低く呟く。

大丈夫じゃない。

それは、あの王太子が姉にちょっかいをかけているということだろうか。

ウイニーの表情も曇つてしまつ。

「わ、私は髪を直してもらうだけだから……姉さんについてあげてあんな理不尽の塊の男が優しく振舞うなんて、彼女にはとても思えなかつた。

いま危ないのは、姉の方ではないのか。

ウイニーは、そう思ったのである。

「心配するな。あの場には兄上もいるし、人目がありすぎて無体な真似も出来ないだろう」

そんなスタファの意見に、彼女はとても賛同出来なかつた。

「の頭こそ、無体の証拠そのものだったからだ。

だが、それ以上スタッフを追い返す言葉は、ウイナーにはなかつた。

「ひどい田にあつたな」

ぽんと背中を押して、彼が一緒に歩き始めてくれたからだ。

みじめな気分が、少しはましになつた。

スタッフは、こんな理不尽な頭の事情を知つてゐるし、同情もしてくれる。

「の恥ずかしい見た田の、半分の重みと一緒に抱えて歩いてくれるのだ。」

「兄上が来られなくて、済まなかつたな」

そして。

一番、嬉しそう葉を伝えてくれた。

本来、『のべきなのはつの公爵だと言われたも同然だつた。

スタッフは、姉についていたい心を抑えてここに来ててくれたように、公爵もまた、自分についていたい心を抑えて、姉についてくれてこるのである。

肩書きや立場で、出来ることが違つ。

そんな中で、いつして出来る限りの助けの手を差し伸べられるのは、心地よかつた。

そんな中、みづやく髪を直せる部屋に到着したのか、侍女は扉を開ける。

「外で待つていろ」

スタッフとは、やうじて扉で仕切られた。

ウイニーは、鏡の前に座らされる。

王太子の侍女たちなのだろうか、彼女らは静かに、そして出来るだけ手早く動くことを心がけているように見えた。

お湯が運ばれ、温められた布でパキパキに固められていた髪が解かれてゆく。

ウイニーには、多くの不安があった。

この、非常に性質の悪い髪を、よその侍女がつまみ出来るだらうか、と。

そんな彼女の不安は的中し、無言ながら侍女たちは苦戦しているようだった。

公爵の娘だと知つてゐるのかは分からぬが、とにかく丁寧に丁

寧に仕事をしようとする余り、ほとんど力を入れて髪を引っ張らなければならぬ。そのため、全然言ひ事を聞かないのだ。

周囲の侍女たちの間に、微妙な空気が通り過ぎた後。

救世主が登場した。

貴祿のある50歳くらいの赤毛の女性が、颯爽と登場したのである。

南長様。

そう呼ばれているので、侍女頭の一人ではないだろうか。

少しふつくらじた南長は、侍女たちを挫折させたウイニーの髪を見るや、笑いそうになり慌てて顔を元に戻す。

咳払いをしてしまかしたようだが、ウイニーはしつかりとそれを目撃した。

おそらく、何が起きたか分かった上で、おかしくてしようがなかつたのだろう。

だが、さすがは赤毛の持ち主。

櫛と整髪剤を持つや、ウイニーの髪を多少痛いほどに引っ張つて結い上げていく。

「この髪に生まれた時点で、引っ張られるのは慣れているとはいえない、なかなか豪快なやり方である。

しかし、ピンを多用し、逃げたがる髪を手早くおさめていくのは、見事としか言いようがない。

髪飾りをつけ、新しい髪型として出来上がった時、周囲の侍女たちは心底ほっと安堵のため息をついていた。

そんな、穏やかな空気を。

壊すような騒ぎが、扉の外から聞こえてくる。

「いまはまだ、仕度中です」

スタッフアの声。

切羽詰まつた彼の声に、ウイニーが何事かと振り返った時には。

扉は、開け放たれていた。

犯人は。

馬 ではなく、王太子だった。

堤防と悲劇

身分に關係なく、相手を殴り飛ばさるとするならば、スタッフは最初に間違いなく王太子に鉄拳を浴びせただろう。

残念ながら、それは許されないため、ぎりぎりと奥歯を噛みしめるしか出来ないのだが。

前回の謁見会まで、王太子はスタッフにとつて、空氣と大差なかつた。

兄が敬遠している理由も、よく分かっていなかつた。

だが今回、その理由は嫌といつほどよく理解出来た。

「この男に手をつけられると、口クな事にならない。

周囲の田など気にすることなく、王太子自らの速度で動き、そして傍若無人の限りをつくすのだ。

いまここに、この男が来たといつことは、レイシエスを放り投げて来たのだろう。

最初にウイニーを、ホールから放り出したよつこ。

まるで、猫のような興味の移り变わりは、ハタ迷惑以外の何物でもない。

本気で殴り倒すわけにもいかず、スタッフは怒りを抑え込みながら

ら、赤毛の可愛い娘を守ろうとした。

「どけ」

「いまはまだ、仕度中です」

スタッフは、わざと大きめの声を出した。

中のウイニーに、異変を伝えること。

他の人間に、王太子の方が問題のある行動を起こそうとしていること。

それらを、明白に伝えるためだ。

後で、このことが何か問題になつた時、スタッフが常識的な行動を取つたという証拠を残しておかなければならなかつた。

「それが……どうかしたか？」

だが。

そんな彼の努力など、平氣で踏みつける男がいた。

立ちはだかるスタッフを簡単に脇に押しやり、王太子は扉を開け放つ。

慌てたスタッフも、室内を見た。

髪を直しているだけなのだから、ひどい有様ではあるまいと思い

ながらも心配だったのだ。

幸い。

ウイニーは、無事に髪の直しも終えていた。

周囲に多くの侍女もいるが、王太子の登場を見るなり、すうっと頭を垂れて下がつて行く。

唯一。

赤毛の年配の侍女が、櫛を手に持ったまま表情を曇らせてこちらを見ていた。

「恐れながら、王太子殿下……まだ、全ての仕度が整つておりません」

その女性は、長く王宮に努めているのだろう。

静かに、しかしきつぱりと王太子に物を申している。

「南長、お前の持ち場はここではないはずだ……余計な口を挟まずに下がつていふ」

「王太子殿下……赤毛を知らぬ者に、赤毛を美しく結い上げることは出来ませぬ」

櫛を捧げ持ち、彼女は心底辛いことのように語るのではないか。

スタッフは、怒っていたのも忘れて笑いそうになってしまった。

南長と呼ばれた女性は、何と役者であるかと。

そして。

王太子の方もまた、他の人間にに対する態度と彼女に対しての態度は、一線を画しているように思えた。

「もう出来上がっているだの！」

「まだ、でござります」

「南長。それ以上、私の邪魔をすると……」

「こつも、申し上げておるでござりやせんか。『お好きな時に、首は差し上げます』と」

王太子と女性の間で、物凄い火花が散つた気がした。

冷たい王太子の目と、熱い南長の目。

もしここに、剣の一本でもあれば、刃傷沙汰が起きていたに違いないと思えるような緊張の一瞬。

「フン……」

王太子は、鼻を鳴らしたかと思つた。

「わやああー！」

ウイーーの。

髪を。

引っ張つた。

せつかく、綺麗に結い直されていた赤毛は、再び悲劇の有様となつたのだつた。

結局。

ウイーーの髪が綺麗に整えられるまで、更に多くの時間が必要だつた。

扉が開き、彼女は南長と共に部屋から出てくる。

「最初より、綺麗な髪になつた」

スタッフは、ウイーーの復活を励まし喜んだ。

多少元気がないながらに、彼女も笑みを浮かべる。

王太子がいないことに、何よりほっとしたように見えた。

南長に水を差され、彼はさつと出て行ってしまった。ホールにでも戻つてゐるのだらう。

「お見事ですね……南長殿」

スタッフは、ウイニーを救った女性に語りかけてみた。

彼女が何者かは、分からぬ。

その容貌と呼ばれ方からすれば、間違いなくフランの出身なのだろうし、こんなところで「長」という肩書で働いているのだから、いい身分のはずだし、親戚の可能性も高い。

「その肩書で、呼ばれない方がよろしいかと……」

ふふふと、女性は意味深に微笑む。

スタッフが、何のことか分からずにいると。

「南長は、後宮の肩書ですよ。もし、フランから『側室』が上がられることがあれば、私がお世話をすることになるのです」

ああ。

スタッフは、苦笑した。

そういう意味か、と。

何故、肩書に『南^{フラン}』があるのかと分からなかつた。

当然だ。

後宮の事など、本来表に出されることはないため、他の男が知るはずなどないのだから。

「Jの分だと、東長だの北長だの西長もあるに違いない。

各公爵家から側室をもうつかどうかも分からぬといつに、常に準備しているところが憎たらしく。

いつでも、側室をもひうことが出来るといつへ、自信の表れに思えたからだ。

ふと、スタフアは疑問にぶつかる。

「JのJで……北西長はおいでか？」

ロアアール
北西は、Jこれまで一度も王家に側室を出していなはず。

突然、領地の名前を出されて、ウイニーが驚いたようにスタフアを見上げる。

「肩書きはありますが……どなたもつこひうしゃこません」

南長は、意味深な笑みを浮かべた。

Jの傍若無人な王家でさえ、長い間諦め続けたロアアールの娘。

見た目こそ赤毛ではあるが、スタフアはウイニーの事が心配でならなかつた。

アラ猫ヒササを『えないで下さい

カルダは、放り出されたレイシエスの手を取りに向かった。

まったく、あのドラ息子は。

心の中で王太子を毒づくのは、これが初めてではない。

彼が、傍若無人に振舞えば振舞うほど、声にならない恨みつらみを積み重ねて行くことになるというのに、そんなことはこれっぽっちも気にかけていないのだ。

反乱を、起こされたいのか。

初ダンスの最中で置き去りにされたカルダのはとこは、茫然とホールの中に立ちつくしている。

周囲から寄せられる冷たい視線は、同情半分、嘲笑半分。

王太子の機嫌を損ねた、憐れな女性に向けられる視線など、そんなものなのだ。

レイシエスの手を取り、カルダはダンスの流れの中に彼女を引き戻した。

「公爵様……」

ほつとしたような、しかしまだ顔色の悪い類で、彼を見上げてくる。

「興味を失われたようで、何よりだ」

放り出されたことはよいことなのだと、レイシエスに伝えようとした。

この一瞬は、恥のように思えるかもしれないが、王太子という厄病神に離れられたことは、今後の彼女のためになるだらう。

腕に添えられた少女の手に、微かに力がこもる。

「でも……ウイニーが……」

視線は、ホールの出入り口の方を向く。

さきほど、王太子が出て行つた先だ。

ああ。

なるほど、とカルダは眉間に寄せた。

ウイニーとレイシエスにちよつかいをかけていた王太子は、結局ウイニーの方に走つたのか。

なまじ、とびきりの美しさをウイニーに求めていない分、厄介な事だった。

「スタッフがついている……手に負えない事態になれば、私を呼びに来るはずだ」

これまでの王太子の動きは、カルダが見る限り、試食の繰り返しだった。

レイシェスをつまみ食い、ウイニーをつまみ食い、そしてまたレイシェスを。それが、ある一定以上進んで、ようやくどちらを本当に食べるか決めたような。

女という生き物を、これまで好きにつまみ食つて来たのだらう。

カルダから見れば、食事の作法がなつていなし、まさに「ドーラ猫」だった。

誰も叱れない、王の庇護下の横暴な猫。

その仕打ちに誰かが怒り狂つて、いつそ反逆くらい起きればいい、と思つてゐるに違ひない。

そんな事態に発展する前に、カルダはウイニーをフラーと呼び寄せなければならなかつた。

「都にいる間に、ロアアールの公爵へ書状をお送りしよう

その時間を、少しでも短くするために、彼は動き出すことにしたのだ。

レイシェスが、ほつとしたように表情を緩める。

こうして見ると、彼女も年相応だ。

ウイニーとたつた一つしか変わらない16歳であることを、時折

忘れそうになる。

彼女もまた、カルダの愛すべきはとーの一人で。

幸せになつて欲しいと、願つてしまつ。

その幸せのかたちは、ウイーーとは大きく違つてなるだらうが。

「妹を、よろしくお願ひします」

けなげな彼女のお願いに。

「スタッフをよろしく頼むよ」

そう返すと。

「まあ……」

レイシェスは、とても困った笑みを浮かべるのだ。

困らせる程度には、彼の弟も頑張つてゐるようだつた。

王太子は、一人で戻つて來た。

ウイーーにふられたのか、随分機嫌の悪い様子で。

彼の性質を知っている人間は、近づくのを避けるところだが、娘を連れて近づく馬鹿がいる。

アール（西）の公爵だ。

家族同伴を許されたという事実を、王太子の新たな側室探しだと勘違いしたのか。

ウイニーの髪を引っ張り、レイシエスとダンスを踊つて放り出しそんな態度を見れば、勘違いしてもおかしくないだろう。

ロアアールの娘一人が無碍にされたのを見て、自分の娘ならばうまくやるとでも思ったのか。

食事の作法の悪いドラ猫の前に、エサを置くな。

前に、水をぶっかけられたことも忘れて、のこのこ王太子に近づくアールの公爵に、カルダはため息を洩らした。

不機嫌な男に、その娘は踊りに連れ出される。

カルダは、ダンスの輪からレイシエスの手を引き、脇に下がった。

面倒に巻き込まれるのは、御免だつたからだ。

だが、それは杞憂だった。

気がつくと、王太子とアールの娘は、ホールから消えていたからだ。

正直。

カルダは心底、ほつとした。

わずかの時間でも、王太子の興味がそれるなら、願つたりかなつたりだ。

少なくとも、相手の女性もそれを望んでいるのならば、彼が口を出すことでもないし、同情する気もない。

「かわいそうに……」

ただ、レイシェスは小さくそう呟いた。

彼女の行く末が、幸せなものにはならないだろう そう思ったに違いない。

ダンスのお相手

ようやくウイニーがスタッフと共にホールに戻ると、王太子の姿はなかつた。

ここに、戻った訳ではないのだろうか。

だが、そんな嫌な相手よりも。

「大丈夫、ウイニー？」

心配そうに語りかけてくる姉と。

「もつと美しくなったようだね」

優しく手を取ってくれるフラの公爵の一人に、本当にほつとしたのだ。

赤毛の兄弟が一瞬視線を交わし合い、お互いをねぎらつ素振りを見せたのを、ウイニーは見逃さなかつた。

女性を守りきつた、誇らしく男らしいねぎらい方に思えて、嬉しくなつてしまつ。

「遅くなつて申し訳ありません……一曲、お相手いただけますか？」

そんな男同士の無言の会話が終わるや、スタッフは早速レイショスにアタックを始めた。

「喜んで」

勿論、断るような姉ではないし、そんな赤毛の男に優しい微笑みさえ浮かべている。

ウイニーでさえ、見とれてしまう一瞬だ。

じつやつたら、あんな上品で美しい笑みを浮かべられるのだろいか。

自分の顔で実践しようとして、顔の筋肉がつりそうになつて断念した過去を持つウイニーだった。

お似合いの一人が、自然にダンスの輪の中に入つて行くのを、彼女はついついとりと見つめてしまつていた。

「さて、私の可愛いはとこ殿」

自分が、フランの公爵に手を取られていることさえ忘れていたので、声をかけられてはつとする。

「今まで帰りを待つていた、憐れな私と一曲踊つていただけますか？」

レディにダンスを『いつのような言葉に、ウイニーは赤くなつてしまふ。

もしかしたら、髪より顔の方が赤いのではないかと思ひほど、彼女の顔の温度は上がつた。

「姉さんと踊らなかつたんですか？」

つい、照れ隠しで姉を引っ張り出してしまつ。

一人が、ただずつと待つてていたところは、何となく想像出来なかつたのだ。

「勿論踊らせてもらつた……けれど、私はウイニーを待つていたのだよ」

見事な 殺し文句だった。

女性なら誰でもいいわけではなくて、今日のパートナーである彼女を、最大限に引きたててくれる言葉である。

嬉しいやら、舞い上がるやらで、ウイニーの頭の中は大変なことになつていた。

もつとちゃんとダンスの稽古をしておけばよかつたと、心底後悔しながらも、彼女は公爵の手を軽く握つてホールへと進み出る。

端っこでいいと思つていたのに、彼はどんどんウイニーを中心へと引っ張つて行く。

既に踊り始めている、レイシェスとスタファの横を通り過ぎて、踊るスペースを確保する。

「さあ……可愛いはとこ殿……いや、ウイニー嬢。あなたのデビュ－のダンスだよ。皆こ、その美しい姿を見せつけてあげよう」

囁かれた行為と言葉が、余りに不慣れなものだつたため、拳動不審になりそうだった彼女は、穏やかな温度と大きなかのひらに腰を支えられ、一度ぴたりと動きを止めた。

公爵を見て。

一步田を。

踏み出す。

「……」

出す足を間違えて、思い切り公爵の足を踏んでしまつたが。

しかし、さすがはフリの男である。

顔色一つ変えずに、彼はウイニーに微笑み もう一度仕切り直してくれたのだった。

ケチのついた晩餐会の始まりとは裏腹に、ウイニーはとても楽しい時間を過ごしていた。

そのまま、時が止まってしまえばいいのに、と思つてしまふ。

だが、幸せな時間は、いつか終わってしまう。

そして、それはあつといふ間に来てしまつものなのだ。

「タータイト公、そちらの『令嬢を』紹介いただけませんでしょうか？」

ダンスの合間に、そう言って若い男が近づいて來たのだ。

ウイニーは、母方の実家であるロア以外の人は、ほとんど知らなかつた。

「ウイニー・ロアアール・ラットオージェン嬢ですよ。ウイニーニーは、フォルトラ・アール・クレイアルス氏だ」

フランの公爵の丁寧な紹介に、ウイニーは型どおりの挨拶で応える。

だが、^{アール}西の関係者と言われて、複雑な気持ちだった。

まだ若いので、長男ではないようだ。

「ロアアール？　あ、ああ……失礼。タータイト公のお身内かと思つていました」

「血は、しつかりとつながっていますよ。はとじですからね」

そつとウイニーを引き寄せ、公爵は微笑んだ。

常に彼に守られている気がして、彼女は幸せな気持ちになる。

「そうでしたね……ウイニー嬢をダンスに誘つてもよろしいでしょ
うか？」

その幸せな気持ちは、次の瞬間には驚きへと変貌を遂げていた。まさか、ダンスに誘われるとは思つてもみなかつたのだ。

フランの公爵のおかげで、多少はダンスらしい形になつたが、それは彼がリードしてくれたからであつて、他の人と上手に踊れる自信はまったくなかつた。

「さきどき、びくびくしながら公爵を見上げると、彼は優しく微笑んで」

「一曲、踊つたら戻つておいで」

「これは、社交の場だよ。」

そう諭された気がした。

みなが、自分の家を背負つてここにいるように、ウイニーもまたロアールの一部を背負つてここにいるのだ。

「うう。

フランの公爵に促されてまで、強硬に断ることも出来ない。

足を踏まないようにして、踏まないようにして。

呪文のように、さつきの失態を唇の中で呟きながら、彼女はアルの子息とホールへと進み出るのだった。

さあ、肝心の一歩だ。

ウイニーが、じきじきしながらダンスの体勢を整えようとしたその時。

身体が 後ろに動いた。

いや。

後ろに、引っ張られていたのだ。

一瞬にして遠くなるアールの子息を茫然と見ていたウイニーは、ぐるっと反回転させられて、視界を真反対に変えられた。

いたのは。

うわあ。

ウイニーは、いやな悲鳴をあげそつとなつた。

そこにいたのは。

王太子だったのだから。

戻つて、来てる。

ウイニーは、みぞおちの辺りががぎゅーっとなる感じを味わわされた。

アールの子息とのダンスのはずが、いつの間にか王太子と向かい合つていたのだから、驚きとストレスで腫もおかしくなるはずだ。

冷やかな目で見おろされ、ウイニーは反射的に自分の頭をかばつた。

王太子がまた、彼女の髪をめちゃめちゃにするのではないかと思つたのである。

何しる、これまでの短い時間に、一回もべつやべつやされたのだから。

彼は、もしかしたらウイニーがこのホールにいるのを、よく思っていないのかもしれない。

要するに、邪魔だから追い出したいのではないかと、彼女は考えた。

でなければ、これまでに絡んでくるはずがないのだ。

よほど庭で言つ返されたのが、腹が立つたのだろう。

「」のよつな思考をしたわけだから、ウイニーが自分の髪をかばつたのは当然である。

だが。

手を持ち上げた彼女の、完全に無防備になつた脇に、王太子は手を回すではないか。

あれ？

予想外の行動に、ほけつとなつてしまつたウイニーは、気づけば自分が王太子とダンスを踊るよつな態勢になつてゐるのに気づく。引き寄せられた身体のせいで、彼の匂いが鼻孔をくすぐる。

お酒と香水が、入り混じつたよつな匂いだ。

華やかな甘つたるい、女性のつけるよつな香り。

彼のイメージとは全然違うそれに、本当に王太子であるか、ウイニーが思わず顔を上げた時。

まったく息も合わないま、彼はさつやと踊り始めてしまつ。

ついていけない足を、慌てて踏み出して。

ウイニーは 王太子の足を、ぎゅうつと見事に踏みづけてしまつた。

「……」

ギロリと睨まれて、慌てて足を引っ込める。

また、やつてしまつた。

フラーの公爵であれば、さらっと流してくれるだろ？が、相手は王太子だ。

足を踏んだ罪で、牢に放り込まれるか、罰でも下されたのではないかと、ウイニーは背筋が冷たくなった。

だつて、この人が勝手に。

言い訳だけなら、彼女の中には山ほどある。

心の中では、「この人」呼ばわりだ。

ずっと領地で暮らしていた彼女には、王家とか王太子と言われても、偉い人であるとは分かつているが、その程度だ。

ロアアールという土地柄もあってか、王家へ忠誠の限りを尽くせといふような教育もない。

そんな赤毛の娘に対して、王太子は。

「田舎者め

一言、冷たく言い放つと。

「……！」

その痛みに、ウイニーは飛び上がりそうになつた。

足を。

踏み返されたのだ。

な、な、な、何て人！

大きな目を見開いて、ウイニーは痛みや驚きに混乱した。

公衆の面前で、女の髪をぐしゃぐしゃにする男である。

足を踏み返すなど、造作もないだろ？

見た目は、これほど冷たい気配が溢れ出しているところに、ウイニーにやることば、余りに子どもじみてはいなか。

だから、彼女の頭に血が昇る隙間を与えてしまうのだ。

痛みと怒りと恥ずかしさで真っ赤になつたウイニーは、そのまま自分が放り出されるだらうと思つたし、そうされたいと願つた。

しかし、それは許されなかつた。

王太子は、彼女から手を放さなかつたし、冷たく不機嫌な顔のまま、踊り出してしまつたのだから。

田舎者と罵られながらも、一曲はどうしても相手をしなければならないようだ。

何なのよ、この人。

ウイニーは、何とか足を踏まえずに踊りながらも、自分の理解の遙か外にいるこの男についていけず困惑っていた。

王族といつのは、みんなこんな風にぶつ飛んでいるのだらうか。

だとしたら、姉が不憫でならない。

姉がロアアールの領主になる多くの時間、こんな男や他の王族と、仕事の上とは言え、付き合わなければならないのだ。

それや、心労も重なることだらう。

早く、公爵のところに戻りたい

ウイニーは、回りながら自分の味方を探した。

姉とスタファは、近くを踊ってくれている。

気にかけてくれているのは、その視線からよく分かった。

一方、公爵は。

他の女性に捕まっているようすで、踊りこなしていないものの、談笑しているようだ。

う。

ウイニーがピンチだというのに、悲しい現実である。

たつた5人しかいない公爵の中の一人なのだから、放っておかれはすはないのは分かるが、少しは気にかけて欲しいと願つてしまふ。

とにかく、一曲終われば。

彼女は、ただそれだけを望んで、義務と割り切つて踊り続けた。

そろそろ終わりだらうかと、曲を田で追いかけていくと、面白くない目に睨みつけられていにに気づく。

怖いので、その田を見ないフリをして、再び周囲を見回す。

あれ。

いつの間にか、ウイニーたちは踊りの輪の端の方に来ていた。

もう、フランの公爵も見えないし、姉たちも少し遠い位置。

その代わり。

最初に馬の出て来た、奥の出入り口にとても近い。

それに気づいた直後。

強い遠心力で、ぶんと一度振り回されてよろけた。

慌てて倒れないよう、王太子にしがみついてしまったウイニー

は、自分の身体が勝手に歩いているのに気がつく。

いや、強引なこの男の力に、引っ張られているのだ。

向かう先にあるのは、扉。

え？ あ？

自分でも意味不明の、疑問符を飛ばしながら、彼女は声ひとつ出せないまま、王太子にホールを連れ出されてしまったのだった。

自由の捕まえ方

「命令だ、私の許可があるまで開けるな」

ウイニーの後方で、馬が現れた扉は閉ざされた。

そこは本来、王太子が登場するはずだった特別な扉なのだろう。

他の人間は、公爵であろうともウイニーの使った出入り口と、同じ扉を使っていたのだから。

そんな特別な扉が、閉ざされたということは。

彼女は、自分の意思でホールに帰れない、ということになるのか。驚きながらも、ウイニーは引っ張られるその力に抵抗した。

このまま、王太子の希望通りになるということは、自分にとって危険な気がしたのだ。

「離してください！」

か弱い姫に比べたら、少しほう力がある方だと思っていた。

だが、自分の手を掴む、王太子ひとつ振り払えない。それどころか、なおさら手に力を込められて、痛いほどだった。

その現象は、ウイニーを更に怖がらせた。

どうしたらいいか分からず、冷たい焦燥感が彼女の足元から這い上がってくる。

だが、そこで口がきけなくなるような、氣を失うような弱さは、彼女にはなかつた。

「嫌です、帰ります！　帰して！　離して！」

パニックを起こしながら引きずる王太子と、抵抗の限りを続ける赤毛のウイニーを、廊下に控える者たちは必死に見ないフリをしていふよつだつた。

誰一人と、王太子を止めるものなどいない。

そう考へると、あの南長といつ女性は、よほど特別だったに違いない。

他の誰にも、出来ないことを言つてのけたのだから。

「はーなーしーでー！」

ウイニーは、ついに自分の足を折り曲げた。

廊下に座り込み、何が何でもついていかない気持ちをアピールしたのだ。

公爵にもらつた綺麗なドレス。

それを傷つけたくないし、汚したくない。

そんな気持ちで、いまは頭から消し飛んでいた。

王太子は強烈なウイニーの抵抗に、一度足を止め、最大限の機嫌の悪さを表した顔で、彼女を見下ろした。

直後。

「ひともあらう。」

彼は。

ウイニーを床に引きずったまま、歩き始めたのだ。

「 もやあつー 」

それは、なんとみつともない光景だったのか。

ドレス姿の少女を、まるで抵抗する驛びとのように、あるいはと引きずるのだ。

ウイニーの靴が、片方脱げてしまつたところに、そんなこともおかまいなしである。

さすがに、その暴挙にこぎよつとした衛兵とウイニーは顔が合つた。

「 助けてーー 」

声の限りに、その衛兵に助けを求めるが、彼はあらぬ方を見てしまつ。

誰も。

「こりでは、誰もウイニーを助けてはくれないのだと、思って知らされる瞬間だった。

同時」。

この感覚には、覚えがあった。

母がウイニーを叱つけていた時の侍女たちが、みなこうだつたではないか、と。

母の癪癩に逆らえる侍女など、誰ひとりとしていなかつた。

姉でさえ無理だった。

ウイニーは、ただ母の気が済むまで言葉の限りを投げつけられ、その後、もう見たくないようになって出されたのだ。

誰も、助けてくれない。

「……」

そう理解した時、ウイニーは悲鳴をあげるのをやめた。

母こそじてきただよ、相手の気の済むまで黙つてされるがまになつていれば、いつか嵐は過ぎ去り、そのうち放り出されるの

だ。

ロアールにいる時と、同じ感情が胸をかすめる。

するあると。

淑女じにわか、人間未満の扱いをされながら、ウイニーは 我慢しようとした。

いつもの、我慢。

いつか、ロアールを逃げ出して、我慢のない幸せを手に入れようと思つていた。

だが、どうだ。

王都に来たとしても、結局自分は我慢することになるではないか。

母と同じように、理不尽な力に膝を折らされる。

どこに行つたとしても、同じではないのか。

たとえ、フランの公爵になつたとしても、必ず何かがウイニーの頭を押さえつけるだろう。

誰も自分を守ってくれない。

そんな瞬間が、いつかどいかでやつて来る。

フランの公爵の顔が、心の中で浮かんだ。

いま、彼は『じょうがない』と思つて、諦めているだらうか、とか。

姉やスタッフも、そう思つて、いまなお踊り続けているだらうか。

違つ！

ウイニーは、顔を上げた。

きつと彼らは、王太子の閉ざした扉を開けようと、頑張ってくれているはずだ。

彼女の後を追おつと、手を忽々としてくれているはずだ。

確かに、いまこの瞬間で、ウイニーは誰にも守られではない。

だが、彼らが自分を助けようと思つてゐるのは、間違いないはず。

王太子に髪を引つ張られた時、公爵も姉も助けに入つてくれた。

髪を直す時、スタッフは追つてきてくれたし、王太子が部屋に入らないよう抵抗してくれた。

彼らの気持ちのためにも。

何としても、無事に帰るのだ。

ウイニーは、掴まれてゐる手に自ら力を込めた。

自分の身体を、より王太子の腕に近づけるよつ。

その気配に気づいたのか、彼は足を止めて振り返る。

ありがたいことに、引きずられる力が消え、彼女は簡単に王太子の手に寄ることが出来た。

次の瞬間。

ウイニーは、彼女の手を強力に掴んでいる王太子の手に向かって。がぶつと、噛みついたのだった。

「……！」

痛かつたに違いない。

当然だ。

痛いほど勢いで噛んだのだから。

とつさに引かれた王太子の手に、ウイニーはついに己の自由を勝ち得たのだ。

ドレス姿で、自分をほめたくなるほど身軽に立ち上ると、彼に背を向ける。

戻るのだ。

みんなの待つあのホールに。

もう片方、残った靴も蹴り捨てる。

ドレスを持ち上げ、ウイニーは裸足で駆け出したのだった。

絶望的に、思えた。

レイシヨスは、その扉の前で立ちつくす。

主賓専用の扉は、王や王太子専用の扉とこう意味と同じだ。

その先にあるのは彼らの部屋であり、この扉以外から向かおうとしても、許可なく立ち入ることは許されないエリアとなる。

ついでにわざまで、踊りの輪の中にいると思つていた妹は、風のように素早く、そして計算された位置とタイミングにより、王太子に連れ去られてしまったのだ。

異変に気付き、レイシヨスがダンスを投げ出して追つた時には、もはや遅かった。

『王太子の御命令です』といつ、扉に衛兵の言葉が無情に響き、扉はびくともしない。

王太子は彼女の妹を、何事もなく帰すことはない そういうことだった。

王族のことなど、まったく知らない妹である。

いま、自分がどういう状況に置かれているのか、まるで理解していないまま連れて行かれているに違いない。

どれほど不安で、恐ろしい思いをしているだらうか。

王太子という人間を、表面上とは言え知っているからこそ、レイシェスは己の背筋を冷たくした。

どうにかして、この扉を突破する方法はないのか。

だが、心の中で誰かが言う。

『そんなことは、無理だ』と。

公爵代理である彼女でさえ、この扉を開けることは出来ない。このままにして妹が戻されるのを、ただ待たねばならないといふのか。

「交代しよう」

そんな彼女の後ろから、フランの公爵が駆けつけてくれた。

スタッフアが、呼んできてくれたのだろう。

「兄上に任せよう……私がいますべきことは、見ていろ」とだ

ギリギリと、スタッフアは声の奥にある怒りを、決して隠してはいなかつた。

だが、レイシェスの肩を後ろから支えるように抱きながら、それでも彼は踏みとどまるのだ。

見ていること？

彼女は、それを疑問に思つた。

見ていて、何が変わるとこいつのか。

ここまで、レイシスはずつとウイナーのことを見ていた。

ロアールでは、見ていることしか出来なかつたからだ。

それで、何が変わつたといふのか。

無力な自分を、思い知るだけである。

実際、公爵の問いかけに、衛兵は「王太子命令」とこいつ同じ言葉で拒んでゐるではないか。

「……」

一度、フランの公爵は言葉を止めた。

彼は、上着の内側に手を入れ、何かを取り出す仕草をする。

「では、王太子に急ぎお渡しいただきたいものがある。……タータイ
ト公爵よりと伝えていただけば分かる。少しだけ、隙間を開けるく
らいながらよいだらう」

衛兵は、彼が手に持つてゐるものを見て、ぎょっとした。

それは、大きな赤い石のはまつてゐる指輪だつた。

一衛兵が、決して触れることも出来ない素晴らしいものである。」
「これは、レイシエスの目から見ても分かる。

余りの高価な品に、彼らも動搖したのだらう。

公爵のすぐ側の衛兵は、直接指輪を預かるではなく、向こう側にいる仲間に、責任をなすりつけてしまおうと思つたに違いない。

その扉を、ほんのわずかだけ開けたのだ。

瞬間。

フランの公爵は指輪を放り出すや、その隙間に手を突っ込んだのである。

「何をなさいます！」

慌てたのは、衛兵だ。

いや、慌てすぎたと言つていい。

彼らは、思わず扉を強く閉めてしまった。

レイシエスは、強く身を竦めていた。

何が起きたか、容易に想像出来てしまつたからである。

扉は 無残にも、公爵の指を強く挟んだのだ。

だが。

レイシエスが見た公爵は、扉から決して手を引く事なく、そこに立つて居る。

責めたのは、衛兵だった。

たとえ王太子の命令であつたとしても、彼らは貴族最上位の、公爵の身に怪我をさせたのである。

いくら彼が、その場にしつかりと立つていて、手も引かず叫び声ひとつあげていなかつと、あの勢いで怪我をしていないはずがないのだ。

「私は指輪を落としたので、慌てて拾おうとしただけだが……何故、このよつちな仕打ちをされねばならないのかね」

公爵の背から、赤い炎が上がっているように見えた。

普段の優しい彼からは、とても想像のつかない力の声。

どれほどの言いがかりであろうとも、拒否出来ない強さが、レイシエスの田の前にある。

「も、も、もうわけござり……」

その気に押され、衛兵たちは縮みあがりながら、公爵の手を救うべく扉を開けた。

レイシエスの前で。

開かないはずの。

扇
が。

開いたのだ。

その向こうから。

一 公爵のおじわせ!!!!

駆けてくる赤毛の少女がいた。

髪を乱し、ドレスを抱え上げ、靴もはいていないウイニーが、顔を真っ赤にしてこちらに向かってくる。

妹もまた。

諦めていなかつた。

あの王太子から逃げるのは、どれほど大変だつただろう。

唖然とする衛兵を横目に、公爵は怪我を負つたはずの手で、扉をもつ少し余計に開く。

妹が通るのに、問題のないほどに。

「おかれり、ウイーー……最高だよ、君は」

両手を伸ばして、
公爵は彼女を抱き止めた。

レイシェスは、『見ていた』。

その意味が、ようやくいま分かったのだ。

スタッフは、ただ『傍観しろ』と言つたのではない。

公爵である、彼の兄のやり方を見ると言つたのだ。

知恵を使い、己の身体を厭わず、威厳ある言葉で圧倒する。

これがまさに 公爵といつもの。

ここまでする覚悟があれば、動かないはずの君さえも動かすこと
が出来るのだ。

衝撃、だつた。

動けないでいるレイシェスの後で、スタッフは動いていた。

足元に落ちた公爵の指輪を拾つて、ウイニーを抱きしめている兄
に差し出したのだ。

公爵は、軽く顎で扉の向こうを指す。

それを受けたスタッフは。

指輪を、扉の向こうへと放り投げた。

まるで、それがウイニーの身代わりであるかのようだ。

「出よつか」

ウイニーを支えながら、公爵は一言告げた。

誰ひとり、反論を唱えるものなどいるはずもない。

精神的な衝撃の大きさにて、震えそうになるレイシェスを
ファは、支えるように腕を取ってくれたのだった。

スタ

保護

湿布と包帯でぐるぐる巻き。

スタファの兄であるカルダの右手は、現在そういう有様だった。幸い、骨は折れていないようだが、効き手に広がる赤と青の痛ましい腫れの色は、閑ざされた扉の強さを見せつけていた。

ウイニーは、包帯の糸を痛々しく思つかもしれないが、中の色具合よつよせビミシである。

同時に、兄の覚悟を決めた時のすさまじさは、見事だと痛感せざるをえなかつた。

王太子を直接ブン殴れない分、カルダは己の身体を持つてして、理不尽を訴えるのだ。

公爵の怪我とつものは、簡単に一言で済ませること出来ない。あの衛兵たち全員の首をすつ飛ばしてなお、到底足りることはないだらう。

王や王太子へ圧力をかけることは出来なくとも、大臣や執政官たちにはやり方があるのだ。

とはいつもの。

「王太子の手に噛みついて逃げるとは……」

スタッフは、つい笑いがこみ上げてしまった。

そんな王宮内での駆け引きなどと、無縁の娘が一人いる。

ウイニーだ。

彼女は、女性として正しいことをした。

何をしても、自分の身を守る。

それを、言葉通り実践したのだ。

あの王太子が、彼女に噛みつかれてどれほど驚いたかと思つて、留飲が下がる思いだつた。

とはいひものの、無罪放免というわけにはいかないだらう。

次期王に、怪我をさせたのだ。

公爵に怪我をさせることがよりも、更に罪が重くなる。

無理難題を言わぬかねないのは、火を見るより明らかだった。

だから、兄はスタッフに書状を書かせた。

効き手を怪我しているために、重要な書類は彼が代筆することになるのだ。

宛名は、王太子 ではなく、王。

王太子が無茶をやらかす前に、先に王に話を通しておく方法を、兄は選んだのだ。

これは、レイシエスでは思いつけないこと。

彼女はまだ、正式な公爵ではないし、公爵という地位の使い方をよく分かつていらない。

本来であれば、レイシエスは公爵である父親について学ぶのが一番いい。

机の上だけでは、決して分からない『公爵道』が、そこには必ず存在するのだから。

だが、彼女はその道は選べなかつた。

母の圧力が強すぎたことと、現在、父親が身体を壊してしまつているからだ。

兄の姿を見せたことが、少しでもよい刺激になつていればいい。スタッフはそんな風に思ひながらも、兄を妬ましい目で見つめたのである。

「何だ、その目は？」

兄の元に、ひつきりなしにロアアールの姉妹から手紙が届くからだ。

おぞらぐ、お礼や怪我に対する見舞いなのだろうが、それが正直羨ましかった。

手の怪我の関係で、返事の代筆は勿論スタファアになる。

ウイニーに対する返事はいいとしても、レイシェスに対する返事には、複雑なところがあるのだ。

悔しかつたスタファアは、自分も彼女に送る手紙を書き、一緒に届けさせたが。

兄の返事には、不穏な文章はなかつたので、向こうの姉妹に王太子からの直接の咎めはいっていないようだ。

その代わりといふわけではないのだろうが、こちらの方に王太子からの封書が届けられた。

封書と言つても、手紙が入つてゐるわけではない。

封筒の中から転がり出てきたのは。

指輪、だつた。

兄が、ウイニーの身代わりであるかのように差し出したそれは、ものの見事にひんまがり指輪の様相をなしていない上に、赤い石はなくなっていた。

「まだ、ウイニーのこと諦めてはいな」よつだな

険しい表情で、その指輪を見つめる兄。

スタッフも、非常に不快な気分を味わった。

邪魔をしたフラを、「」の指輪のようひねりつぶしたいという意図と、赤い石（赤い髪のウイニー）は奪うつとう意図の、両方が込められている気がしたからだ。

ロアアールは、王太子に側室を送らない。

王太子は、そんな慣習など関係ないと思っているか、もしかしたら側室にしたいわけではないかもしねれない。

ただ、抵抗されるから捕まえて翻りたい。

スタッフから見れば、そう思えるところもある。

だが。

レイシエスに向けるものとは、明らかに違つものをウイニーに向けている気はした。

それは、一度でも食らえば満足すると言われても、はいそうですかとは彼には判別出来ない。

たとえ、一度食らえば満足すると言われても、はいそうですかと差し出すわけにもいかないのだが。

「兄上、ウイニーだけ、先にロアアールに帰したらどうだろ？」

「」の場所は、彼女にとつてもはや危険だった。

滞在の残り日数が、それほどないとは言え、また今回のような事件が起きては非常に厄介だ。

王宮にいたところで、部屋に閉じこもつて居るしか出来ないだろう。

それでは、あまりにウイニーが憐れではないか。

兄は、彼の言葉に考え込んでいる。

「ロアールに、一人だけ帰することは難しいだらう。馬車や警備の関係もある」

だが、結論は否定的なものだった。

「だけど……」

すぐさま、スタッフアが説得しようと身を乗り出しだが、兄に包帯のない左手で制される。

「まあ、待て。策がない訳じゃない……この馬鹿げた会が終わるまで、ウイニーはランスカ伯のところに預けよう」

左手の向こうから語られた言葉は、彼を安堵させた。

そういう方法があつたか、と。

タータイト家は、非常に革新的な人間が多い。

簡単に言えば、思い切りがよいし、反対されたつて言つことを聞かない。

女性は恋愛結婚が多く、惚れた相手と見たら、ビリの誰だらうが突撃していつてしまつ。

フランスカ伯としても、ロアアルのよつて王太子に娘を差し出すなんてしたくないのだが、過去に何人か側室としてあがつているのは、單純にフランスカ伯の娘たちの恋愛病が発動して、その対象が王太子だったというだけである。

それと同じ要領で、都の貴族に嫁いだ者もいる。

一番、血が近いのが、さつき兄が口にしたフランスカ伯。
その妻は、ウイニーたちと同じく、彼らのはといである。

フランスカ伯は、王宮勤めではないので更に都合がいい。

そこにならば、「つかり王太子とはち合わせる」ともないだらう。

何か聞かれたら、「故郷に帰しました」と言つておけばいいのだ。

とにかく引き離しさえすれば、そのうち興味を失うだらう。

かくしてフランスカ伯の兄弟は、ウイニーを親戚宅へと預けることを決定したのだった。

ウイニーは、保護された。

レイシェスは、一人になってしまったロアアールの部屋で、寂しい気分を覚えながらも、本当にほつとしていたのだ。

これから、彼女には謁見会という重大な仕事が待っている。

そんな時に、王太子から妹を守り続けるのは、本当に大変なことだと思っていた。

フランの公爵の手際は、見事なもので。

ウイニーを置いておける屋敷と、そこへ行くまでの移動手段の全ての手配をあつといつ間に終えてくれたのだ。

妹が、王太子の手を噛んだという点については、既に王へ直接書状を送ったということも聞いている。

公爵という地位の使い方のひとつを、またしても見せてもらつた。

ウイニーが、安全なところに移動した後、スタッフがやつてきたので、レイシェスは彼に食い下がつた。

どんな手紙を書いたのか、知りたかったのだ。

本来であれば、公爵の手紙の内容をスタッフが知ることはない。

しかし、いまの公爵は効き手を怪我している。

スタッフが代筆したのでは、と読んだのだが、当たりだったようだ。

余り細かい話は出来ないと前置きした上で、彼は要点だけ語つてくれた。

「外交上のじこになる可能性を、兄上は示唆したんですよ」

王太子の、ありえない行動はウイニーから聞いていた。

廊下を、引きずられたことまで。

それらを薄縄にぐるみながら、公爵は王に報告し、フリはそれに不快な感情を覚えたことを伝えたというのだ。

妹のことは、ロアアールだけの問題ではないのだと語ってくれたのだ。

心強い味方に、本当に嬉しかった。

「けれど、何故フランアールに肩入れするのか、陛下は座しく思わないかしら」

「の後の、謁見会のことを考へると、そういう理論武装の薄いところを責められるのではないかと不安になる。」

『近々、正妃として求婚する予定の女性』、だそうですよ

難しい顔になりかけたレイシェスに、スタッフの言葉はすっと転がり込んでくる。

「あら……」

余りの不意打ちの言葉に、レイシェスは驚いた顔を見せてしまった。

確かに、言葉の通りではあるのだが、まるで随分前から考えられ、当たり前のことであるかのように書かれていることにびっくりしてしまったのだ。

ほんのつい先日、この場の口約束で決まったことだったといふのに。

「王太子に不快感を覚えるには、十分な理由でしょう？」

そんな彼女の顔に、少しおかしそうに微笑みながら、スタッフが付け足した。

確かに。

もし、ここにウィニーがいたならば、きっと恥ずかしそうに喜んだことだわ。

「いくら王でも、フラーとロアアルの両方を敵に回すのは、得策ではないと判断すると思こまへ」

「公爵様は、素晴らしい手腕をお持ちですね」

自分が頭でっかちであることを思い知られるが、いい勉強をさせてもらつたと、いまは考えよう。

レイシエスはそう考へ、自分の中の血肉として、それらを取りこもつとした。

こつか必ず、この知識が役に立つことが来るに信じて。

「お役にたてるにひとがあれば、いつでも私を呼んで下さー」

肩書きこそ公爵ではないが、その男を一番側から見て来たスタッフは、彼女に対して手を広げてくれる。

これは、本当にありがたいことだった。

「あつがとうござります」

許されるものならば、いま彼の頭の中にある全ての知識を得たいほどだ。

賢明な兄弟がいて、きちんと側に置いて育てるとこつことは、こんなにまでも財産になるのだと痛感する。

彼女らの母が、もう少し賢明であれば、きっとレイシエスと同じようにウイニーにも学ばせたことだらう。

そうするべきだったのだ。

もし自分に不慮の事故が起きて、突然公爵を継げなくなってしまつた時、ロアアールはどうなってしまうのか。

それを考へると、フリの兄弟はどちらが公爵の地位についてもおかしくない教育をされているし、もし公爵が後継ぎがないまま亡くなるようなことがあつたとしても、スタッフアはそこにしっかりと立つだらう。

母は、本当の意味でロアアールのことなど考へてはいなかつたのだ。

ロアから嫁いできて、一人の娘を産みはしたが、あの領地の未来のことなど、本当に何ひとつ考へてなどいなかつたのである。

外に出たおかげで、レイシエスにはそれがはつきりと見えた。

そして、故郷に帰つた時、自分は母と対峙せねばならないといふことも、はつきりと理解したのだ。

ロアアールのために。

そして。

父に会わなければ。

どんな家庭教師よりも、父の身体の許す限り、語り合わなければ。

スタッフアを前にしながら、彼女は心の中でそつ決意した。

「何でも手伝いますよ……いえ、貴女が望むのであれば、全てを捧げますよ」

そんなレイシェスの決意など、決して知ることのないはずの男は、彼女の心を揺さぶる言葉を吐くのだ。

彼は 助けになる。

スタファという人間に、貴重な本以上の価値を見出してしまったのだ。

それは、何と抗いがたい感情だったか。

その貴重な人間が、自分からレイシェスに全てを捧げてくれると言つているのだから。

ロアアールのためにも、思わず掴みたくなる衝動を、彼女はこらえた。

この衝動の根源に、『弱さ』があるのだと分かったからだ。

彼のことを『助け』と思っている時点で、それは明らかだった。

少なくとも、母に対峙するための助けにしてはならない。

でなければ、『フラ』の影響を受けたロアアールの公爵と、吹聴されるかもしだいからだ。

あの母だけは。

どうしても、レイシェス自身が越えなければならない相手だった。

彼女は、心を落ち着けてからスタファをまっすぐに見た。

「もし、そんな機会があれば、その時はよろしくお願ひ致します」

遠まわしに抱む言葉。

すると、スタッフは一瞬笑みを消した後、より真っ直ぐに彼女を見つめ返して、こう言ったのだ。

「機会は『ある』ものじゃあません……『作る』ものですよ」

何一つ搖りぐら配のない彼の黒い瞳は、本当に眩しく熱いものだつた。

昔の話、未来の話

「あたくしと、はといなつますわあね」

フランスカ伯の奥方である赤毛の女性は、『だるやうじがつ』
た。

名は、ラーレ。

ウイニーの祖母の、妹の孫と云ひになる。

「お手数をおかけします、ウイニーと申します」

同じ赤毛ではあるが、自分とはまったく異なるタイプの女性だ。

色香が全身から溢れ出しているし、大きく胸元の開いた真っ赤な衣装に、毛皮のストールといつセンスは、とても彼女には真似出来そうになかった。

動きや言葉も、非常にやがだ。

応接室のふかふかソファに深く背を沈めたラーレは、向かいに座る自分を踏みするように上から下に見つめる。

女としての価値に数字をつかられていたので、ウイニーは無意識に背筋をぴしっと伸ばしてしまった。

同じ赤毛であっても、生まれた国は違う。

ウイニーの恥が、ロアアルの恥としてフラーの人間に伝わってしまったかもしれない。

ただでさえ、随分姉には王宮で迷惑をかけてしまったのだ。これ以上、ロアアルの面倒をつぶすようなことは、彼女には出来なかつた。

ウイニーをひととおり眺めまわした後、ラーレは怪訝そうに首を傾げる。

「ちょっとフランにいない間に、公も随分趣味がお変わりになられたわねえ」

その言葉は、何と言えばいいか、本当に素直に口から出た音に感じた。

不快感をあらわされるわけでもなく、歓迎するわけでもなく、ただただ不思議に思えて仕方がないという響き。

ウイニーが、フラーの正妃候補だと聞かされたのだろう。

そういう日で、彼女を值踏みしていたのか。

う。

すっかり、ウイニーは恥ずかしくなってしまった。

フラーの公爵は、ただ彼女の願いを聞き入れる方法を考えてくれただけで、自分が彼の好みであるなんて思つてもいい。

そういうことを考えたことがなかった、というのが正直なところだ。

そうだよね、女性として気に入られたわけはないんだよね。

今更ながらに、ウイニーはちょっとへこんでしまつ。

「チチエックは、本当に隠しここいとしたわねえ。本当に花のよう
に美しかったのに」

寂しげにラーレが、窓を見ながら呟く。

「」にウイニーがいるところに、すっかり自分の世界を構築してしまつたようで、彼女はカヤの外だ。

ウイニーを見ていいようすで見ていないラーレは、社交的な意味で
言えば失礼なのだろう。

しかし、彼女にはむしろ悪意もなく、ただ自分流の時間や思考
の流れを持っている人なのだろうといつのは伝わってきた。

それに、いまはとても怒る気にはなれない。

ラーレが口に出した『チチエック』という名は、きっとあの人の
名前だらう。

公爵の正妃でありながらも、この世にいられなかつた人の。

彼女が口に出すとこういふとま、きっとタータイト家の親戚の女性
だつたのだろう。

ただ、ちょっとと思つた。

自分がフラン嫁いだら、今と同じ悪いを、時々味わうのだひつじ。
誰かが、チエックという女性のことを惜しむ度に、その色を隠せない瞳でウイニーを見るのだ。

「あたくしね……チエックだったからこそ、最後は身をひいたん
でしてよ」

髪の毛を掴み合つて、ケンカをしたこともありましたわ。

突然、彼女は自分世界から、とんでもない言葉と共に戻ってきた。

髪の毛を掴み合つて！？

どういう状況だったのかと、ウイニーは驚きを隠せずワーレを見
てしまつた。

「側室にはなれたかもしれないでしようけど、私は側室なんてまつ
ぱらじめんでしたわ。チエックも同じだったから、ケンカするし
かなかつたでしょ？」

「はあ……」

彼女に、どんな相槌を求めているのか。

いや、きっと相槌などどうでもいいのだろう。

要するに、昔フランの公爵の正妃の地位を、掴み合いでしてまで争つたことがあるのだとラーレは言つてゐるよつだ。

「このやかなかな女性が、どうしたら掴み合いで出来るのかは、やはりぱり想像がつかなかつた。」

チチエックと云う女性も、同じよひあるやかだつたのだらうか。

「二人の幸せな結婚なんて、見たくはないでしょ？　だから、あたくし都に旅に出ましたの」

神殿巡りの旅にかこつけた、観光旅行だと彼女は言つ。

実際は、傷心旅行だったのだらう。

「神殿で今のお夫と出会つて、あたくし三秒で恋に落ちました。青銅の彫像かと間違えそうになりました。神殿の管理をさせておくには、惜しいほどですわ」

「ひとつひとつ、ラーレはその時のことを思つて出す箇で、ため息を洩らす。

三秒。

ちよつと、公爵が不憫になる瞬間だつた。

人の心が大きく動くのは、ほんの数秒でもりえるのか。

ウイニーには、それはよく分からなかつたが、いまのラーレは幸せそうで何よりだと思つ。

同時に、フリの女性としても自分に正直なのだと分かった。

南長は、王太子にやえ逆らいみせたし、じんなゆるやかなラーニドやえ髪の掴み合こまである。

そこにはいたくないと黙つたら、どんな奴田であひつむか、わつをと故郷を離れてしまつ。

「うしへラーネを見ていると、他の方法もあつたのではないかと思えてくるのだ。

『誰か私を助けて』ではなく、自分の意思で母から離れる方法が。

ウイニーは、母と髪の掴み合にもしていいない。

母親に面と向かつて逆らつてもいいない。

フリの女性と比べると、物分かりのいいフリをした、弱い子どものあることを感じる。

ただ。

彼女は、王太子の手を噛んだ。

生まれて初めて、強いものに逆らつた瞬間だった。

あの時の、がむしゃらな気持ちとは、ウイニーの中になかったもの。それは、間違いなく都に来て初めてわきあがつた感情だ。

戦えるかもしれない。

夫のわけ話を語り続けるラーेを前に、彼女はふとそう思った。

今なら、母と戦えるかもしれない、と。

ちゃんと戦つて。

そして。

行きたいところ。

行けばいいのだ。

鞭と飴

レイシエスは、初めて王に会つた。

王太子の謁見室よりも、10倍は大きく、そして厳めしい石作りの部屋だった。

彼女の予想よりも、もつと暗く重苦しかつた。

王の栄光の華々しさを表すには、不似合いと言つた方がいいかもまるで、だだつぴりい牢獄を彷彿とさせる。

王は、ひとりひとりの公爵と、まずは謁見する。

一番最後のレイシエスに、よつやくその順番が回つて来たのだ。

5公爵の地位に優秀はないが、順はある。

公爵の在任期間の長さだ。

父の代理ではあるが、父自身が来ていないため、ロアアールは最後となる。

「のまま、自分が公爵になつたとしても、しばらくはこの順序で安定だわつ。

王は、石段の上の古く美しい、しかし飾り気の少ない木製の椅子に腰かけて、レイシエスを見下ろしていた。

初めて見る彼女を、油断なく見つめているように思えた。

「拳の地の全てを統べるマイア・ロシスト・エージェルブ（大いなる拳の王）陛下。初めてお目にかかります。ラットオージョンの一の娘、レイシェス・ロアール・ラットオージョンと申します」

挨拶の口上は、これまでのどんな声よりも美しく朗々と発したつもりだ。

反響する自分の声に惑わされず、レイシェスはこの大きな仕事の一言田を、無事に乗り切ったのだ。

だが、緊張感や威圧感が緩んだ訳ではない。

肌がぴりぴりとするほど、王の視線が自分に注がれるのが伝わってくる。

「ロアールは、これまで通り未來永劫、拳の全てに忠誠を誓うか？」

強く低く、声で人の頭を地べたに抑え込むような声。

反発せずにいられないような頭ごなしの言葉を、レイシェスはじぐりと飲み込んだ。

何を言われるかは、一応前知識として理解していたつもりだが、王自身の口から出て来た厳しさは、どんな勉強でも理解できないもの。

そして。

「この謁見室が、どうしてこれほど晴れやかでないのか、その理由がいま肌で分かつた気がした。」

「こでもしもレイシエスが、ほんのわずかでも従わない気配を見せたならば、この場できつと首を落とされるに違いない。」

牢獄ではなく、処刑場のよつに感じたのである。

レイシエスは、ひとつ息を呑んで、しかし王を見つめ返した。

「これまでのロアアル同様の、忠義をお約束致します」

震えてはならない。

脅えは、一瞬にして氣取られる。

ロアアルは、この拳の國の一部ではあるが、未來永劫ラットオージョン公爵のロアアルなのだ。

たつた16歳のレイシエスは。

魂を賭けて、王と対峙してきたのだった。

ふりふりする。

ほんの短い謁見だったところに、彼女は既に精根尽き果てた状態で、部屋のベッドにひつぶせに倒れた。

こんなみつともない真似をするとま、自分でも思つてもいなくて、侍女が周囲でオロオロしている。

「大丈夫よ……ウイニーを呼ん……」

腕で、何とか自分の上半身を持ち上げながら、レイシエスは無意識に妹を呼ぼうとして、はたと気づいた。

やうだつた、と。

妹は、フラの公爵の計らいで、王宮から離れてしまったのだ。

元気な妹を見ることが出来ず、彼女は寂しい思いをした。

ウイニーを見れば、少しは気分が良くなるかと思つた。

ようやくベッドの端に腰かけるまで身を起こすと、レイシエスはため息をついた。

部屋は静かで、そしてとても広い。

妹と再会するまで、味氣ない時間が多くなりそうだ。

そんな彼女の元に、侍女が近づいてくる。

その手に抱えているのは、花がいっぱい詰まつた籠と手紙だった。

「お戻りになられたらお渡しするよ」
「…………」

差出人は　スタフア。

つべづべ、女心の分かつてゐる男である。

花も嬉しいが、いまは手紙の方が嬉しい。

レイシエスは、封を切つた。

愛情の詰まつた、バリエーション豊かな書き出しどと、今日の謁見会をねぎらひ言葉が並ぶ。

「まあ」

彼女が、つい声をあげてしまつたのは、次のくだりだつた。

『よくさえずる赤い鳥がいなくてお寂しいでしよう。別の赤い鳥で
よろしければ、いつでも側に参ります』

赤い鳥とは、ウイニーのことか。

妹の不在を寂しがつてゐると、スタフアも思つたのだろう。

その隙間に、自分が入り込もうと思つてゐるのか。

くすくす笑いながら、レイシエスは彼が丁寧に手順を踏んでくれ
ていることに気づいた。

ひとつひとつ、彼はノックをしてくれているのだ。

レイシエスの心の扉の前で、じつくつと。

だからと書いて、彼がただの大人しい男だなんて、彼女は思つてもいなかつた。

スタッフの妹に対する言葉や態度を考えれば、彼は公爵よりも、もつと野趣溢れる男に見えるのだ。

それを押しどごめながらも、ノックをするような手紙は、レイシエスを微笑ませる。

彼女が許せば、あつという間に扉の中に飛び込んでくるだらつ。

ノックの紳士ぶりが、まるで嘘のよう。

微笑みを、最後には苦笑に変えてしまった。

心の中で、公爵になる自分と女の自分が向き合つてゐる。

全ての利害の一致しないその一人が、自分に向かつて甘言や苦言を投げようとするのだ。

公爵になる自分が、つい少し前まで確實に強かつたというのに、今日は少し疲れたせいか、女の自分の声をうるさく感じた。

それもこれも。

多分。

スタッフアのせいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2062w/>

南の海を愛する姉妹の四重奏

2011年11月24日19時54分発行